
ISDS インフィニット・ストラトス~DualStory~

ノーネーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISDS インフィニット・ストラトス〜DualStory〜

【Nコード】

N3096P

【作者名】

ノーネーム

【あらすじ】

子供を庇って事故死したら実は予定外の死！？

天寿を全うするために平行世界へ転生させられたらそこはラノベの世界。

男尊女卑ならぬ女尊男卑な世界に転生した少年、藤原刹那は何を見る？

「俺が、ガダムだ！！」（ネタです）

転生開始

「うー、ラノベラノベ」

今、ラノベを求めて田舎の商店街の本屋へ走る俺は専門学校に通う極々普通の成人男性。

しいて違う所を上げるとすれば、ラノベと漫画とロボットアニメが三度の飯より好きってことかナー。

そんな訳で今日発売日のラノベを買いに疾走しているとき、車道でボール遊びをしている小っちゃい男の子を発見したんだ。

「おーいぼうや、そんな所で遊んでいると車が来るから危ないよー」

一応声をかけて本屋へ直行。お目当てのラノベを確保してさらに目ぼしい本が無いかチェックした後、帰ろうとした時、まだあの男の子が遊んでいたんだ。

ん？何かいかにも頭の悪そうな見た目のDQNなヤツらが乗った真っ赤なオープンカーが明らかに法廷速度無視して走ってくる。まずい、このままじゃああの子が！

考えるよりも早く身体が動いて男の子を突き飛ばす。その直後、キキキキキキ！ ドン！！！！

俺の身体は空を舞った。そして一秒にも満たない滞空時間の後、今度は地面と激突した。

やべ、轢かれた。指先すらまともに動かない。

「お、おいどうすんだよ！人轢いちまったよお！！」「知るか！コイツがいきなり飛び出すから悪いんじゃないか！！」「そりゃそう

だ、なら慰謝料と修理費もらってさっさと逃げようぜ！」

待てDQNども、人の財布を抜き取る前にまず救急車呼びやがれ……ってギヤア！？ こ、こいつら更に車で人の上を踏み潰して行きやがった。ああ、駄目だ。もう助からねえ。

おい野次馬ども、見てないでまず子供の面倒見てやれよ。額から血を流して泣いてるだろ？

げ、マジで意識が薄れてきた……買ったラノベ、読み……た、かつ……た……

という訳で、俺は死にました。

え？ 何で判るのかって？ あんな痛みは夢じゃすまないよ！

そして俺の頭の上にあるんだよね、天使の輪っかっぽいのが。

そして俺の目の前には前時代的な裁判官みたいなオッサンが……
テンプレ通りなら閻魔大王だわ。

「何と言う事をしてくれたのだ、貴様は……」

いきなり死刑宣告！？ 俺何か悪い事しましたか！！？

「当たり前だ！ 貴様が予定外に死んだため冥界中が大慌てだ、こ

の愚か者があー！！」

はい？　じゃあ俺はあの男の子の変わりに死んじまった訳？

「いいや、あの子は轢かれたものの、奇跡的にボールがクッションになって無傷で助かる筈だった。それも将来ノーベル賞をとる予定だった人物の頭に怪我を負わせるとは何事だ！」

え、何その幽々　書方式。　じゃあ俺は無駄死に？

「まったくもってその通りだ。輪廻転生システムは貴様が考えている以上にデリケートなのだ。身代わりならば兎も角、予定外の死は天国も地獄も受け入れることは出来ん。貴様には平行世界に転生してもらおう。以上」

ちょ、その天井からぶら下がっている紐は何ですか？　嫌な予感がするから引っ張らないで！　って引くの！？　俺の足元がカパッと開くとそのまま底の見えない落とし穴に俺は落ちて行った。

まったく、予定外に死ぬなど手間をかけおつて。

まあ、子供を助けるために行動したのだからそのくらいは大目に

見てコイツが好きな世界に転生させてやるか。ふむ、あいつが死ぬ前に持っていた本、この世界にするか。

だがこの世界では力がなければなるまい。ならば主人公と同じ力を、そして両親にコイツが最強だと思っモノを作らせるとするか。コイツの記憶を検索して……これにするか……

では精々第二の人生を全うするのだな。

閻魔大王の机に置かれている彼が死の直前購入したライトノベルが置かれていた。

彼の血で汚れているもののタイトルは何とか確認できた。

そのタイトルはIS<インフィニット・ストラトス>と……

各種設定（前書き）

以下今後のネタばれ有
いやな人は回れー右。

各種設定

<登場人物>

ふじわら せつな
藤原刹那

本作の主人公。4月9日生まれ、本編開始時は15才。世界でも数少ないISを使用できる男性。そして転生者。最初は知識こそあったものの、15年以上の歳月により劣化してしまい、大まかな流しか知らない。

千冬をからかうことに命を賭けると言う困った趣味の持ち主であり、一夏からは姉たちの暴走を唯一止める事が出来る最終兵器と呼ばれていた。

かつては織斑家の隣近所に住んでおり、両親がいない一夏と千冬を母が気にかけて面倒を見ていたため半ば兄弟のような関係であった。また、祖父と両親は科学者でありその筋で篠ノ之束とも昔から面識があった。

誕生日が早い事から幼馴染組の兄貴分的存在となる。

中学生にあがる直前に両親を事故^{テロ}で失い、その理由が両親の研究成果であることを知って残された研究成果と千冬と束の支援の亡国機業を追っていた。

一夏のIS学園入学に伴い、千冬の指示で入学する事になる。

おりむら いちか
織斑一夏

この物語のもう一人の主人公。主に話は刹那視点・一夏視点・第三視点で進められる。

白式のマイスターであり、C・B・社IS部門2人目の社員である(もつともバイト扱い)。

無自覚に多くの女性をおとしてしまいが天然のタラシだが、そのアプローチに気付かない超が幾つ付くか判らない鈍感。

刹那の評価は天然ギャルゲ主人公。

ふじわらいおり
藤原伊織

刹那の祖父にあたる男性。一夏や篤などにも優しいお爺ちゃんとも慕われていた。また、学生時代からの束の科学の師でもあった。

太陽光発電を始め宇宙開発関係などに尽力を尽くすも、自分が発見した特殊粒子を生み出す半永久機関を提唱したため学会を追放された異端の天才。

学会追放後は息子夫婦に研究を引き継いでもらい隠居していたがしばらくして失踪し現在は行方不明。

モデルはもちろんあの人です。

しよのすのすの
篠ノ之束

東雲亜理子という偽名でC・B社の社長兼技術開発主任をこなす24才の女性。

人間関係は身内とその他でしか区別できない。身内どうかによって態度が180度違う。身内に対してはただ甘。

伊織を師として尊敬しており、昔から藤原家に入りりしていたので刹那とは顔見知りだった。自分の両親より刹那の両親の方が優先度が高かったらしく藤原家に入り浸っていた。

刹那にべた惚れで、彼のために色々尽くす。ただし彼から苛められる事が大好きなDM。

刹那曰く、料理の腕前は呪われているのではないかというレベル。殲滅料理の使い手である。

実は実家の剣道場で免許皆伝を持っており本気の千冬と同等に切り結べるという、文武両道と名実共にこの物語でのトップチート。

織斑千冬おりむらちひゆ

IS学園で教師をしている24才の女性。下手な男より男らしく生徒達よりお姉様と呼ばれている。

第一回IS世界大会「モンド・グロツソ」の総合優勝をはたした実力者。

刹那の見抜いたとおり極度のブラコンで弟である一夏を影ながら溺愛しており、その関連で彼女は刹那にからかわれる運命にある。

篠ノ之箒しののほのぬき

一夏と刹那とは幼馴染の少女。かつて実家は神社兼剣道場をしていた。

原作とは違い、束に手を引かれて藤原家に入りしつたため小学校に入る前から一夏と幼馴染になった。

一夏に恋心を抱いているのだが、当の一夏からは「箒は刹那が好き」と勘違いされているため彼女の恋路は前途多難である。ちなみに箒は刹那の事は兄的存在としてしか見ておらずLoveではなくLikeである。

自分に厳しく、素直になれない性格であったが刹那の後押しにより少し素直になろうとする。

<組織>

C・B・社

正式にはソレスタル・ビーイング社。

刹那がテストパイロットを務めていたとされる会社。

3年前に設立した新興の会社であるが低価格高品質を謳い、IS
パーツの製造で有名になりつつある。

書類上は新機軸の試作機としてエクシアと白式をIS学園で運用
データを取っていることになっている。

実は刹那と束が身を隠すために創った会社。社長兼技術主任は東
雲亜理子。

<IS>

エクシア

刹那の両親が設計し、束が完成させたISモドキ？ 正式にはI
Sガンダム第二形態エクシアとなっているがそれを知る者はいない。
待機状態は腕輪。

外見はガンダムエクシアに酷似した全身装甲フルスキンタイプ。素人である
一夏も見抜けるほどこの世界では異質な存在である。

既に第二移行セカンドシフトしている。単一仕様能力は装甲内に貯蓄した圧縮粒
子を一斉に放出することでカタログスペックの3倍以上の能力を引
き出す「トランザム」。

コアは従来のものとは違いGNドライヴを採用し、高い戦闘能力
を持つ。書類上一応試作第三代機とされている(ただし束と千冬

の見立てではGNドライブ対応機は第4世代、もしくは第5世代機相当と目されている。

装備は基本的に多種多用な7本の剣「セブン・ソード」を採用しているが他にも高機動オプションの「アヴァランチ」など多数のオプションが用意されている。

また、亡国機業を追っていた時にはガンダムアストレアFのようなフェイスマスクを装着し、擬装装甲を装備していた。

IS学園に通うようになっては、絶対防御すら切断可能となりうるGNソードとGNブレイド、単一仕様能力を封印。ワンオフアビリティ更にGNドライブの出力に制限をかけられるがそれでも各国の第三世代機を超える能力を持っている。

アストレア

過去に刹那が使用していた状態のエクシア。形状はガンダム00Pに登場したガンダムアストレアに酷似していた。正式にはISガンダム第一形態アストレアとなっているがやはりそれを知る者はいない。

最大の違いは背中のスリースラスター型のGNバーニア。GNドライブの性能を最大限にまで引き出せるがその反面負担が大きいため第二移行形態になった時にコーン型へ進化した。

近接戦主体の第二移行形態と比べ、汎用性に重点を置いている。外伝もしくは過去話で登場予定。

エクシア・R2

今後予定されているエクシアの第三移行形態。詳細は後ほど。

オーガンダム

白騎士事件の裏で出撃した謎の機体。カラーリングは白と黒。当時の目撃例が少なく、電波障害によりほとんど観測されなかったため戦場の都市伝説か眉唾ものとしか認識されていない。

刹那の両親が建造した人類初のGNドライヴ対応機であるが当時のマイスターは不明。三年前の事件の後、刹那がマイスターとなり短い間だが戦場に出た。

現在は束のもとに預けられ解体、ダブルオーのコアの一つとなっている。

ダブルオー

現在開発中のエクシアの後継機。

詳細は後ほど。

束専用セファールラジエル

設計データのみであったラジエルを束が自分専用にと独自に再現した機体。待機状態はウサミミカチューシャ。

エクシアとは違い従来のISの基準に則った機体であり、つまり俗に言うMS娘状態。

機体動力は通常の駆動エネルギーにGNコンデンサに蓄えられたGN粒子を使用している。後に擬似GNドライヴに変更予定。

最大10機までGNプロトビットを装備できるがこれを全て扱えるのは世界でも束だけと思われる。

基本装備はGNビームサーベル、GNロングビームライフル、GNプロトビット。

白式^{びやくしき}

C・B・社が開発したとされている試作IS。待機状態はガントレット。

織斑一夏の為だけに設計されたISであり、近接型の中では最も高いスペックを誇る。

反面、特殊能力のため拡張領域^{ハススロット}はおろかFCSすら潰され全体の98%がそのシステムに費やされている。刹那の評価は真の騎士の為の決闘用。

少しでもシールドエネルギーを節約できるよう刹那により多目的追加装甲 ナックルシールド が追加された。

紅椿^{あかつばき}

箒がテストパイロットを務めることとなるC・B・社の試作3号機。

白式とエレメントを組む事を前提として設計されているらしく、コアは箒に最もマッチしたものだという。

詳細は後ほど。

磨修羅生・魁^{まおしらいひ}

日本政府が打鉄の後継機兼次期主力機としてC・B・社に試作を依頼した第3世代級汎用型先行量産機。東はこの依頼に対し、とあ

る条件を出す^がそれが一部の人間らに嵐を呼ぶことになるのは神ならぬ身の彼女には知る由もない事である。

カラーリングは黒をベースに赤のラインが入っている。形状は戦国時代の武將を模した鎧。名称はこれを見た刹那の呟きから付けられ、更に束が「先駆け」と掛け合わせて「魁」の字を追加した。

テストパイロットは刹那と千冬、そして千冬が選出したIS学園の生徒たちによって幅広いデータが取られる。

紅椿と同じフレームから構成されており、短期間で建造された。

初期段階ではビット系兵器や変形機能を搭載する予定であったが政府の要望により擬似GNドライヴを搭載する事になった。両腰のスカート部分に1基ずつ計2基が搭載されており、操縦者の方で出力を抑えた扱いやすいシングルドライヴモードと出力が高いがそれ相応の腕を要求するダブルドライヴモードを選択できる。

一応擬似トランザムを使用できるものの、3秒間で擬似GNドライヴが焼ききれてしまうため基本的にリミッターが設定されている。アンロックユニット非固定浮遊部位には基本的にGNバルカンとGNキャノンが一体となった武装ユニットが装備されているが、操縦者の好みでGNバニア式フィン・スラスタに換装することが出来る。もっともフィン・スラスターでは機動出力が高すぎるため慣れたベテラン用となっている。

唯一の欠点は一般的なISの駆動エネルギーを擬似GNドライヴでGN粒子に変換して対応しているため、活動時間に限度があること。

主な武装はビーム発信器を内蔵している専用近接ブレード『不知火』と『雲龍』。そしてその2つを連結した『掃天』と近接寄りである（GNソードのようにGN粒子を纏う機能はない）。

制式採用後に増産されることとなる2号機以降は刃鉄はがねの正式名称がつけられる事となる。

<技術・装備>

GNドライブ

藤原博士が開発した半永久機関の一種。別名太陽炉。

大きさは手のひらサイズの300ミリ缶ほど。

起動すると常に特殊な粒子「GN粒子」を生成し続け、機体の稼働エネルギーやに高濃度に圧縮した粒子を利用したビーム兵器や推進剤など様々な用途に利用できる。他にも重量を軽減する重力制御や装甲表面に粒子の防護幕を形成することで防御力を強化したりリーダーや通信機器を使用不能とする。

ISのコアとして利用する事が出来るがドライブのコアユニットの8割が解析不可能であり、更に開発者である藤原博士が亡くなったため元々製造されていた二基以外には存在しない。

擬似GNドライブ

GN粒子を生成するのではなくエネルギーを粒子に変換するGNドライブの代用品。

しかし、大きさはオリジナルGNドライブより遥かに大きくISの背中に納めることは出来ない。また、コアとして利用する事もできない。といった違いが上げられる。

オリジナルと比べて出力は同等か少し低いかであるが制限時間が付いてしまっている。また粒子の色がオリジナルとは違っている。

二種類存在し、亡国機業が強奪した資料から作り出した擬似GNドライブの粒子の色は血の様な真紅であり高濃度に圧縮されると強い毒素を発生させてしまう。対して束がC・B・社で改良を重ね問

題点を解決した方の粒子の色はオレンジ色となっている。

GNソード

大剣と大型拳銃と小型バックラーシールドを組み合わせた武装でありエクシアの主武装。

GN粒子を纏って絶大な切断力を誇るソードモードと、刃を折り畳んで連射可能な小型ビームガンであるライフルモードを使い分ける多目的武装でもある。

ソードモードでは手持ち武装として扱いにくいためグリップ部分が動いて通常の剣に近い形でも使用できる。

絶対防御すら切断可能なためIS学園では禁止されていた武装その一。なんてこったい。

GNブレイド

エクシアの両腰マウントできる大小二本の剣。

素材や原理はGNソードの刀身と同じで絶大な切断力を誇る。

絶対防御すら切断可能なためIS学園では禁止されてしまった武装その二。なんてこったい。

GNバルカン

エクシアの両腕のスリット部分に内装されている小口径の粒子ビーム機関銃。

基本的に牽制・迎撃用としての意味合いが強いが、ISの武装程度ならたやすく破壊できる。

GNビームサーベル

エクシアの肩後ろに取り付けられている粒子ビーム剣。従来のISの技術では実現不可能なビームの固定化をGN粒子の応用で実現している。

使用時は脇の下にそり上がってきてそれを引き抜く。

機体の手からのGN粒子を供給されてビームを発生させているが、内部にGNコンデンサを搭載しており、短時間だけなら一般機でも使用できる。

GNダガー

エクシアの後腰に取り付けられている短剣状の粒子ビーム剣。基本的な原理はGNビームサーベルと同じ。

ビームの刀身はGNビームサーベルに比べて短いが、その分収束率が上がっているため高い攻撃力を誇る。

最も、手に持ってナイフとして使うのではなく近距離の相手に投擲することを目的としている。

エクシア専用GNビームライフル

短銃身で取り扱いに優れたビームライフル。

サイズに似合わず高い出力を持つ。

GNビームピストル

通常はホルスターコンテナに入れて脚部に装備されている連射性に優れたビームガン。代わりにビームライフルに比べて威力は低い。銃身下部にFCS内蔵の専用サイトが設置されており、FCSのない白式でもある程度なら使用できる。

通常はエクシアより供給されるGN粒子を弾とするのでエネルギーがある限り無制限であるが、GN粒子非対応機では内部のGNコンデンサに貯めている分しか使用できない。最大充電で20発。

GNビームスナイパーライフル

狙撃用の大型ビームライフル。

高威力を誇る反面、近距離の相手に対しては対応できない。

使用時にエクシアは狙撃用のセンサーマスクを装備する事で命中率を上げる事ができる。

GNランチャー

エクシアに装備できる武装の中で単発で最高の攻撃力を誇る大型ビーム砲。ただし連射できず、GN粒子の消費も早い。

両手と両肩に計四挺装備できる。その状態をクアッドランチャーモードという。

GNロングビームライフル

東専用セファールラジエルの主力兵装。

ロングバレルタイプのビームライフルで射程が長いが出力はエク

シア用のビームライフルと大差ない。
ロングバレルゆえ取り回しが難しかったため、東が独自に銃剣形態を追加した。

GNプロトビット

セファールラジエル、及びGNセファールを装備したエクシアの特殊武装。

最大で10基まで搭載、使用できる。機体接続時には天使の翼のように展開されており、追加スラスターとしても利用できる。

このデータはイギリスに提供され、ブルー・ティアーズの制御システムに流用された。

<事件>

白騎士事件

本編時間軸より10年前、宇宙開発用に開発されたはずのISの兵器としての性能を世界に知らしめた出来事。白騎士とは第零世代ともいうべきIS1号機の名前のこと。

世界各国から日本へ向けて発射された約2000発のミサイルを一機のISで大半を叩き落とした事件。（もう一機謎のISの目撃情報もあるが信憑性は薄いとされる）

その事件の真相は、当時白騎士のテストパイロットをしていた千冬の「白騎士の全力を試してみたい」という呟きを聞いた聞いた東が世界中にハッキングして作り上げた、曰く「ちーちゃんの為だけ

のオンステージ」。

事件後、藤原家で二人が正座して一晩中お説教されていた光景を刹那が目撃している。

過去を日々書くのも面倒なので一気に飛ばしてみた

ども。予定外の死亡の所為で天寿を全うするために平行世界とやらに転生させられた名無しの権兵衛です。この世界では藤原刹那という名前の男の子です。

今年で15才になった俺は現在：戦場にいました。

いえ、戦場というには少し違います。そこは某国の山奥に存在する施設だ。その山周囲に住んでいる住人すら知らない場所にその施設はあった。そうあった、過去形だ。それは現在は俺によって使用不可能にまで破壊され、炎と黒煙を上げている。

その瓦礫の中には最強の兵器であるISの残骸が転がっている。

IS：正式名称インフィニット・ストラトス。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。総機体数は467機。

とある事件を切欠にパワードスーツとして軍事転用が始まり、構想発表より約十年経った現在では世界各国の軍に第2世代機が標準配備され、第3・第4世代機の研究開発が進んでいる。

その戦闘能力はそれまでの主力であった戦闘機や戦車をも凌ぎ、世界そのものを変貌させた。

そのISの唯一の欠点、それは女性にしか扱えない事。これにより緩やかに男尊女卑から男女平等に変わっていた世界は急激に女尊男卑が当たり前となった。それが、この世界。俺たちの生きている世界なんだ……

そう、俺が転生したのは奇しくも死ぬ直前に購入したラノベ、インフィニット・ストラトスの世界だった。

戦場に立つ俺もまた機械の装甲、ISを纏っていた。いや、これをISと言っているのか、むしろISに似た何かといった方があっているのではないだろうか。

原作では男性でISを使えるのは主人公である織斑一夏のみであったが俺も何故かISを使用することが出来た。

俺のISの名前はエクシア。全身を被う全身装甲フルスキンタイプであり色は白と青のツートンカラーに特徴的な緑色の特殊粒子を生み出している背中のコーン型スラスタ。何処から見ても機動戦士ガンダム00に登場したガンダムエクシアです。最も現在はガンダム00外伝に登場したガンダムアストレAFのようなフェイスマスクを取り付け、一部擬装装甲を装備して姿を変えているが。

エクシアはこの世界の今は亡き両親が作り上げた試作品なのだが何故かコアに採用されているのはGNドライブ。……この両親一体何者？

俺の周囲に転がる残骸は機種も世代もバラバラだった。既に退役した第1世代ISもあれば今だ現役で運用されている第2世代IS、そして少ないが次期主力ISや試作ISの成れの果てがうむ言わぬ軀となりてその地に散らばる。その中に少ないがISの操縦者であったモノの一部も含まれている。

すでにこの施設に俺が探すものはない。とんだ無駄骨だ。

両親を殺されて生まれ故郷である日本を飛び出してからすでに3年が経とうとしている。両親を殺しGNドライブの研究資料と試作機を奪っていった奴ら、原作での敵組織である亡国機業を追ってこんな離れた土地にまで来てしまった。

空を見上げる。煙が立ち昇る夜空にはこの状況に似合わぬ星空と黒猫。

ここまで派手にやったのだ。この国のIS部隊が出てくるまでそ

うそう時間もあるまい。俺とエクスシアであれば第2世代の量産型ISの10や20は軽く捻れるが流石に今の段階で正規軍と事を構える気はない。

『ん？』

そこまで考えて、ふと思いたった。黒猫？ そうブラック・キャットだ。

夜空に黒猫が浮いている、というより落ちてくる。それも絵本の挿絵などでデフォルメされたような愛くるしい姿の猫だ。

キイイイイン……ドゴオン……！！

黒猫が俺の前に盛大に突き刺さる。猫は下半身が埋まっている。

「はろーせつちゃん」

ぱかっとなつ二つに割れた黒猫の中から登場したのはネコミミ付の三角帽子に魔女のような黒いローブを身につけた女性だった。

『…タバ姉』

「そーだよ、東さんだよー」

そのネコミミ魔女はISの生みの親である天才にして史上最凶のトラブルメーカーであり、俺にとって昔からの付き合いのある篠ノ之東であった。ちなみに公式記録では絶賛行方不明中である。でもなぜ魔女姿？

「まったく、せつちゃんの所為でこの国の偵察機に撃墜されそーに

なっただよお」

『何で俺の所為なんですか…連絡なら普段通り電話でいいじゃないですか』

ぶんぶんと言いながら怒った仕草をするタバ姉。ふと目を向けてみると黒猫の所々が凹んでいた。ミサイルでも当たったのだろうか。取り合えずエクシアの強化されたハイパーセンサーで周辺に危険も他に人もいない事を確認するとエクシアを待機状態の腕輪に戻す。数秒も掛からぬうちに量子化され腕輪として俺の腕に納まった。

「はい、魔女の宅急便だよー」

ああ、だから魔女姿なのか。今回は一人魔女の宅急便と。以前の一人ヘンゼルとグレーテルよりはましだけどさ、あれは意味不明だった。

差し出された封筒を開けて中から手紙を取り出して読む。

「サクラサク、IS学園………って何、だと…？」

そこに書いてあったのはIS学園の合格通知。書かれている受験者の名前は藤原刹那…俺の名前だ。

IS学園、それは名前の通りISの操縦者を育成するため世界各国から少女達が候補生として集められる国立学園だ。その性質上極一部の用務員を除いて学生教員全て女性で構成されているのだ。……それと念のため言っておく、俺は生物学上男だ。

「タバ姉！ これは一体!？」

事の事情を問いただそうと本人を見るが、

「はい、私だよー。うん、今せっちゃんもいっしょ、かわるよー」
携帯電話で話していた。それも俺に代われというのか携帯電話を
はいっと差し出してくる。

「……もしもし？」

『お、刹那か、久しぶりだな』

「チー姉？ お久しぶりで」

繋がった電話の相手は実家のご近所であり、幼馴染姉弟の姉のほ
うである織斑千冬、通称チー姉だった。

『と言う訳でお前も4月からIS学園に通え。ちなみに拒否権はな
い』

「いや、だから何がと言う訳なのか知らないが、俺は男だ。通える
訳がないだろ」

『だがISを使えるだろ、それに男だからという言い訳はもう通じ
んぞ。一夏がISを動かせることが知れ渡ったためあいつも強制入
学することになった』

「は？ 一夏が？」

そういえば<インフィニット・ストラトス>ってそういう物語だ
ったな。もう十五年も前に読んだのが最後だからおじさん忘れてた
ZE。

『ああ、受験会場を間違えて試験用ISに触ったら動いたんだとよ。まったく、あれほど注意を払って遠ざけていたというのに…』

「そういう運命なのかもな、俺たちは……」

『だからお前もIS学園に通え。どうせそつちは殆ど何もつかめてないんだろ？ それならそろそろエクシアを表に出したほうがいいと思うが、それに一夏にデータ取り用と称して渡されるISは白騎士の後継で束謹製の第4世代機だ。奴らへのエサとしては十分だろ』

「はいはい、そして飢えた女子生徒の群れから一夏君の貞操を守れと言っ事ですね。わかります」

『な、なにを言って!!?!』

「まったく、血の繋がった実の弟を愛してやまないのは本人の勝手だが流石に近親相姦だけはおじさんどうかと思うぞ。この真性ブラコン」

『せせせせええつなあああ!!!!!!』

まったく、普段の完璧超人とはかけ離れた慌てように隣で聞いていたタバ姉もお腹を抱えて笑い転げている。やはりチー姉をからかうにはこのネタが一番だな。

『くう……後で覚えてろよ!!』

からかわれた事に気付き捨て台詞をはいて乱暴に受話器を置いた音が聞こえた。

「ねえねえせつちゃん」

「何だよタバ姉」

「えつとねえ、この国の軍隊に囲まれてるんだよー」

はい？ 周囲を見渡してみる。確かにこの国の第2世代型軍用ISを装着した女性が3人程と通常装備の軍人数人が包囲網を狭めて来ているのを確認できた。

くそつ、チー姉をからかうのに集中しすぎたか。

「大丈夫だよ、せつちゃんとエクシアならこんなポンコツどもなど瞬殺できるよー、さあレッツゴー！」

「何がレッツゴーだ！ 正規軍と事を構えたくないからさっさと帰ろうとしたのに……」

「せつちゃん、男は度胸だよ。いけるいける」

俺は無言でタバ姉にアイアンクローをかけるとそのまま片手で宙吊りになるようぶら下げる。俺の肉体もなかなかチート。

「い、痛い痛い……でも、嫌いじゃないの！ もつとお……
…ハアハア……」

ぶらんぶらんと揺れていたタバ姉が最初こそ悲鳴を上げるが次第に艶っぽい吐息を吐きはじめる。

駄目だこのDM、早く何とかしないと……

『篠ノ之博士ですね？ 探しましたよ、我々と来てもらいましょう』

か
』

ちっ、もう来やがったか。全員アサルトライフルを構えている。とりあえずアイアンクローを解除してタバ姉を解放する。

「うっ、もう少しでイけたのに……」

『ふふふ…これで我が国のIS技術は飛躍的に進歩する。そっちの男などいらん。処分しろ』

タバ姉が何か言っているが無視。古典的な女尊男卑主義らしい女性指揮官の合図と共に無数の弾丸が俺を撃ち抜こうとするが、

「エクシア、GNシールド」

慣れた手付きでエクシアを展開し左手に打撃武器にも使える菱形に近い形の盾を展開して正面からの銃弾を弾き、それ以外の方向から放たれた銃弾も薄く張られたGN粒子の幕によって防がれる。

『な！？ 男がISを！！』

「敵対勢力と断定、GNソード……エクシア、目標を駆逐する！」

右手に大型ハンドガンと小型バックラーシールドと両刃の剣を一体化した武器を展開するとエクシアを走らせた。

その日、某国は爆発事故の調査に合わせた貴重なIS3機を失う事となった。最後に発せられた報告によれば現場付近で指名手配中の篠ノ之博士を発見し拘束連行するとあったがその直後に起こった電波障害により通信は途絶。後日現場周辺でその部隊のISだと思われる残骸が発見された。

学園までは何マイル？

ペラリ。と俺は幾つものモニターが設置してあるデスクに向かつて某電話帳並に分厚い参考書をめくった。表紙にはIS学園の校章と共に『必読』の注意文が書かれており、中から大量の付箋がはみ出している。

もっとも、色々とこの世界に携わっている俺にはこの程度の基礎知識など復習程度にしかならず、半ば暇潰し感覚で流し読みしていた。

部屋を見渡してみる。ここは研究所兼書斎兼プライベートルームなのか、広い部屋のデスクの左側には山積みになった絵本や雑誌が、右側には多数の公式や数式が記された大型ホワイトボードが立てられている。

当然の事ながらここは俺の家ではない。俺の家は両親の死後に全て処分し、現在は名も顔も知らない他人が住んでいるはずだ。

ここはタバ姉が日本国内に確保している極秘研究所の一つだ。なおこの手の極秘研究所は世界中に多数存在しており、その数や場所は俺でも全て把握できない。

IS学園へ入学まであと数日となった今、俺がここに来ているのはエクシアの調整と主人公兼幼馴染の弟分である一夏の専用ISである白式を受け取りチー姉に届けるためだ。

GNドライブについてはそのコアの8割がブラックボックスであり、その全てを知っていた両親が亡くなり、その資料すらほとんど失われた今となつては多少その知識がある俺とタバ姉にしか調整できない。

といつても整備できるだけで詳しい情報は判らず、天才の称号を欲しいがままにしているタバ姉でも完全に複製する事は出来ない。だからホントにこの両親何者なのだろう。残された日記からすると祖父の代から研究がすすめられていたとか。科学者の一族な

のだろうか、この家系は。

ちなみに両親が残したGNドライブは2基。1基はエクシアに搭載され、もう1基はタバ姉が保管している。

「せつちゃん、エクシアの調整終わったよー」

お馴染みのウサミミにお気に入りの青と白のワンピース姿のタバ姉が部屋に入って来て待機状態である腕輪となったのエクシアを渡される。

「GNドライブは問題なし、擬装を解除して注文されてたGNブレイドを追加したよー」

受けとったエクシアを機動し、淡い粒子に包まれて俺は全身装甲フルスキンタイプのISを身に纏う。その姿は今までと違い擬装装甲を撤去したためよりスリムになり、顔にはフェイスマスクを取り外したため二つの目に口により人間めいた造形をしている。

俺はリストからGNブレイドを選択する。瞬時に両腰部に具現化したのはIS用の近接ブレードに何処となく似ているが更に無骨な印象を与える大小二本の剣、GNロングブレードとGNショートブレイドを腰から引き抜く。

「GNソードの刀身と同じでGN粒子を定着させることでISでもバリアードどころか絶対防御ごと両断できるんだよ」

左右のGNブレイドを弄る。流石タバ姉、サイズ重さ共に良い出来だ。

「でもちーちゃんからあくまで訓練なんだからGNソードとGNブレイド、それに単一仕様能力はIS学園での訓練中は使用禁止ってワンオフアヒリデイ

「言われちゃった…」

「がっかりしたような口調に乗じてしょぼんとウサミミが垂れる。このウサミミ一体どういう構造になっているのだろう？」

「でもそれだと武装は近距離用だけになっちゃうから汎用型のGNビームライフルも追加しておいたよ」

GNブレイドを量子化して格納すると今度はGNビームライフルを選択する。右手にガンダム00の外伝で登場したガンダムアストリアが使用した銃身が短めのビームライフルが具現化する。

「了解、できうる限り使わないようにする」

一連の点検を終えた俺はエクシアを待機状態に戻す。

「うんうん、それと他の装備の完成度だけドヴァアランチユニットは80%、フル装備だと75%。GNアーマーは45%って所かな」

「そうか、アレの方は？」

「まだまだ完成度15%未満、基礎フレームも完成してないよ。元々おじ様とおば様が残してくれたツインドライヴシステムだっただけ完成してなし、第一に鍵の一つはせつちゃんが持つてるじゃない。多分早くても来年か再来年になるよー」

「そうか、使う事が無ければいいがそうも言ってもらえないかも知れない……じゃあタバ姉、俺そろそろ行くよ」

「うん、行ってらっしゃい。白式はコンテナに入ってるから忘れな

いでね。それといっくんと篝ちゃんによろしくー」

そして主以外に誰も居なくなつた研究所で束は目を瞑り物思いに耽つていた。

「世界を変革させられるIS…白式、紅椿、そしてダブルオー……」

彼女の脳裏に浮かんで居たのは背中合わせで互いを守るように戦う白の騎士に赤の侍、そして両肩から緑の粒子を翼の様に放出する青の天使の姿。そしてそれを纏うのは彼女の妹とその幼馴染の少年達。

「ねえ、みんな。満足してる？ この世界に」

薄っすらと目を開けた束は誰にと無く呟いた。それは先ほどまでのおどけたような声ではなく何処か冷たい。

「私は、ヤダね」

右手の人差し指を銃口に見立ててモニターに向けると彼女はおどけたようにバァンと引き金を引くふりをした。

そのモニターにはX字型のバーニアに顔に四つの目が特徴的な灰色の機体の設計図が映し出されていた。

クラスメイトは全員女？

「連絡のあった藤原さん以外は全員揃ってますねー。それじゃショートホームルームはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。生徒達とそう変わらない小柄な体系なのに服と眼鏡のサイズが合っていないのか『子供が無理して大人の服を着た』か『子供が背伸びしている』といった印象を与えている。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

しかし帰って来たのは沈黙、教室の中は変な緊張感に包まれている所為か誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

涙目になりながらちよつとうるたえる副担任がかわいそうなので、何か反応するべきだったのかも知れないが、今の俺にそんな余裕はない。

なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

俺、何でここに居るんだろう。

何度も自問した問い。正確な回数は不明、百を越えた所で数えは事を止めた。

そもそも今日は高校の入学式。めでたい事だ。それはいい。

駄菓子菓子…ではなくだがしかし、問題はクラスに男が俺一人と

いう点だ。別に俺は一昔前に流行った漫画やゲームのように諸事情により女装して女子高に来たとか、ここは今年から共学になった元名門女子高といった訳ではない。

この高校の名前はIS学園。IS…女性にしか扱えないパワードスーツの操縦者の育成を目的にした国立の教育機関でありその特性上、厳密には女子高ではないものの男性は数人の用務員を除いてそれ以外は全員女性という状態だ。

そもそも始まりは事故だった。

俺が本来受験したのは自宅からほど近い私立藍越学園。私立の割りに学費が公立並に安く、そして何より就職率が高い。

物心付いた時から両親がおらず、今まで姉に養ってもらっていた俺としてはそれを引け目に感じており早く安心させたかったのだが

……

何故か試験場を間違えてISに触ったら何故か動いてしまい、その後はISを扱える唯一の男としてIS学園に強制入学させられる事となってしまった。

ちなみに後で受験票を確認してみたら受験会場の住所が間違っており実は隣のビルだったとのオチだ。これは俺が悪いんじゃないよな。

しかしこれは、想像以上にきつい。席も最前列の中央なのか、自意識過剰ではなくクラスメイトのほぼ全員から視線を感じる。

ちらりと窓側の方に目をやる。何かしらの救いを求めている視線だったのだが、薄情な事にセカンド幼馴染こと篠ノ之篤はふいっと窓の外に顔をそらした。

なんてヤツだ。これが6年ぶりに再会した幼馴染に対する態度だろうか。もしかして俺嫌われてるんじゃないか？

「はい、それじゃあ次、織斑一夏くん」

「どうやら物思いに耽っていると俺の番になつたらしい。といつてもあいうえお順なのでそんなに時間は経っていないだろう。はい、と答えて起立して後ろを向く。一気に視線が集中し、女嫌いではない俺でもたじろぐ。」

「えー…えつと、織斑一夏です。よろしく願いします」

「おい、何だその『もっと色々喋って』とか『これで終わりじゃないよね?』的な視線は。そんなに喋らないぞ、趣味とか万人に知ってもらいたい訳ではあるまいし。」

「以上です」

「思わずにつこける女子が数人。何を期待したんだ？」

「あ、あの一」

「背後からかけられる涙声。え?だめでした？」

「パアンツ! いきなり頭を何か細いモノで叩かれた。具体的に言うとうと出席簿みたいな何か。」

「痛い、と言う条件反射より先にある事が頭をよぎった。この叩き方、威力、角度、速度。俺はよく知っていた。それで無い事を普段は存在の欠片すら信じていない神に願いつつ、おそろおそろ振り向くと、」

「げえつ、ターミネーター!!」

「パアンツ!! また叩かれた。さっきより痛い。」

「誰が未来から英雄を暗殺しに来たシユワちゃんだ、この大馬鹿者が」

トーンが低めの声。俺の中では既にズンズンズン、とターミネーターのテーマがエンドレスで流れてる。

マテマテマテ。何で千冬姉がここにいるんだ？ 職業不詳で月に一、二度しか帰ってこないマイシスターかつこ24歳・未婚・彼氏いない歴イコール年齢かつことじが。

パアンツ！ 何でまた叩かれる！？

「何か馬鹿にされたような気がしてな」

読まれてるー！！？

「お、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

俺の聞いた事もない優しい声。ターミネーターは何処へ？ 「I'll be back」と言いながら溶鉱炉へ降りていったのか。いえ、もう戻ってこなくて結構です。何？ まだ次回作があるんです？

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

なんとという暴力宣言。間違いない。これはそっくりさんなどでは

なく紛れもないマイシスター織斑千冬だ。

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

きゃいきゃい騒ぐ女子達を、頭が痛くて抱えているので見たわけではないが声色はかなりうっとうしそうだ。

それにすらも叱って、罵って、躰けてなどと黄色い声がとんでいく。

「で、満身に挨拶もできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パンツッ！ 本日四度目。知ってる千冬姉。頭って叩くと脳細胞が五千個死ぬんだってー（まめしばー

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

と、このやり取りがまずかった。つまり、実の姉弟なのが教室中にばれてしまった。さっきまでとは別の好奇心の視線にさらされる事となった。

そんなこんな事をしてるとチャイムがなった。

「さあ、ショートホームルームは終わりだ。諸君らにはこれから」

Sの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

何と言う鬼教官ぶり。

我が姉、織斑千冬は第一世代時代からのIS操縦者であり元日本代表なのだ。しかも公式試合での戦歴は無敗。ある日突然引退して姿を消す……って教師してたのかよ。せめて家族にくらい言えよ。心配した俺が馬鹿だった。

「さつさと席に着け、馬鹿者」

はいはい、どーせ俺は馬鹿ですよーだ。

千冬姉と山田先生が教室から出ると別の教師が入ってくる。

IS学園はコマ限界までIS関連の教育をするため、入学式当日から普通に授業が入っているのだ。

そして一時間目のIS基礎理論授業が始まるのだった。

「ようやく来たか」

一時間目の最中、千冬はIS学園の搬入倉庫まで来ていた。昨日届くはずだった二つの荷物がやっと届いたのだ。

「道中少々トラブルがあったが、それほど問題あるまい」

荷物を運んで来たもう一つの荷物が答える。

声色は男の…それも少年のものであり、彼が着ているのは一夏と同じく今年から増えたIS学園の男子用制服だ。

2人の前には人一人が入れるサイズのコンテナが鎮座していた。何を示すのか青い丸の中に翼のついた黄色い十字架と天使の輪が組み合ったエンブレムが描かれており、CとBのロゴが付いている。

「見えるか」

千冬の言葉に少年は一瞬きよんとするが直ぐに笑みを浮かべる。

「了解した」

少年がコンテナに備え付けられていたコンソールにパスワードを入力するとコンテナが開いていく。

その奥から現れたのは、白。

何者にも汚されない白き鎧。

ソレはまだ目覚めの時を迎えていない、ただ静かに待っていた。

「タバ…ではなくC・B・社の社長自ら手がけた試作・オルタナティブ・ゼロ魔改造機。

織斑一夏の為だけに創り出された代用無きものにてハイエンド最高性能にて規格外仕様の専用機…」

「これが…白式」

「そう、C・B・社の試作IS二号機、白式だ」

幼馴染と遅刻と決闘申し込み？

「ちょっといいか」

「え？………箒？」

一時間目の授業が終わって今は休み時間。授業の内容と周囲の空気に俺こと織斑一夏が悩んでいるなか、突然話かけられた。

目の前にいたのは、六年ぶりの再会になる幼馴染の一人、箒だった。

箒。篠ノ之箒。俺が普通っていた神社兼剣道場の子。髪型は昔と変わらずポニーテールで、肩下まである黒髪を白いリボンで結っている。身長は平均的だが、長年剣道で培った体はどこか長身を思わせる。

少し不機嫌そうに見える目は生まれつきとの本人の弁。いや、俺が嫌われている可能性もあるのだが。

俺の箒に対する第一印象は日本刀。それは六年経った今でも同じだ。いや、もつと鋭くなっているような気がする。

「廊下でいいか？」

教室では話しにくいことなのだろうか。まあ俺も今の状況から抜け出せるなら賛成だ。

「早くしろ」

「お、おう」

さつさと行ってしまう筈。俺も続いて出るのだが、教室の中から全員が聞き耳を立てているのがよくわかる。これじゃあ教室内と変わらない。

「……………」

「……………」

「そう言えば」

「何だ？」

呼び出しておいてなかなか話さないから俺の方から話を切り出す。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

筈は俺の言葉を聞くなり、顔を口をへの字にして顔を赤らめた。
「って何で怒るの？」

「何でそんな事を知ってるんだ」

「何でって、新聞で見た……………」

「な、何で新聞なんか見てるんだっ」

「いや新聞ぐらい読ませろよ」

何を言ってるんだ、筈は。

久しぶりに話したけど相変わらず男まさりというか、サムライガールだな。

「あー、あと」

「な、何だ!？」

だから何でそんなに剣幕なんだ？

「あ、いや…六年ぶりだけど、筈ってすぐわかったぞ」

「え……」

「ほら、髪型も昔と一緒だし」

「よ、よく覚えているものだな……」

「いや、忘れないだろ。幼馴染の事くらい」

そこまで言ったところでギロリ、とポニーテールを弄っていた筈に睨まれた。なんでー？

「おいおい、ここは同窓会の会場かなんかか？」

不意に背後よりかけられた懐かしい声。振り向くと、

「せ、せつ…な?……」

「刹那、なのか？」

「他に誰がいる」

そこに居たのは男の幼馴染。

お隣に住んでいたが3年前に両親の死と同時に失踪したファースト幼馴染こと藤原刹那だった。

少しウェーブのかかった黒髪を短く刈り込み、少し吊り上った目尻。かつての姿をそのまま成長させた幼馴染が俺達の前にいた。

「刹那、何でここに…？」

「見てわからないのか」

わからないから聞いている。

ここはIS学園。そして刹那は少し中性的だが男だ。そもそもって俺がいるのはISを動かせる唯一の男子というわけで……

パン！パン！痛い。隣の箒を見ると俺と同じように頭を抑えている。2回音が聞こえたのは片方は箒が叩かれた音なのだろう。

「もう次の授業が始まるぞ、さつさと席に着けお前ら」

「ち、千冬姉？ そんな事より刹那の……」

パンッ！

「さつさと席に着け、織斑」

「……わかりました、織斑先生」

箒はというと先にすたすたと席に戻ってしまったらしい。まったく薄情な事だ。

「一夏、また後でな」

「ん、ああ」

適当に返事して俺も席に戻った。

そして二時間目の山田先生の授業が始まったのだが、何故か最初に千冬姉が教壇に立った。

「授業の前に、入学初日から遅刻した馬鹿がようやく届いたのでこれから簡単に自己紹介してもらう。さっさと入って来い、藤原」

「ちよりーっす」

そして入って来て顔に似合わぬ暴言を吐いたのは先程再会した我がファースト幼馴染。

それに今しがた気づいたのだが、刹那が着ている服は俺と同じ男子用制服だった。

え？ 男でISを扱えるのは俺だけだったはずだよな？ でもIS学園の制服を着てここにいるということは刹那もISを扱える？ でも今まで一度も報道されてなかったぞ。されていれば毎朝必ずニュースをチェックしている俺の目に付くはずだ。

「真面目に挨拶できんのかお前は！」

ヒュン！ パシ。

す、すげえ…

千冬姉の頭に当たれば脳震盪確実な高速チョーク投げを刹那の奴は人差し指と中指の二本だけで軽々と受け止めやがった。ダブルすげえ。

「C・B・社所属の藤原刹那です。本社の関係で遅刻してしまいました。がこれから一年間よろしくお願いします」

さつきとは打って変わって真面目な声で簡潔に自己紹介をする刹那。

千冬姉に言われて着いたのは俺の隣の空席だった。

ってことは、つまり、俺、織斑一夏は、世界で唯一ではなく、世界で二人の、ISを扱える男性、という事か？

二時間目終了をチャイムが知らせる。

それまで教科書を読んでいた山田先生は「それじゃあここまで」と言って退室していく。

俺の隣の席に座っていた一夏（おそらくチー姉が気を回して席順を操作したのだろう）は机の上に乗ったままの分厚い5冊の教科書にぐったりとうなだれていた。

「…どうしたんだ、一夏」

「刹那……今の授業、専門用語とかの羅列で俺、全然わからないんだ……」

お前もだろう？ と目で聞いて来る。

「そうか？ 今の授業は事前に配布された参考書に全部載っていた事ばかりだったが」

「あー、それは多分古い電話帳と間違っ捨てた」

「…そう言えばお前は昔から説明書を読まずにゲームを始めるタイプだったな。そしてマトモに動かせなくて何度もゲームオーバーして、それから読み始めるのだったな」

一夏にぐさつと何か突き刺さったような気がしたがそんなものは何も無いので気にしない事にした。

「まあ、後で俺のノートと参考書を貸すよ」

「ああ、ありがとう！ やっぱ持つべきものは気の利く幼馴染だな！」

「貴方がた、ちょっとよろしくて？」

一夏が手を握ってきて感謝を示す中、俺たちは後ろの方より声をかけられた。

振り向いた先にいたのは少しロールした長い金髪の少女だった。確か…セシリア・オルコット、だったか？

「聞いてます？ お返事は？」

「ああ。聞いている」

「聞いているけど…どういう用件だ？」

一夏が先を施すとわざとらしく声をあげた。

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだ

けでも栄光なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

俺も一夏も押し黙る。正直このようなタイプは苦手だ。一夏もそうらしい。

確かにISはかつての戦闘機や戦車すら凌ぐ最強の軍事力だ。だからISの操縦者は偉い、そしてISを扱えるのは原則女性だけ。現在では女々しいという構図が出来上がっており、男は完全に奴隷もしくは労働力、と男尊女卑がひっくり返ったというより更に酷い状態になっている。

実際に男性が街中でパシリ扱いされるなど日常茶飯事に起きている事だが、全ての女性がISを、それも高度に扱える訳ではないのだからそれはどうかと思う。

一夏ではないがここまで来るとただの暴力になりかねない。

「悪いな。俺達は君が誰か知らないし」

一夏の答えに俺も頷く。

俺は遅刻で自己紹介には参加していなかったし、一夏は例え参加して聞いてても自分の事で精一杯で聞いてはいなかっただろう。

しかしそれは彼女にとってかなり気に入らないものだったらしく、目を細めていかにも見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入学主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくでしょ」

「代表候補生って、何？」

周辺で話を聞いていた女子数人がずっこけ、俺も肩の力が抜ける。横目で見ていた篤によつてはがくつと頭を机にぶつけていた。

一夏、少し言葉を考えればわかる事だろ。

「あ、あ、あ……」

「あ？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!?! もう一人の方は理解していらっしやるようなのに!?!」

「知らん。何なんだ刹那」

知らない事は素直に言うところは君の美点だと思っけど状況を考えよう。

オルコットさんなんか「信じられない。信じられませんわ……」とブツブツ呟きながらこめかみを人差し指で押さえている。

「国家代表のIS操縦者……つまり昔のチー姉のような立場になる前の候補者、一応エリートという事だ」

「そう！ エリートなのですわ！」

あ、復活した。びしつと俺たちに人差し指を向けてくる。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していた

「だける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

一夏、売り言葉に買い言葉なのだろうが流石に今のはお前の方が悪いと思う。

オルコットさんは一応冷静だが少し目元がひくひくしている。昔の格ゲーであつた怒りゲージがぐんぐん溜まってきているのが想像できる。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていきましたけどもう一人の方がマシですわね、期待外れですわ」

「いや刹那は昔から優秀だし、俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん。まあでも、わたくしは優秀ですから。まあ……泣いて頼まれば優しく教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試の実技試験で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「いや刹那に頼むからいい……って実技試験つてあれか？ ISを動かして戦うやつ？」

俺ではなくまず箒に頼め。良く知る人間でなければ気付かないのだがさつきまで『私に聞いて』的な視線を向けていた箒が俺を睨んできたぞ。

「それ以外にありませんわ」

「俺も倒したぞ、教官」

「は？……………」

「そついや刹那は？」

「……………あまり思い出させるな…引き分けだ……………」

また俺に振ってくる一夏。オルコットさんは驚きに目を見開いていたが俺の言葉を聞いて少し冷静さを取り戻したようだ。

俺は入試を一夏達とは別の日に受けたのだが、正直実技試験だけは内容が内容だけにあまり思い出したくない。

「ま、まあ、初めてなのですから仕方な……………」

「こっちは試験用の打鉄なのに本気^{ムツ}装備のチー姉…織斑先生相手に1時間以上ガチバトルしてた……………」

世界が止まったような気がしたがあまり気にしないようにした。

そう、実技試験のアリーナで試験用に用意された第2世代の日本製IS・打鉄を装備した俺の前に現れたのは実にイイ笑顔を浮かべたチー姉だった。使用しているのは打鉄ベースのカスタム機にお得意の近接ブレードだ。

どうやら以前からかった事がきいているらしい。

『荒んだ心に武器は危険なんです！』と言つてもチー姉は『お前は、お前だけはあ！』といって聞く耳を持たず、他の教師達が止めようとすることが構わず試験が開始された。

最初に後付^{イコライザ}武装で選択していたジャムグレネードで目とハイパー

センサーを封じて一気にケリをつけようと近接ブレードで死角から切りかかるがチー姉もそれに反応する。動きの鈍い打鉄とはいえ、一応必殺の一撃だったのにそれに反応するなんて、やっぱり普通の人間じゃない。

その後も気をそらさせようと今度はグラムネタを使ってみた。具体的に言うと『君の存在に心奪われた男だ』とか『この気持ち、まさしく愛だ』的なネタだ。もっともチー姉にはあまりきかず、外で見ていた他の教師たちがドン引きしていた。

後で聞いたら1時間以上切り結んでいたらしい。最後は『それでも、守りたい世界があるんだ』と近接ブレードで突きを繰り返した俺にチー姉の斬撃が同時にヒットし、お互いのシールドエネルギーを0にした。

後から思い出すとネタ台詞満載だったが第2世代ISであれだけの強さを引き出したチー姉の怖さが身にしみた。この学園にいただけは少しだけからかう事を自粛しようと思心に決めるのだった……少しだけな。

「……そ、それはそれですけどよ。俺の時なんて何度か避けたら教官が壁にぶつかって気絶しただけだったし」

一夏が呆れたようで、それでいて尊敬するような口調で言う。オルコットさんは何かショックで動けないらしい。

「さっさと席につかんか」

パン!

「っつ!?!?」

チャイムと同時に入ってきたチー姉の出席簿チョップがオルコット

トさんに直撃して彼女は涙目になる。ちなみに俺と一夏は席に座ったままだったのでチョップは喰らっていない。チー姉はむやみに暴力を振るうタイプではないのだ。

「織斑先生！？ 藤原さんの実技試験の事で…」

「パン！」

「ショートホームルームで私の言った事を覚えているな、オルコット？ ならばさっさと席につけ」

オルコットさんは不服そうな目をするもしぶしぶ後ろの自分の席に戻っていく。

「お姉さま！ そのことについて私も聞きたいのですが！」

「私もです！ 試験で藤原さんのお相手をしたのですか！？」

などとクラス中の女子の大半から質問がとぶ。

「とりあえず黙らんか」

面倒臭そうにチー姉が言うが一向に納まらない、それどころかヒートアップする。

「いい加減静かにしろ、馬鹿者ども！！」

そしてチー姉は両手にチョークをそれぞれ握り締めると乱れ撃ちのように次々と投げつけ、全てが騒いでいた生徒達の眉間に直撃する。直撃を食らった生徒たちが額をおさえて蹲ったため騒ぎは終息

した。相変わらずすごいコントロールだ。

「……まあいいだろう、答えてやる。確かに藤原の実技試験の相手は私だ。そして結果は相打ち、まったく10近くも下のガキにやられるとは、私もそろそろ歳だな。やきがまわったものだ」

「いえいえ、あなたが冷静だったらどうなってたかわかりませんか？

「さて、話はここまでだ。授業の前にまずは再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。代表者とはそのままでの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席：まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

突然の事にクラス中がざわめく。隣の一夏は最初こそ意味がわからないといった顔をしていたが、最後になると俺には関係ないやーといった感じの顔になっていた。

「はい、織斑くんを推薦します！」

おい、推薦されたぞ一夏。そんなのほんとした顔を引き締めろ。どうせ『このクラスにはもう一人オリムラっているのかー』って現実逃避してるだろ。

「私は藤原くんを推薦しまーす！ 企業所属って事は専用機持つてるんですよー」

は？ 俺まで？ まあ確かに専用機もちではあるが…

だから一夏、その『俺以外なら誰でもいいぜー。刹那がんばれー』
って顔はやめろ。お前も推薦されているんだぞ。

「では候補者は織斑一夏と藤原刹那、つと……他にはいないか？自
薦他薦は問わないぞ」

「お、俺!？」

チー姉が教壇前に映し出した空間投影型ディスプレイに表示され
た俺達の名前に一夏が反応して立ち上がる。やっぱり現実逃避して
たなコイツ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないな
らこのまま投票で選ぶぞ」

「ちょ、ちょっと待った！ 俺はそんなのやらな……」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。
選ばれた以上覚悟をしろ」

「い、いやでも……」

まだ反論を続けようとしている。そろそろ腹を括れ、一夏。むし
ろもうどーとでもなれー、って態度の方が楽だぞ。後で後悔するか
もしれないけど。

俺？ 俺はこの学園に入学した時からチー姉が拒否権など出すわ
けないと覚悟を決めてたさ。本当に嫌な事は実力行使してでも断固
辞退するつもりだが。

「待ってください！ 納得がいきませんわ!」

バン！つと机を叩いて立ち上がり甲高い声で異論を出したのは先ほどのオルコットさんだった。

「そのような選出は認められません！ 認めたくありませんが実力から行けばわたくしか藤原さんが代表に選出されるのは必然ですが、物珍しいという理由で運だけの男が選ばれるなど論外ですわ！」

「そんなになりたければ立候補して勝ち取ればいいだけの話だろ。自薦もOKなんだから」

ヒートアップしそうなオルコットさんに冷静に突っ込みを入れる。冷静に考えればそうなんだよな。チー姉も自薦他薦は問わないと言ってるのだし。

「そう、そうですね！ イギリス代表候補のこのわたくしセシリア・オルコットがクラス代表に立候補いたしますわ！！」

「セシリア・オルコット追加、と……他にいないか？ いないなら締め切るぞ」

ディスプレイにオルコットさんの名前が追加される。

チー姉が全体に確認を取り、反応が無いので自薦他薦を締め切った。

一夏はというと、『神は死んだー』的な顔で机の上にもたれかかっていた。何か口から魂が出て来そう。まあ大丈夫だろう、確率は三分の一にまで下がった。

そんな事を考えている間に俺の前に一人の女子が立っていた。オルコットさんだ。

俺にびしつと人差し指を向けてくる。距離が近くて鼻頭に当たり

そつだ。

「藤原刹那！ クラス代表の座を賭けて貴方に決闘を申し込みますわ！！！」

はい？ 決闘の申し込み？ 原作では相手は一夏だったんじゃない？

そんな俺の微混乱を無視して、パァン！とまた爽快な音が響いた。

「席に戻れ、馬鹿者」

セシリア・オルコット、出席簿をヨックヨック本日三回目。

初日はまだ終わりません(前書き)

初投稿から一ヶ月もしないうちにお気に入り登録数が75件：
おまいらそんなにガンダムが好きかWWW

初日はまだ終わりません

「うっ……」

放課後、俺は机の上でぐったりとうなだれていた。

い、意味がわからん……なんでこんなにややこしいんだ……？

とにかく専門用語の羅列なのだ。辞書でもなければやっていけない。だがISの辞書など存在しないので、つまり俺は今日一日ほとんどまっただなにもやっていなかった。こんなことなら刹那の言っていた通りちゃんと参考書をよんでおくべきだった……

ちなみに放課後になってもまったく状況は変わっていない。他学年や他クラスから女子が押しかけ、きゃいきゃいと小声で話し合っている。

勘弁してくれ、昼休みももう地獄だった。俺が学食に移動するとゾロゾロと付いてくるのだ。レミングかおまいらは。頼みの綱の刹那はというと千冬姉に連れられて昼休み中どこかへ行ってしまった。

「一夏、そろそろ行くぞ」

「筭？」

俺の席の前に来た女子、今日再会した幼馴染だった。

「行くなって、どこへ？」

「第4アリーナだ。……千冬さんの話を聞いてなかったのか？」

「おっ」

確か放課後に千冬姉が刹那を呼びに来た時に何かを言っていたよ
うな気がするが、正直その時言われたことは右耳から入って左耳か
ら出て行った状態だったな。

「まったく、一夏の専用ISのフォーマットとフィッティングをす
るから放課後に第4アリーナに来いと言われただろう」

ああ、そう言えばそんな感じのことを言っていたような気がする
……って何で篤が知ってるんだよ。

「刹那に頼まれたのだ。ISを用意するまで時間があるから校内を
案内してやってくれと」

まったくもって気の利いた幼馴染だ、誰かさんに見習わせたい。
ギロリ、っとなんで睨まれるのだろうか？

「わかつたらさっさと行くぞ、用意するため時間があるそうだから
校内を案内しながら行くからはやくしろ！」

「ああ、ありがとうな篤」

「か、勘違いするな！ 刹那に頼まれたからしてあげるのであって
一夏の為ではないからな！！」

そう言う口をへの字にして篤はすたすたと教室から出ていく。
ああ、もう少し優しさが欲しい。篤といい千冬姉といい、俺の周
りでは優しさ欠乏症な人が多すぎる。もう最後の希望は刹那しかい
ない。刹那がいなかったら男子が俺一人ではこの学園で到底やって
いけなかったのではないだろうか？

でも刹那に頼まれたから、か。やっぱり篤って刹那の事が好きな

ののかな？ 昔を思い出してみると俺に対してはいつもツンケンした態度だったのに刹那には比較的普通に接していたからな。やっぱり好きなんだろう………

「一夏、早くしろ」

「あ、ああ。今行く」

少し考え事をしていると一度教室から出た筈がまた顔を出して呼び出してくる。

まあ二人とも大切な幼馴染なのだ、筈の恋路を影ながら応援しよう。

俺は机の脇に置いておいた鞆を手にし、筈の後を追って教室から出た。

第4アリーナのピットで俺とチー姉、そして山田先生は待っていた。

俺たちの前には一台のコンテナが鎮座していた。一人がすっぽり入れるサイズのコンテナにC・B社のマークが入っている。今朝方俺が届けた一夏専用ISの入っているコンテナだ。

俺は席に腰掛けて本社より渡された書類に目を通し、チー姉は所狭しとろつき、山田先生はチラチラと俺の方を見てはボンッと赤くなつては目を反らすと繰り返している。

「……………遅い」

イラついたようにチー姉がもらした。確かに放課後になってから一時間近く経つから意外と気の短いチー姉はいらいらしているのだらう。

「も、もしかして迷子になっているのでは……」

「いや、箒に道案内を頼んでいるから大丈夫だらう。まあ用意に少し時間がかかるから校内案内にかっこつけてデートでもしながら来いと言っておいたから適当にぶらついてるんだろ」

山田先生の予想を否定する。一夏も15才だ。学園の地図もあることだし流石に迷子はないだらう。

デート云々のあたりで山田先生は顔面真っ赤にして倒れてしまった。この人ここまで耐性なかったのか。気絶しながら「先生エッチな事はいけないと思いますう……」と呟いている。一体どんな妄想しているのやら……

そんな中、がしつと横からつかまれるマイヘッド。そのままギリギリつと無理矢理向けられた方向にいたのは実にイイ笑顔のチー姉

「どういうことだ？ 刹那あ………」

「いや、可愛い妹分の初恋成熟を願うだろ？ 兄貴分的に考えて……」

チー姉のヘッドロックを抜け出して反論する。

「まあ落ち着けチー姉。良く言えば不器用で奥手、悪く言えばヘタレな箒の事だからまだ手も繋げないだらうからこれ位の後押しはいいだろ？ どうせ一夏も押し倒されてAやBどころかCまで強引に運ばなければ気付かない天然記念物クラスの鈍感だ、あまり心配す

る必要はないだろ」

「く…だが万が一にもだな……」

「それ以上言うなら放送室をジャックしてチー姉の好きな漫画やラノベの事を最大音量で言いふらす」

「な、何を言つて……!?!?」

「チー姉が集めているのは大半は少年少女もの問わず近親ラブストーリー物で、最近一番のお気に入りはおきそ」 「すいません、私が悪かったです。ですからそれだけはやめてください」 「えー」

教本に載せたい位に見事なD O G E Z Aを披露するチー姉に少し不満げな声を漏らす……

「ち、千冬姉……?」

「千冬さん……? 刹那……? 一体何を……」

ナイスタイミングというかバッドタイミングと言うか、ピットに入ってくる我が幼馴染達。目の前で立派にD O G E Z Aするチー姉に二人とも信じられないといった表情を浮かべている。

「い、一夏? 違う、これは違うんだああ!!!!」

絶叫するチー姉。

うん、イイカオス。これだからチー姉はからかいがあるのだ。さて、しばらく時間がかかりそうだからジュースでも買ってくるか。アリーナ入り口にある自販機で次々と購入しては取り出す。さ

て、こんな所か。

ピットに戻ったらチー姉と山田先生が復活していた。チー姉が後で覚えているよ、と目で語りかけてきたが軽くスルーする。

とりあえず全員にジュースを配る。チー姉にブラックコーヒー、筭にお茶、山田先生にミルクティー、一夏にコーラ、俺はカフェオレだ。

「で、このコンテナの中にお前の専用ISが入っている。刹那説明してやれ」

「ああ」

全員が飲み終わり、一息ついたところでチー姉が切り出す。俺がコンテナに備え付けられていたコンソールにパスワードを入力するとコンテナが開いていく。

駆動音を響かせながらゆっくりと開くコンテナの中にソレはいた。白。真っ白。飾り気のない無の色。

純白のISがその装甲を解放して自の主を待っていた。

「これが……」

「そう、一夏の専用IS、CBIS-X02…通称『白式』だ」

そこに居た全員がソレに見入っていた。山田先生など「ほへ、きれいですう」と呟いている。

「チー姉の依頼でC・B・社が開発した試作2号機をベースに調整された。コイツのマイスターになった時、お前は企業所属のテストパイロットとして登録される」

「……ちよつといいか？」

「何だ」

「しーびーしゃって、何？」

全員こけそうになった。結構有名な会社だったと思うぞ。

「そんな事も知らないのか！ C・B・社、ソレスタル・ビーイング社と言えば一般的な家庭用電化製品からISのパーツまで製造していて業績を伸ばしている新興企業だぞ！！」

篤がまくし立てるように説明する。それに一夏はぼん、と手を叩くと『ああ、そう言えば家にもその家電あつたなー』などと言っている。

「そう、そのソレスタル・ビーイング社の事だ。三年前に他の中小企業を吸収合併して設立されたばかりの新興企業だが社長の『手ごろで高品質』という方針をモットーとして各国からも高い評価を得ており、幾つかの国のISにも採用されている」

「まあ、その社長とはちよつとした昔の知り合いでな。事情を説明して用意してもらった」

元々ソレスタル・ビーイング社は身を隠し亡国機業を追う為に三年前に俺とタバ姉が作った形だけのペーパーカンパニーであった。

が、暇を持て余したタバ姉が夜寝ず昼寝をしてホリエモンも真っ青な買収工作でほとんど中小企業を吸収合併していき、気が付いた時には今人気上昇中の新興企業となっていた。

ちなみに社長は東雲亜理子という名前の二十代半ばのやり手の女

性となっているが実はこれ、タバ姉の偽名である。タバ姉は元々メディアへの露出は殆どしてないため名前だけが独り歩きしており、知り合いでない限り本人だとは気付かれない。むしろチー姉の方が有名な位だ。

そしてIS関係の社員は俺以外は全員タバ姉謹製ハ口。そう無数の大小色とりどりの丸い悪魔達がガンダム00であった作業用ユニットに乗って「ハ口ハ口」と大合唱しながら工場で働いているのだ。機械だから疲れ知らず。充電中以外は年中無休。そして何より人件費要らず。これがお手ごろ価格の秘密です。

「悪い話ではないぞ、IS学園に通っている間は学園が身分を保護できるが卒業後はそういう訳にはいかない。実験動物モルモットになる位なら信頼できる会社で専属テストパイロットにでもなつて身分を保証してもらつた方がいい」

「ああ、今なお一部の国からは一夏の引渡しを要求している。入学してもそうなんだ、卒業したらどうなるかわからない。ならばいつそ何処かに所属すればいい。ちなみに稼動データを取って本社に提出すればそれだけ給料が出る」

「やりますやりますー!」

一夏は給料の時点で折れた。

姉弟二人で暮らしており、少しでも姉を楽しませようと中学時代は毎朝新聞配達バイトをしていたのだ。全寮制のIS学園に進学することとなり、バイトできなくなった一夏にとってはこの話は天からの救いでもあったのだろうすぐ飛びついた。

俺としても嬉しいぞ。なんせ丸い悪魔以外の同僚ができたのだから。

「ならば早速ISに背中を預けるように座れ。後はシステムの方で最適化する」

用意されていたISスーツに着替えた一夏が言われた通り開いている装甲の中に身をゆだねる。装甲が閉じていき空気が抜けていく音がして一夏は白式と繋がって機動に成功した。

「無事機動できたか。そいつのコアは色々と言いつきでな、何度初期化されても最初のテストパイロットを忘れられずC・Bウチ・社に来る前にいた倉持技研ではお見合い相手を8人もこつ酷くふって廃棄処分されそうになったんだからな」

「げえ、そういう事はもつと早く言えよ刹那」

「馬鹿な事を言っているな。ハイパーセンサーは正常に動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

ISのハイパーセンサーのお陰で周囲360度見渡せるのだ。つまり顔を動かさなくとも後方にいる俺たちにも目を向けることができる。人によつては酔ってしまう事もあるというのが一夏は大丈夫だろう。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「織斑先生と呼べ。学習しろ、さもなければ死ぬ」

その言い方は教育者としてどうかと思うよ、チー姉…

「用意できたらアリーナに出て自由に動いて慣れる。三十分もすれば初期化と最適化が終わって一次移行するはずだ」
フォーメット フィットテイング ファーストシフト

そう、今の段階では初期設定でありまだ一夏専用ではない。今でも装甲は少しずつ変化・成形していき、内部も一気に一夏に適應した形に書き換えられているんだろう。

「刹那、箒。行ってくる」

「ああ、行ってこい」

箒の激励に応えるように肯いた一夏は白式を浮遊させるとゲートへ向かわせる。

開いたゲートからカタパルトで撃ち出された一夏はアリーナの中に飛び出していった。

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

俺の意識に直接データが送られてくる、と同時に目の前に「確認」と書かれたウィンドウが現れる。

訳がわからないがなんとなくわかる。それを押すと更なるデータが流込んできた。いや、正確にはデータが整理されているんだ。

キィィィィン……と高周波な金属音と共に俺の全身を包んでいたISが粒子に弾け、再構成される。見た目は装甲の工業的凹凸が消え、代わりに滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインに変わっている。

これが千冬姉が言っていた一次移行……これでやっと、この機体は俺専用になった。

『ようやく終わったか』

上空からかけられた良く効きなれた声。

そこには打鉄に似たISを身に纏った千冬姉がIS用の日本刀型近接ブレードを片手に空中に留まっていた。

『さて、では私の特別課外授業だ。まずは装備リストを出して武器を展開しろ』

「白式、装備は？」

問うとすぐさま現在展開可能な装備の一覧が現れる　　ゑ？

気のせいだろうか、二個しか見当たらない。他の欄にあるのではないかと探してみるが見当たらない。つまり、現在白式には二つの装備しかないのだ。

『どうした？　はやくしてみせろ』

「…ええい、ままよっ！」

俺はリストにあつた二つの武器、近接特化ブレード　雪片型式と多目的追加装甲　ナツクルシールド　を展開する。^{オープン}

左手には通常腕に固定しているが、場合によっては手に持つ事で打撃武器にもなる小型実体シールド。

右手には太刀のようできて機械的な日本刀。雪片：それはかつて千冬姉が使っていた専用ISの装備の名称。

ナツクルシールドを見たときの千冬姉の目が厳しくなったのに気付いた。ハイパーセンサーが『刹那め、余計なものを…』と呟いていたのを捕らえた。え？　じゃあこの武装を選んだの刹那なの？

もう少しいいもの付けてくれてもよかったのに、ビームライフルとかバズーカとかハンマーとか……

『まあいい、実戦方式でその身に動き方を叩き込んでやる』

マジで？ 問う前に千冬姉が突っ込んでくる。千冬姉と接近戦だなんて俺は自殺志願者ではない！

ちくせう今日はやっぱ厄日だ！ 俺はシールドを前面に千冬姉の近接ブレードを防いだ。

「一夏……」

「はああ……すごいですねえ、織斑くん」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた筈は自然と祈るように両手を合わせており、山田先生は溜息混じりに呟く。

「確かにチー姉が手加減していることもあるが起動して二度目の動きではないな、それに飲み込みも早いし武器の使い方も中々……あ、蹴られた」

それを見ていた俺も意見を返す。モニターの中でチー姉が某赤い彗星の如き飛び蹴りを放ち、一夏はナックルシールドで的確に防ぐがその反動で吹き飛ばされて地面に激突していた。

でも意外とチー姉に仮面をつけさせても面白いかも知れない。謎のIS操縦者、ミス・ブシドーとかミス・ゲイシャって感じで。や

べ、似合いすぎる。今度タバ姉に言って用意してもらおうか…モーター越しに睨まれた気もするが気にしないで置く。

「ああ、それと少し前に織斑さんと藤原さんの寮部屋がきまつたそうです」

はい、っと山田先生が渡してきた紙と鍵を受け取って書かれている内容を確認する。紙に俺の名前と部屋番号が書かれている。鍵の番号も同じだ。

「それと織斑くんは篠ノ之さんと同室なので渡しておいてください
ね」

「わ、私がですか!？」

山田先生が箒に一夏の分の鍵を渡す。

一夏は原作通り箒と同居か……あれ、てっきり俺と同じ部屋だと思っただが。

「空き部屋もないので無理矢理一人部屋のところに組み込ませてもらったそうです。一ヶ月もすれば男子用部屋を用意できるそうですのでそれまで相部屋で我慢してほしいのです」

「し、しかし! 男女七歳にして同衾せずと…」

「落ち着け箒、それにいいチャンスじゃないか」

「チャンス、だと?」

山田先生に聞こえないよう箒に耳打ちする。

「お前が転校した後から俺と一緒にいたのは2、3年ほどだが、あいつ結構モテたぞ」

ピクリ。お、反応した。山田先生も初心なのに興味津々なのかミニダンボ状態だ。

「何度か告白されたそうだが本人はそれが告白とは気付かずスル―してみたんだ。中には熱烈的にアタックしてきたのもいたが」

ピクピク。うんいい具合だ。山田先生が聞こうと少しずつよってくる。

「まああの調子だと付き合っている相手もまだ居ないようだが、あいつもそろそろそういうモノが欲しくなる年頃だ。そして周囲には興味津々でか弱い獲物を狙う肉食獣（じゅうじく）の群れ……生まれながらのギャルゲ主人公体質のアイツが無自覚に何人落とすか判ったものではない」

ピクピクピク。もう一押しか。

そういえば自分で言っておいてなんだが一夏は十分ギャルゲ主人公だよな。ってことは何？俺は主人公をサポートするサブキャラ？女子から聞いたアイツの評価を教えたり、アイツに女子の電話番号やメルアドを教えたりするのか？

「天然記念物級な鈍感の一夏に気付かせるにはやられる前にヤルしかない、判るな？」

真っ赤な顔をしてこくこく肯く筈。むしろCどころかDでもEでもいってしまってもおじさんかまわらないぞ。

「わかりました山田先生！ 私が一夏と同棲します！！」

「藤原くんになにを言われたのか気になりますが、ありがとうございます。」

うむ、丸く収まってなによりだ。それと俺も聞きたい事がある。

「それと、空いている二人部屋に無理矢理入れた、ということは俺も誰かと同居するということになると思うのだが……」

「はあ、それが部屋はついさっき織斑先生が決めたのであってであつて詳しくは聞いてないのですよ。」

は？ チー姉が決めたつて。

「そういえば藤原くんの相部屋を決めたとき織斑先生がからかっただとか気が済まないだとかどうこつ……」

「あー、何かやな予感がしてきた。脳裏に浮かぶのはイイ笑顔のチー姉。」

「箒、少し野暮用ができたからコレあげる」

そういつてビニール袋に2つずつ入ったスポーツドリンクとタオルを渡す。

使い方はわかるよね？ と目で問うと見事な敬礼で返してきた。それに対して健闘を祈ると願いを込めてサムズアップをするとピットから出て教員棟を目指した。

後ろから「さすが幼馴染、以心伝心ですねえ」と山田先生の声

を聞きながら。

モニターでは一夏が再び地面に叩きつけられるのだった。

元は二人用の部屋でありそれなりに広かったが、その半分近くが持ち込んだベットで埋まっている自室でセシリア・オルコットはシヤワーで濡れた髪をタオルで拭いながら一枚の書類を見ていた。

「藤原刹那。半永久機関を提唱したため学会から追放された異端の天才：藤原伊織の孫であり、私の母が研究に資金援助を行っていた藤原空博士、及び藤原真理奈博士の一人息子。三年前に事故で両親を失った後に行方をくらます、今年になってIS学園に入学し今までC・B・社に所属していたことが判明……一体何者なのですか？」

読んでいた書類は亡き母のついで色々と手を回してもらい調べ上げた彼の事。

それほど込み入った事はわからなかったが僅か半日でここまで調べ上げられたのだから僥倖といえれば僥倖だろう。

「…母が資金援助を行っていたのでしたら実家のほうでわかるかもしれないわね」

姉代わりのメイドの事を思い浮かべながらどうして彼の事が気になるのかと疑問を投げかける。そう来週彼とはクラス代表の座を賭けて決闘する事となっているのだ、だから気になるのだと結論付けた。この胸の高まりもそうなのだと……

「しかし、ソレスタル・ビーイング社がバックについているとは、侮れませんか……」

その会社の名前は彼女も良く聞き覚えがあった。

彼女の専用ISであるブルー・ティアーズにもその会社製のパーツが採用されており、更に特殊兵装であるビットもC・B・社から技術提供されて開発されたものだと言われていた。

「しかし、遅いですかね……」

ちらり、と自分のベッドの隣に先程教師達が設置していった小さな簡易ベットを見る。といっても簡易ベットが小さいのではなくセシリアが持ち込んだベットが大きすぎるのだ。

先程教師から聞いた話。

元々は代表候補ということもあり優遇されて一人で二人部屋を使用していたが、トラブルによって部屋を調整する間だけもう一人を同居させて欲しいと言うことだ。

一ヶ月だけの間という話なのでセシリアも同意したのだが中々同居人が来ないのだった。

そしてとうとう同居人は現れず、彼女は翌日寝不足で織斑先生の出席簿チェックを連発されるハメになるのだった。

なお彼女の知らないことだが、彼女の部屋番号は刹那に渡された仮部屋の番号と同じだった……

初日の終わりに(前書き)

アニメがはじまってから一気にPVが増えた…
アニメ効果ばねえ…

初日の終わりに

「はい、ここですよ」

入学初日の放課後、俺は壮年の男性用務員に案内され教員寮の一室に訪れていた。

一夏のIS最適化の後、教員棟に向かった俺は同居人の確認を行った。そしたら案の定というか、相手はオルコットさん。流石にそれは色々まずいので交渉の結果、教員寮の空き部屋を借りることができたのだ。

まあ借りれなかったら借りれなかったで、屋上でエクシアを使って生活すればいいのだからたいして困るまい。元々ISとは宇宙用作業服の一種として開発され、ある意味着る宇宙船なのだから中は路上生活などと比べて格段に快適なのだ。食事とトイレと風呂さえあればISの中で生活していけそうだ。

「物置変わりに使われていたので荷物は明日にでも移動しますからそれまで我慢してください」

「いえ、いきなり女子寮に放り込まれるよりはマシですよ」

その部屋は確かに彼の言っている通り部屋のそこかしこにダンボールやトラックが山積みされ、床には薄っすら埃が積もっている。今夜は床だけでも掃除だな。

「それにしても、年頃の女子といきなり同室にするとは……織斑くんにも困ったものですね」

「ええ、でもあの人の突拍子もないところは昔からですから」

そう、チー姉は昔から急に突拍子も無い事をするのだ。そこにタバ姉がからむと被害が最低でも三割増しになる。その被害の最大たる代表格があゝの有名な白騎士事件なのだが……まあ機会があれば後々語るとしよう。今俺から言えるのはあの事件の後に俺の両親が正座している二人に夜通し説教している光景を見た、という事ぐらいだ。

「では私の部屋は向かいですのでなにかあつたら遠慮なく言ってください。電気はもう大丈夫ですが、ガスと水道もあと一時間もすれば使えるようになりますし、男性用トイレとお風呂はこの通路を真っ直ぐ行つた所にありますから」

「ありがとうございます、轡木学園長」

「……おやおや、私は一介の用務員であつて学園長は妻ですよ？」

「そついつ事にしておきましよう」

「そつしておいてください。では篠ノ之社長によろしく言うておいてください」

「おや、うちの社長は東雲ですよ？」

お互い苦笑を浮かべ、男性事務員…轡木十蔵氏は退出していった。時計を見る、交渉に時間が掛かつたためかすでに時間は19時半を回ろうとしていた。もう行かなければ食堂に間に合わないな。事前の山田先生からの話だと一年生の利用時間は20時までだったはずだ。

そついえば一夏達はどうしたのだろう。まさかまだアリーナで特

訓している訳ではないだろうが。

部屋にしつらえてある電話を取る。うん、繋がっている。内線をかけるのと数コールで『はい、こちら第4アリーナです』と山田先生がでた。

「あれ山田先生？ 藤原です。先生がそちらにいるって事は一夏たちもまだそっちに居るんですか？」

『ああ、藤原くんですか。はいそーですよ、あれから何度も織斑先生とアリーナで訓練してるんです』

まだやってたのか。これで随分な時間になるぞ。

「ってことは一夏と篤は夕飯まだですよね？ もうすぐ時間になりますけど」

『え………ああ！ もうこんな時間！？ 急がないとっ……！』

「山田先生、落ち着いてください。まずは深呼吸」

『は、はいっ。すーはー、すーはー、すーはー』

「はい、それ位で。落ち着きました？」

『はい。でももう時間が……』

「夕飯でしたら俺が食堂が購買で適当に買って持って行きます。山田先生は食物アレルギーとかありますか？」

『い、いえ。特には……』

「それじゃ、一夏達にも伝えておいてください」

内線を切ると食堂に急ぐ。

食堂は既に1年生たちの大半は食事を終えたのか結構席は空いており、居る生徒達もお茶とお菓子を片手に談話を楽しんでいた。

自動販売機で日替わり幕の内弁当の食券を5枚購入し、厨房のおばちゃんに注文すると出来るまで手もちぶさとなってしまう、周囲の視線も気になって居づらくなり、何気なく食堂内に設置されていた大型テレビに目を向けた。

そこには入試の実技試験中の映像だろう、一夏が映っていた。

一夏だけではない、今年入学の新入生の中で代表的な生徒数人をピックアップして放送しているらしい。他にも箒を含む数人の女子の試験映像が断片的に流れていく。その中であったオルコットさんの試験映像だが、ブルー・ティアーズのビットで山田先生をふるばっこって…そりゃ専用機使って試験用装備の教官に勝てないほうがおかしい、むしろもし負けたら代表候補から外されかねない。

テレビを見ていた女子達の歓声が沸き、食堂に居た全員がテレビに集中する。そこに写っていたのは打鉄カスタム（仮）を装着したイイ笑顔のチー姉…ってことは俺の試験？

「はい、幕の内弁当5つね！」

おばちゃんがカウンターにプラスチックの容器に入った弁当を重ねて袋に入れてどん、と置いた。

「男の子とは言えそんなに食べるのかい？」

「いや、今補習中で食べに来れないやつらがいるからその分もある」

「ふーん、偉いねえ。じゃあこれも持っていきな」

「ありがとうございます」

デザートの入った箱をおまけしてもらい俺は食堂を後にした。自分の実技試験などわかっているのだから見る必要もあるまい。

その後ろから『この気持ち、まさしく愛だ!!』『愛!?!』『だが愛を超越すればそれは憎しみとなる!』『貴様は歪んでいる!』『そうさせたのは君だ!』とテレビからの音声と多数の女子の黄色い声を聞きながら。ってか何で俺のだけ音声入ってるんだよ!?!ざわめく食堂から逃げるようにアリーナへ向かうのだった。

第4アリーナピット。数時間ぶりに戻ってきたこの部屋には筭と山田先生が、そしてリアルタイムモニターの向うでは一夏とチー姉がまだ戦っていた。

「ちわーっす、み わやでーす」

「……刹那?」

ギロリ、と睨んできて何処からとも無く木刀を出す筭。髪の間から爛々と輝く白い目が見える。うん、彼女の前でボケたりジョークはやめととう。心臓にわるい。

「これ差し入れの弁当だ。あとこれは食堂のおばちゃんから」

「わあ、ありがとうございます。あ、また終わりましたね。織斑先生、織斑くん。藤原くんがお弁当を買って来てくれましたから休憩

にしましょう」

リアルタイムモニターでは一夏が斬りかかったところでシールドエネルギーが0になり、訓練が一時終了したところだった。それを聞いた二人がピットにゆっくり戻っていく。

それを箒はじっと見ていた。

「…箒、専用機が羨ましいのか？」

「そんな事は！……いや、そうなの、かも…しれない……」

モニターを見ながら箒が答える。

「…私は、ISが…あの人が嫌いだった。あんなものを作ったから、私の家族はバラバラになって、一夏とも、刹那とも、離れ離れにならなければならなかった……でも、今は羨ましいと、思う。一夏の隣に立てるかもしれない、から」

箒の告白を聞きながら思う、あの人とはタバ姉の事なのだろう。最も嫌っていたり怨んでいても決して憎んでいる訳ではないのだからが……

「なあ、箒。俺がIS学園に来た理由は3つある」

「何を急に……」

「1つめは俺の専用ISエクシアの運用テスト、2つめは一夏のサポート、そして3つめはC・B社の試作3号機のテストパイロットのスカウトだ」

「それじゃあ……」

「あれ？ ちょっと待ってください。確か国家からC・B・社に割り振られたコアの数は2つ、エクシアと白式の分のはずですよ？
……まさか……」

俺の話聞いていた山田先生が横から口を挟んでくる。まあ、企業に割り振られているコアの数などちょっと調べればわかる事なのだ。ISのコアは使うことは出来ても新しく作ることがタバ姉にしか出来なくて、さらにその本人にこれ以上作る気がないのだからその数の限界は決まっている。アラスカ条約により条約外のコアの取引などは禁じられているから山田先生は密輸など不正な取引などを想像したのだろう。

「いや、白式に使われているコアは倉持技研で不良品として廃棄処分になるところのものをチー姉が引き取ってきてC・B・社ウチに持ってきた物だからカウント外だ。コアの取引においても条約上の手続きを全て取ってあるから問題ない」

実際にはエクシアのコアはGNドライブであるため残りは2個だけだな。もつともC・B・社には色々な意味での「切り札ジョーカー」があるわけだが。この人の事だから簿専用に最高にマッチした特製コアを用意しているようだが。

「そうなんですか、よかったです」

「それで話は戻るが、急遽投入が決まった試作2号機が白式なのがチー姉の強い要望によりバリバリの近接戦闘オンリーというバランスが滅茶苦茶なISになってしまった。その穴を埋めるため余ったコアとフレームをベースに試作3号機の開発が急ピッチで進んで

いる。コンセプトは近距離戦主体の汎用機で白式とエレメントを組むことが前提の仕様となっているそうだ。篝さえよければ俺の方から社長に推薦しておくが」

「……でも、私のIS適性はござ、仮になっても大したデータは取れないと思うぞ……」

「何言ってるんだ？ 俺から見ればお前もクラスの皆もまだ頭と尻に殻を被ったまま気付かないヒヨコと同じだ。適性なんて関係ない、んなもんいくらでも伸ばせるだろうが」

「……少し、考えさせてくれないか……」

「まあ、7月の頭には完成予定だから時間はある。それまでに答えを出してくれればいい」

それ以上は俺も篝も何も言わない。山田先生が「篠ノ之さんがその話を受けるとうちのクラスは専用機持ちが4人になってしまいますよー。へたすると一國に戦争売れますねー」と思案顔で考えている。

それから数分して、水着と言うかスウェットスーツのようなISスーツの上にジャージを羽織った一夏とチー姉がピットに戻ってきた。そして一夏は疲れきった顔で椅子の上でうなだれる。燃え尽きたボクサーの姿がだぶつたのは偶然だと思いたい。

そして篝から渡された弁当をつつきながらうらめしそうに声を上げた。

「……刹那……何であんなもの付けたんだ……」

「あんなもの？」

「雪片式型の零落白夜のことだよ…なんであんなものを、すぐにシールドエネルギーが尽きちゃうじゃないか……」

「ああ、あんなものを付けたのはチー姉だよ」

一夏がIS学園に入学が決定した翌日にタバ姉の下に零落白夜がインストールされたコアと初代雪片が送りつけられたそうだからね。

「ほう、雪片をあんなもの呼びするとはお前らもずいぶん偉くなつたじゃないか」

パンツ！　パンツ！

つう！　油断していた、後ろからチョップしてくるなど。

「まったく。刹那、お前も勝手にあんなものを付けて」

「零落白夜の特製を考えれば他に防御手段を考えるのが普通だろう？　社長からの許可も出てるぞ。まったくFCSまで潰して全体容量の98%が零落白夜に割かれてるから射撃系の武器はレンタルの上、目視でないと使えない。何処の真の騎士の為の決闘用だよ」

「????　どついう事だよ、刹那、千冬姉」

「どついう事も、零落白夜の事はチー姉から聞いているだろ？」

「ああ、確か自分のシールドエネルギーを消費して相手のシールドバリアーを無効化して絶対防御を発動させる、千冬姉が昔使っていた暮桜と同じ能力、だろ？」

「そう、零落白夜は自分の命を削って相手に大ダメージを与える、ファンタジー系RPGに出てくるソウルイーターのような呪われた武器のようなものだ。その能力をフル活用するには糧となるシールドエネルギーを維持しなければならない。その方法は2つ、相手の攻撃を避けるか実体シールドで防ぐかだ。だから俺は残った容量2%で可能な限りの防御手段を付けた」

「といっても装甲に毛が生えた程度の大きさしかない頼りない盾が無いよりはマシだろう。」

それでも不満なのか、呪い扱いされた事が気に入らないのか不機嫌そうな顔で弁当を男らしくかきこむチー姉。ちよ、デザートを独り占めじゃないの。大人気ない。

「さて、食後の運動だ。もう一度いくぞ、一夏」

「ちよ、千冬姉。俺まだ食い終わって……ぎゅう」

弁当とデザートを平らげたチー姉に首根っこを掴まれて一夏は食べている最中の弁当を持ったまま引きずられていった。

さて、俺も弁当を食い終わったので帰るとしよう。そう言えば購買部はまだ開いてたかな？ 帰る前に覗いていこう。そしてあつたら掃除用にクイックルワイパーを買っていくとしよう。他の用具は清掃用具から拝借すればいいのだしな。俺は残っていた筈と山田先生に断るとピットを後にした。

そして一通り部屋を掃除してなんとか寝れる環境にした俺は男性教員用の大浴場に来ていた。最も、男性教員はごく少ないので普通の銭湯サイズの広さしかないがそれでも今は俺一人しかないから

十分だ。

手足を伸ばしてゆっくりとくつろぐ。一夏もこつちに入りに来ればいいのに。さて、じっくり温まったところでそろそろ上がるか。

また明日もあるのだ、今日は早めに休もう。頭の上にのせていたタオルを手に取ると湯船からあがり脱衣所への引き戸を開けようとしたら勝手に開いた。あれ？　ここ自動ドアじゃないよね。

「へ？」

「ふえ？」

引き戸を脱衣所側から開けたのは手に持っているお風呂セット以外には眼鏡しかしていない山田先生。やはり着やせするタイプなのかスイカのように丸々とした豊満な胸が揺れる。風呂に眼鏡をかけて入るものではありませんよ。そしてお風呂セットから頭を出しているアヒルの玩具が何故か似合っている。

つてなにい！！？

「きゃあああああ！！！！！」

そして上がる甲高い悲鳴。急いで引き戸を閉める。ここが防音性の高い風呂場でよかった…

「な、何で藤原くんがここにいるんですかああ！！？」

「俺は学園長にここを使っいいと言われましたよ！？　つて、それはこつちの台詞です！　ここは男湯ですよ！！　何で山田先生がいるんですか！？」

「だ、だってえ…女湯の方が今清掃中だったから、つい……」

「だったら終わるまで待てよ！」

「でもお…いつも男風呂の使用は早いからこの時間は皆使ってるんですよ……………」

「たまたま遅く入る人がいたらどうするんですか！？ 取りあえず俺はもう出ますから一旦服を着て廊下に出てください！」

「はふう…見られちゃったよお…………でも、とってもおつきい象さんが……………」

ふらふらと離れていく気配を感じる。そして2〜3分して「では外にでます〜」と声が聞こえてきたので脱衣所に向かい、速攻で着替えて部屋へと戻るのだった。

翌日からしばらくの間、山田先生は俺と目をあわそうとしなかった。

初日の終わりに(後書き)

最後のシーンは、実は一夏担当じゃないかと思う

決闘、そして決着（前書き）

イメージOP unripe hero

アニメ、ブラスレイターの後期オープニングテーマです。

歌手はアニメ版ISのオープニングテーマを歌っている栗林さんです。

決闘、そして決着

入学してから今日で一週間めになる月曜日の放課後。
そして、刹那とセシリアの対決の日。

「……なあ、箒」

「なんだ、一夏」

入学式に再会した幼馴染である刹那と箒とは以前と変わらず話せる間柄だった。危惧していた六年と三年の溝は意外と浅かったのかもしれない。

「気のせいかもしれないんだが……」

そう、一つ疑問がある。

「刹那のISって、見たことある？」

「いや、ないな」

そう、刹那も俺の訓練に良く顔を出して手伝ってもくれるのだが刹那の専用IS、C・B・社の試作一号機を俺たちは一度も見たとがない。刹那が俺の訓練で使用しているのはいつも訓練用に学園で用意されている打鉄やラファール・リヴァイヴだった。以前箒が言っていたけれど学園のISの貸し出しにはえらい量の手続き書類を書かなければならないのだが刹那の奴も毎回よくやるよな。

その刹那はというと俺に支給されたのは色違いのISスーツ（俺のも刹那のもC・B・社の特別製らしい）に着替えて少し離れた

場所で千冬姉と山田先生と話していた。お、話が終わったのか千冬姉と山田先生が少し下がった。

「エクシア」

刹那の声に反応して左腕にしていた腕輪がはじける。粒子が包み込み、一秒と掛からずISが展開された。

その姿は俺の白式や千冬姉の打鉄改（仮）や学園で見かける他のISとはまったく違う。

まず全身が白と青の装甲で被われている。そして従来は肩や背中の非固定浮遊部位アンロック・ユニットに存在しているはずのスラスターや武装がなく、目だったスラスターは背中の特徴的なコーン型スラスターと脚や肩の装甲に内蔵されているスラスターのみ。一般的にISは浮遊して動くから脚は着地以外の目的はないから簡略化されているのだが、刹那のには踵まであり走れそうだ。そして試作機故か肩からアンテナが伸び、一部からは外にコードがはみ出している。

従来のISとはかけ離れた姿。別の技術が使われていることが一目でわかるような気がする。

でもその姿は何時か憧れたテレビの中のヒーローやロボットのようで、俺は…

「か、かつこいい」

声に出してしまうほど、その姿はかつこよかった。

「エクシア」

俺の声に応えるように腕輪が粒子になって弾けると一瞬で俺の身体全てを被う装甲へと変化する。一週間ぶりに使用した俺の専用IS・エクシアは以前と変わらず自然と俺と繋がる。

訓練リミットの設定を確認。武装限定、GNソード及びGNブレイド。能力限定、「ノンオフアベヒリテイ」単一仕様能力・トランザム。GNドライヴ出力30%に設定。

戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り。

エクシアの機体状況とハイパーセンサーよりアリーナの情報が瞬時に送られてくる。

俺は標準的な武装、GNビームライフルとGNシールドをそれぞれ展開する。

「行けるか、刹那」

「ああ」

「そうか、ならば調子に乗っている天狗の鼻を押し折って来い」

「いいのか？」

「この程度で潰れるならイギリス代表候補もその程度だったというだけだ」

「了解した」

チー姉の方を振り向かずハイパーセンサーで見て受け答えすると
出撃準備に移る。

俺の意思に反応して背中のコーン型スラスター…GNバーニアから溢れる淡い緑色の特殊粒子、GN粒子の放出が増加すると足が地面を離れて浮遊する。そのままゆっくりとカタパルトへ進み接続。

カタパルトスタンバイ確認。ゲート開放まであと2・057
18422秒。射出タイミングをエクシアに譲渡します。

「アイハブコントロール。CBIS-X01エクシア、藤原刹那。
出る」

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアが腰に手を当てたままふふんと鼻を鳴らす。

彼女は鮮やかな青色のIS『ブルー・ティアーズ』を既に展開して空中に浮遊していた。その外見は4枚のフィン・アーマーを背に従え腰から両サイドにロングスカートのような装甲が伸び、騎士の甲冑でありながら姫君のドレスを連想させる。その手に握られているのは騎士の騎馬槍^{ランス}ではなく全長2メートルを越す長大な銃器67口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』だ。ISは元々宇宙空間での活動を前提に作られているので原則空中に浮いている。そのため自分の背丈より大きな武器を扱うのは珍しくない。

対して彼女とは反対側のピットから出撃した刹那のISは白と青のツートンカラーの『エクシア』。その特徴は全身を隙間無く被うシンプルでスマートな装甲。ISにはシールドバリアーと絶対防衛

という二つの防御手段があるため基本的に装甲を持つのは手足と背中だけ、それもスラスタとパワーアシストを目的としているため純粋な防具ではない。それなのにエクシアには操縦者の姿を、顔に見える隙間の無いほど装甲に被われていた。それがシンプルながらも異彩を放っている。武装は右手に短銃身で取り回しのいいGNビームライフル、左手には菱形に近い形のGNシールドだ。

(あれがC・B社の試作一号機エクシア…全身装甲と実体シールドフルスキンからして防御力重視の重装甲型、といったところですね……ですが)

セシリアはそう判断した。そして攻略法を導き出す。それは集中砲火によりエクシアの重装甲を剥がし、シールドエネルギーの消費が大きい絶対防御を発動させることだ。自分のブルー・ティアーズならできると確信していた。

ISバトルでは相手のシールドエネルギーを0にしたものが勝利する。それを素人目で考えればシールドバリアーや絶対防御を使用しないで防御できる重装甲の方が有利に思えるが実際はそうではない。ISバトルが別名ハイスピードバトルと言われる通り超高速、機種と装備と場合によっては亜音速に近い速度での戦闘となるのだ。逆に動きが制限される重鈍な全身装甲フルスキンは圧倒的に不利と言えた。

「最後のチャンスをおげますわ。ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで降参するのなら、許してあげないこともなくつてよ」

左手で銃を支えたまま空いた右手を刹那の方に人差し指をびつと突き出し挑発的な笑みを浮かべて目を細めるが、既にハイパーセンサーは射撃モードに移行している。

「それはチャンスなどではなく無条件降伏というものだ」

「そう？ 残念ですわね。それなら お別れですわね！」

互いにライフルを撃つ。

アリーナの直径は200メートル。二人の間の距離から着弾まで0.4秒。二つの閃光が交叉する。

粒子ビームをかすったブルー・ティアーズの左脚部の一部が吹き飛び、その直後にやってきた衝撃波でバランスを崩しそうになるも自動姿勢制御によって持ち直す。

バリアー貫通、ダメージ42。シールドエネルギー残量、502。実体ダメージ、レベル低。

敵機、ダメージ0。実体シールドにより防御。敵機より特殊フィールドを感知、詳細不明。

(そんな！ かすめただけで!?)

それは信じられない事であった。かすただけでシールドバリアーが貫通して実体ダメージを受けるなど。あの小型のビームライフルはスターライトmk?以上の出力をもっている!?

目の前にはGNビームライフルを2発、3発と撃って接近してくる刹那のエクシアの姿があった。その姿にはハイパーセンサーの情報通り損傷は見られない。ダメージと言えばGNシールドの一部がレーザーによって焼け焦げた跡のようなダメージを僅かに受けたくらいか。咄嗟にブルー・ティアーズを横にスライドすることでその射線から逃れる。

「くっ、踊りなさい！ わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

負けじとスターライトmk?からレーザー弾を次々に弾幕のごとく連射しながらブルー・ティアーズに搭載されている特殊装備、直接特殊レーザー兵器: B T兵器『ブルー・ティアーズ』 ややこしいので以下ビット 4機を射出する。エクシアはセシリアが予想したより遥かに軽快な動きで距離をおく。

「…プリマドンナを気取るか、ならば一曲いかがかな? エスコートさせてもらおう。豪快さと繊細さの織り成す武の舞いを踊り明かそうか」

「あら、貴方に踊れて?」

「もつとも俺の舞は荒々しいぞ、なんせ相手の手をつかんで振り回すだけだ」

「ならば、お行きなさいブルー・ティアーズ!」

刹那のやけに芝居がかった口調に気を取り直したプリマドンナ主演女性歌手の指示の元4機のフィン状のビットが多角的な直線機動で刹那に喰らいつこうと接近する。3機が牽制するなか死角となりうる場所から1機がレーザーを発射、回避されるがそこにスターライトmk?を撃つもそれも回避される。それが幾度と無く続いた。刹那は避けるかGNシールドで防ぐかでこの十数分の間、決定的なダメージを与えられないでいた。

「くっ、どうして、あたりませんか!?!」

「誰がその機動データを取ったと思っている! 元々その制御システムはC・Bウチ社から提供されたGNセファアーのものがベースだ。

それに……」

そう、ブルー・ティアーズに搭載されているビットの元々の制御システムはエクシアとドッキングして追加武装となる自動支援機GNセファアーに搭載されていたGNプロトビットのものが流用されていた。元々は刹那の両親が開発を予定していた強行偵察型であるラジエルの支援戦闘機として設計されていたが束の手によって再設計され、エクシアにも装備可能となった。そのデータを元にC・B・社で新たな支援機が現在設計されていた。

刹那はGNビームライフルを投げ捨てるで一機のビットに向かって突撃する。

「武器を捨てるなんて、何を……！」

4機のビットとスターライトmk？からのレーザーの弾幕を小刻みに潜り抜け、すれ違いざまに右腰から引き抜いたパーツで一閃。光刃がビットを引き裂く。粒子ビームを収束して短剣状にする近接武装、GNダガーだ。更に同じ物を左腰より引き抜き、それぞれの方向へ投擲する。寸分違わず2機のビットに突き刺さり爆発する。

「あの人よりも遅く、制御も甘い！」

刹那の脳裏にはIS学園に来るよりも少し前の光景。無邪気に笑いながらGNコンデンサ仕様のセファアラジエルの巧みに操り、理論上では可能な10機のGNプロトビット全てを綿密かつ繊細に操る東雲亜理子こと篠ノ之束の姿が浮かんでいた。最も人類トップクラスのチート頭脳を持つ彼女の演算能力と比べるのは酷な事かもしれないが。

「ですが！ まだわたくしには最後のビットとスターライトが残っ

ブルー・ティアーズ

「ていてよ！」

GNビームライフルは地面に、GNダガーはビットと共に失って丸腰になり攻撃手段をもう持たないように見えるエクシアの姿に自分の有利を確信し、残った武装で阻もうとするが刹那はまた軽やかに避けかつ的確に防ぐと空いた右腕をビットが存在する方向へ向ける。その腕のスリットが光った。光が反射したのではない、腕に仕込まれているGNバルカンから小口径の粒子ビームがマシンガンのように吐き出された光だ。最後のビットが粒子ビームにより蜂の巣になった一瞬後、爆発する。

「なんですって!?!? そんな所に武器を！」

「もらった！」

刹那が残り一つとなったレーザーの弾幕を潜り抜け、右腕のGNバルカンを乱射しながらセシリアに接近する。既に距離は接近戦の領域になるうとした。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機ありますのよ！」

にやり、とセシリアが笑うと彼女の腰部にあるスカート状のアーマーの突起が外れて動き、新たな2機の自立機動兵器が姿を現し射出され近距離に居た刹那のエクシアに一直線に突撃する。それはさつきまでのレーザー射撃を行う『砲台型』ではなく直接体当たりによりダメージを与える『弾道型』だ。

ドカアアアンッ!!

エクシアが赤を超えて白い爆発と光に包まれた。

「やりましたわ！ 存外しぶとかったです、これで………っ！！」

爆発の残滓から落ちていく半壊したGNシールドとその欠片をみてセシリアは勝利を確信した瞬間、スターライトmk？が上空から降り注いだ雨に撃たれた。それはただの雨ではない。小口径粒子ビームの雨だ。一秒弱の掃射でスターライトmk？を貫通し十数発が地面に向かって撃ち込まれる。

スターライトmk？大破。強制排除します。

ISが自己判断し、セシリアの意思に関係なく大破した武装を投げ捨てる。それとほぼ同時にスターライトmk？が爆発し、その衝撃波がセシリアを襲った。

上空より急速接近するISを感知。識別、CBIS-X01

『エクシア』。

自動姿勢制御でバランスを取りながらハイパーセンサーの情報よりはやく粒子ビームを撃ってきた相手を見つける。エクシアだ。傷一つ見当たらないエクシアが今度は両腕からGNバルカンを撃ちながら上空から接近していた。

GNバルカンの一発一発の威力は低く、シールドバリアーを貫通するほどではないがその連射を浴びてじわじわとシールドエネルギーが減少していく。ブルー・ティアーズの装甲部分はISが必要ないと判断し、シールドバリアーを展開していないため次々と抉られていく。

「くっ……ああ、もうっ！ 《インターセプター》！」

半ばヤケクソ気味のセシリアの叫びと共にブルー・ティアーズの最後の武器、アサルトナイフが展開される。

「しつこい男は嫌われますわよ!」

「だが多少強引でなければ君を口説けそうにない」

「なっ!?!」

「更に俺は君の言うとおりしつこくあきらめも悪い、俗に言う女性に嫌われるタイプの男だ!」

至近距離にまで接近されて苦し紛れにナイフを突き出したセシリアの腕を掴むとそのままの勢いで背負い投げの要領で投げ飛ばす。投げ飛ばされESが悲鳴を上げながら姿勢制御しようとし、きりもみされるセシリアを追いすがるとエクシアの左肩後ろにあった突起が脇の下にそりあがり、それを右手で引き抜くとビームの刃が形成される。先ほどのGNダガーの数倍の長さをもつ粒子ビーム剣、GNビームサーベル。収束率こそGNダガーに劣るが圧倒的にリーチ差が勝る。

「ここは、俺の距離だ!」

「インターセプターがっ!」

さして対ビームコーティングされている訳でもなく、とっさに防ごうと突き出されたインターセプターがGNビームサーベルの圧倒的な熱量により切断される。更に刹那は左手でも同じくGNビームサーベルを引き抜くと二刀流に構え、そして

「切捨て…御免っ…！」

二刀流のGNビームサーベルが触れたブルー・ティアーズを破壊し、バリアーシールドを切断、絶対防御が発動し止められるもブルー・ティアーズのシールドエネルギーが急速に低下し0になった。

『試合終了。勝者 藤原刹那』

勝利宣言のアナウンスにより決闘は終了を告げる。

ギャラリーの歓声が響く中、セシリアのISが粒子となって消えた。

「オルコットさん？ 気絶しているのか、世話がやける。GNフェザー！」

現在高度70メートル。高層ビルに相当する高さからISもなしに落下などすればそれこそ身体が原型をとどめているのかすら怪しい。

刹那はGNバーニアの機能の一つ、GN粒子を大量消費するが高い機動性と運動性と防御力を得られるGNフェザーを発動して落下するセシリアを追いかけ抱き止める。その体制が俗に言う『お姫様抱っこ』となっており、GN粒子が形成する翼からその姿はさながらお姫様を救い出した機械天使の絵となっていた。ギャラリーの中で何人もがデジカメラや携帯電話のカメラ機能で撮影し、後日それを見たセシリアが身悶えることになるのはまったく別の話である。

また、ピット室では真耶がどこかうらやましそうにしながらその光景を学園の器材で録画していたり、箒が『いいなあ』といった視線でチラチラと一夏を見ていたのは関係のない話である。

決闘、そして決着（後書き）

これを読んでくれているリア友に「何でセシリア同棲フラグを立てては折ったんだ!？」と言われました。

このフラグは元々ノリとジョークでしたが…

もし同棲フラグ再立を希望する人が居たら感想の最後にわっふるわっふる(r) (以下略)

試合終わって、その裏でうごくもの

セシリア・オルコットは、闇の中にいた。

闇の中をISスーツのまま悄然と歩いている。何故悄然と歩いているのか自分にもわからない。

疲弊しているのか思考も覚束ない。それでも足を引ずるようにして歩いていく。

その横を、一組の男女が追い抜いていった。

セシリアの目が見開かれる。彼女はその2人を知っていた。忘れられない、忘れるはずがない。それは、3年前の事故でこの世を去った彼女の両親だった。

セシリアは言う事を聞かない足に鞭をうって二人を追おうとする。もし、ここが冥界の入り口なのだとすれば、ここから彼らを引き戻せるならば、力づくでも引き戻したいと願う。でもどんなに走っても距離は狭まるどころか、どんどん開いていく。

疲れきって立ち止まると、2人も立ち止まって振り返る。2人は沈痛そうな面持ちで首を振り、とある方向を指差す。

そこに居たのは『12才のセシリア』だった。

突然の両親の死に悲しむ間もなく、2人の残した遺産を金の亡者から守るため朝から晩まで机に齧りつくように勉強していた。その一貫で受けたIS適性でA+が出た。政府から国籍保持の為に様々な好条件を提示した。それは遺産を守るためにも役立つもので、そしてイギリス代表候補生として選ばれ、第3世代装備ブルー・ティーズのマスターとして稼動データと戦闘経験値を得るために日本へ来た。

『12才のセシリア』が闇の中に消えると、今度はまた別の方向を指差す。

そこに居たのは彼女も良く見知ったIS学園の制服を着た3人組。刹那、一夏、篝がいた。

机の上に何冊もの参考書や教科書を広げ頭を唸りながら何とか理解しようと四苦八苦している一夏に隣の席に座っていた刹那と、席の前に立っていた篤がそれぞれわかりやすいよう解説している。

「あら、織斑さんはそのような事もわかりませんか？」

小馬鹿にするような声を上げて彼らの後ろから現れたのはIS学園の制服を着たもう一人のセシリアだ。

この風景は覚えていて。確か入学してから3日目の放課後の出来事だ。そしてこの後に続く出来事も知っていた。

篤が何か言いそうになるが刹那が止め、改めて勉強を再開しようとする。それが気に食わなかったセシリアは食ってかかるが、

「イギリスは紳士淑女の国と聞いていたがどうやら違ったようだ」

「わ、わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「君の発言事態がその祖国の品位を落としているのだと言っている」

再び4人が闇の中に消えていく。

今思えばそれは当然の事だ。多くの女性が地位向上の結果ISについて学んでいるが男性には必要ないものとして知識を得る機会は殆ど無い。あるとすれば企業にかかわりのある人物かIS開発関係の職を目指している科学者くらいだ。

血の繋がった姉がISの世界大会『モンド・グロツソ』の優勝者だったとしても、一般の学校に通う普通の学生であった一夏には知る機会は一切なかったのだらう。

もし過去に帰れるのであればこの時の自分を思いっきり引っ叩きたかった。努力する事の苦勞と大切さは自分がよく知っていたはずなのに。

セシリア以外全てが消え、再び暗闇に戻ると遠くから小さな光が見えた。

その光が大きくなったとき、セシリアはベッドの上で目を覚ました。

いつもと違う寝心地に困惑し周囲を見渡すと、ここがIS学園の医務室であることがわかった。微かに消毒アルコールの匂いが鼻につきこれが現実だと教える。ゆっくりと身を起こす。

「お、起きたか。オルコット」

ベッドの脇に置かれていたパイプ椅子に腰掛け雑誌をめくっていた担任教師である織斑千冬がセシリアが意識を取り戻した事に気付き顔を上げた。

「織斑、先生？　そうですわ、試合は…！」

「お前の負けだ、オルコット。まさか無意識下で戦って圧倒的不利な状況で劇的な逆転勝利をしたとかそんな都合のよいことは起こっていないぞ。お前は藤原に斬られた衝撃で気失って落下したところを助けられたんだ。後で一応礼を言っておけ」

そう、結果を見れば今日の試合は刹那にたいしたダメージを与えられずセシリアの大敗。でもその事を思い出すと旨が高まり熱くなっているのを感じた。

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって、この感情はひどく落ちつかないものだった。

（ 藤原、刹那 ）

彼の事を思い出すたびに、胸の鼓動が大きくなる。他者に媚びる

事のない眼差し。それは不意にセシリアの父親を逆連想させた。

名家に婿入りした父。幾つもの会社を経営し成功を収めていた母には多くの引け目を感じていたのだろう、始終顔色を伺う人だった。そんな父親を見てセシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを抱かずにはいらなかった。

そして、出会ってしまった。藤原刹那と。

自分が理想とする、強い男と。

「……刹那、さん……」

「オルコット？」

「は、はい！　なんででしょう!？」

ポツリと呟いたセシリアの様子に心配したのか千冬が呼ぶと慌てたように反応する。その頬は少し朱に染まっており、

「……お前、まさか藤原に惚れたのか？」

「~~~~~!!!?」

自分の心の中を見透かされたような気がしてセシリアは瞬間湯沸かし器の如く一気に赤くなる。

その様子をみて自分の勘が当たっていたことを確信した千冬は溜息をついた。

「まったく、アイツといいお前といい、あんな奴の何処がいいんだ?……まあいい。オルコット、お前が誰を好きになろうとお前の勝手だ。節度と限度をもった交際なら私は何も言わない。だが覚悟しておけ、私が知っている中で一人藤原にベタ惚れの奴がいるからな」

「そ、それは一体…!？」

「まあ、今は近くに居ないしお前はアイツと同室なんだ。せいぜい上手くやるんだな」

「はい？ 同室？ 誰と誰がのですの？」

雑誌を閉じ脇に持って立ち上がり部屋から出ようとした千冬の言葉にセシリアがきょとんとして返す。

「?……何を言っている？ お前は藤原と同室だろ」

「同室？ わたくしが、刹那さんと…?」

「……まさかアイツ、来なかったのか？」

「はい、入学式の日には先生方から部屋割りにミスがあつたとかで一ヶ月のみ一人を住まわせて欲しいといわれて簡易ベッドが持ち込まれましたが、今日まで誰も来られなかったのですが。もしかしてその人は刹那さんなのですか？」

「そうかそうか、来なかったのか。仕返しの嫌がらせ、もとい気遣いを無下にするとはいい度胸だ。覚悟はできているんだろうなあ？ ああ、オルコット。私はもう帰るからお前もとっと帰って自室で寝ろ。いいな」

満面の笑みを浮かべているが目が笑っていない千冬が退出し、一人になった医務室でもう一度ぼふっと横になる。

「藤原、刹那……」

彼の名を口にしてみると不思議と身体が熱くなるのがわかった。

なんなのだろう、この気持ちは。

知りたい。

知りたい。彼の、事を。

医務室の中を、夕日が優しく差し込んでいた。

「ここだ」

俺、織斑一夏は夕食の後、刹那につれられて教員寮の寮に来ていた。

それというのも刹那から教員寮の男性用大浴場の使用許可が下りているとのでつれて来てもらったのだ。

「使用中はちゃんとこの札を付けること」

そう言って入り口脇に取り付けられていたケースから取り出した『現在男性使用中』と書かれたひも付きのカードをドアのフックに取り付ける。

「どっして？」

「……ここは一応男風呂だが、女風呂が満員だったり清掃中だったり

するとこちらを使おうとする女性教師が居る。だからこれはその対策だ」

「マジで？」

「大マジ。特に山田先生が」

刹那が言うには何度かブッキングしたことがあるのだとか。
それはさておき
閑話休題。

俺たちはゆつたりと湯船に浸かっていた。
学生寮にあるのはもちろん女風呂だけで、入学してから昨日までシャワーで済ませていた身としては一週間ぶりになる湯船は大満足だ。それも通常の一人用ではなく銭湯などの大人数よりの湯船だ。ゆつくり手足を伸ばせるのがこれまたいい。

「風呂はいい。風呂は心も綺麗に洗い流してくれる、日本人の生んだ文化の極みだよ」

肩までゆつたりと浸かって頭の上にタオルを置いている刹那の咳きに俺も激しく同意する。

俺より少し背は低く、普段は制服でわからないが刹那の身体は適度に鍛え抜かれ最適なバランスをもっている。

「……………なあ、刹那」

「ん〜？」

「俺も、刹那みたいに強くなれるかな」

俺の脳裏に浮かんだのは今日の試合の事。

代表候補というエリートに対し、圧倒的というまでの戦闘結果。殆どダメージを受けず近接戦闘で決したその動きは俺の理想に近かった。

俺も、できるだろうか？

刹那のように。いつも頼れる兄みたいな幼馴染に。俺は追いつけるのだろうか。

「機体の性能差が、勝敗を分かつ絶対条件ではない」

「刹那？」

「ある軍人の言葉だ。どんな機体でも、結局最後に勝敗を決めるのは操縦者の腕次第、と言う事だ」

「そうなのか」

「……もっとも、チー姉に勝つには阿修羅すら凌駕しなければ勝てそうにないがな」

「まったくだ」

「ま、お前の場合はまずはもっとISに慣れてからの話だな」

「うう、面目ない」

刹那の言う事も正論だ。現に俺はこの一週間の訓練で刹那が使う打鉄やラファール・リヴァイヴはおろか千冬姉が使う打鉄改（仮）よりも基本カタログスペック全てが格段に上の白式を使っているのにまったく相手にされないのだ。

勝てるようになるのは何時になるのだろうか。

「兎も角、改めてよろしく頼むぜ。相棒」

「……おう！」

刹那が差し出してきた手の甲に俺も手の甲をがっつんとぶつける。昔から俺たちのハイタッチみたいなものだ。

風呂場に俺たちの笑い声が響き、今日は何事もなく終わるのだった。

『切捨て…御免っ!!』

剣士の両手に持つ二刀流の光の剣で青の姫騎士が斬られ、試合終了となったところで映像は終わった。

その薄暗い部屋に三人の少女が居た。その様子はさながら王に仕える忠臣のようで室内には厳かな緊張感が漂っていた。

「いじょくがあ〜、今日あった、せつなんとセツシーの試合ないようです」

微妙に間延びして何処か眠たそうな声で少女が報告する。本当に眠いのかそれとも元々なのか線のような糸目が印象的だ。

「鳴り物入りで入学してきたイギリスの代表候補がほとんど手も足も出ずに敗北するとは…」

「ま、こうなることは事前の報告からある程度予想できてたけど」

眼鏡をかけた真面目そうな少女の言葉に中心にいる少女が「んー」と思索しながら手にしていた扇子でゆったりと仰ぐ。

「決めたわ、彼を引き入れるとしましょう。我らが我らであるために」

「では？」

「近く機を窺って接触します。あなたたちは最低限の監視とバックアップを」

「了解しました」

「らじゃ〜」

くすり、と王は晒う。

それはさながら獲物を見つけた猛禽類のようであり、冷徹なる氷河の女王のようで、見るものを魅了しては止まない。そんな笑みだった。

「覚悟してもらいましょうか。白い悪魔、原母の守護剣士…いいえ、藤原刹那くん」

パチンと夜闇に扇子を閉じる音が静かに響いた。

「ふう、相変わらずいい湯だった」

今まで何度となくあった山田先生の男風呂突撃事件も今日は珍し

くなく、風呂場で一夏と別れた後に俺は雲もない晴天の夜空を見上げていた。

『そっぴや今日って刹那の誕生日だったな、おめでとう』

さっきの一夏の言葉を思い出す。そう、今日は俺の16才の誕生日だ。

言われるまで忘れていた。両親が死んでから祝われたことなどない。チー姉もタバ姉も何処か抜けてる所があるからな。

「だが、こっぴつのも悪くはない」

ただ、言葉だけの誕生日。でもそう思う。

「そっぴか、ならこれは私からの誕生日プレゼントだ」

後ろからの良く知った声。俺も気付かないとは随分気が抜けてい…むぐ!?

口を布で塞がれる。この匂いは!?

まっぴたく、あんたは……仮にも自分の生徒に薬を盛るなよ……

「…教師、辞めてリアル007にでもなれ……チー姉…」

「黙れ、馬鹿者」

薄れ逝く意識のなかで、俺はチー姉に担がれて運ばれていくのだ。つた。

シャワーからあがり、寝間着に着替えたセシリアは困惑していた。自分の天幕付きベッドの上に置かれた謎の物体A。

具体的に言うなれば、布団をロール状に巻きロープで嚴重に縛っている。その片方からは黒い髪が見え、反対側からはよきつと二本の足が見えている。

あきらかに誰かが簀巻きにされていた。

そして、枕元にあった見覚えのないメモには「好きに使え by 織斑千冬」と達筆な書き置が。

おそろおそろロープを解いて中を確認すると、

「せ、刹那さん……？」

中には刹那が眠っていた。先ほどまでずっと考えていた彼と思わぬ遭遇にセシリアの胸の高まりが一段と高くなる。

どうして彼が簀巻きになって自分の部屋にいるのか？ いや、彼も同室なのだから鍵は持っているはずだから別段問題ではない。

彼の状況、そして書き置くから推測するに、織斑千冬が簀巻きにして置いていったと考えるのが妥当だろう。当然寮の責任者を兼任している彼女は有事の際に対応できるよう全室のマスターキーを持っているはずだ。もっともこんな事をするために使ってよいのか疑問であるが。

だが、今はそんな些細な事はどうでもいい。今日の前では気になる異性が寝ているという事。

その前髪を撫でる。癖のあるもさらさらな黒髪の感触を感じながら、慈しみのある眼差しを向ける。

「貴方はわたくしを墮としましたわ、ですから今度はわたくしが貴方をオトしてみせますわ。覚悟なさい」

照明を落としてベッドの中に潜り込む。静かに寝息を立てる彼の

顔を見ながら。

「おやすみなさい、刹那さん……」

夜は静かにふけて行く……あらゆる問題を抱えつつも……
そして、教員寮の一室で小さな爆音が聞こえたそうなの……

試合終わって、その裏でじじくもの（後書き）

さーて、今回のお題ですが、

セシリアの自覚

ー夏の初体験（お風呂を）

せーとかいのやぼー

放り込まれる刹那

の4本でした

ユニーク10000ヒット記念期間限定作品

くアノ人が武力介入しようよ

ご好評につき本作もユニーク10000ヒット達成しました。
ってかアニメ効果まじパネエ…

唐突だが、私は死んだ。そして生まれ変わった。

唐突すぎてわからないだろう。私だってそうだ。

そもそもあれは西暦2314年。小さな問題をはらみながらも緩やかに恒久平和へ向けて進み始めた地球圏に飛来した未知なる存在、連邦政府は地球外金属異星体：ELSと名付けたソレとの武力衝突へと発展した。

そして私は、次期主力機候補の最新鋭機に乗りELSとの戦いに赴いたのだ、そして、

「未来への水先案内人は、このグラム・エーカーが引き受けた！」

侵食されつつある愛機に鞭を打ち突進させた。

すでにELSの金属皮膜は自分の身体すら侵食している。このままでは辿る未来はただ一つ。

ならば、そうなる前に 生命の輝きを見せるのも一興！

誰かの、少年の役に立つ事が、これほどまでに喜びをもたらすとは！ できうるならば、もっと早くに知りたかった。

最後に自由のきく右腕を使って操縦桿をめい一杯押し込む。既に皮膜に被われていないのは顔と右腕、そして上半身の一部のみだ。再生しつつある超大型ELSの隙間に向けて愛機を進めながら、この隙間を作った青と白のガンダムの中にいるであろう少年 もっとも今は青年だろう を既に動きにくくなった首を無理矢理曲げて見た。

「これは、死ではない！ 人類が、生きるための ！！！」

そう、私は死ぬために戦うのではない。これは

今まさに閉じようとしている隙間に滑り込むと太陽炉のリミッターを解除し、暴走させる。

外では侵食された機体や武装を失った機体が何機も太陽炉を暴走させて自爆していくのを見てきた。

この愛機には通常は1基の太陽炉が2基搭載されている。単純計算なら2倍以上！ 内部からであれば防ぎようもあるまい！

隙間が閉じたと同時に太陽炉が臨界点を突破し、私の視界は赤い閃光に染まった。

後は頼んだぞ、少年……

の、はずなのだが、何故か私は再び生を受けた。そして今はバスケットに入れられて教会の前に捨てられていた。

「まあ、こんなところに赤ちゃんが？」

教会から出てきたシスターが私を抱き上げる。

私は前回と同じで孤児か。

「あら、可愛い女の子ね」

これが、かつて師の元で読んだ書物に書いてあった輪廻転生か。それに比べれば性別が変わることなど些細な事さ。

「名前が書いてあるわね、グラハム…グラハムちゃんね。男の子みたいな名前ね」

前回と名前は変わらずに。

しかし、顔も知らない父と母よ。今度は女として生まれた私に男の名前をつけるなどは一体どういう事だ？

何はともあれ、私、グラハム・エーカーはこの世界で二度目の人生を送る事となった。

そして、27年後。

この世界、前回の世界より300年近くも前の世界だとわかった時には衝撃だった。

具体的にはまだイオリア・シュヘンベルグが生まれるかどうかといった時代である。

この世界にMSはなかったがISという兵器があった。当然アラスカ条約でISの兵器利用は禁止されているも各国は平然と自国の軍備に加えていた。

この宇宙用作業服としてISが発表された当初、私は戦闘機パイロットとして在日アメリカ軍に所属していた。孤児である私がりあがるにはやはり前回同様軍に志願するしかなかった。

そしてその日、起きた。各国のコンピューターが一齐に暴走し、2000発を越える大陸弾道ミサイルが一齐に発射されたのだ。

ミサイル迎撃に出た私は出合った。2つの存在と。
剣一本で飛来するミサイルの半数を切り捨てた白い騎士。

そして、見間違える事もない、白と黒のガンダムを。サイズこそ頭頂高2〜3mほどである GUNDAM と書かれた装甲と、背

中のコーン型スラスタからあの懐かしい淡い緑色の粒子を放出しながら右手のビームガンで白い騎士が切りそびれたミサイルを打ち落としていく姿を。

その後、アメリカ軍より白い騎士の捕獲命令が出たものの白と黒のガンダムについては何もなかった。それもそのはず、電子機器にはそれは存在しないこととなっていた。レーダーは故障し、映っていたのは白い騎士のみ。私は知っていた。それはあのガンダムのGN粒子による影響が電子機器を麻痺させていたのだということ。

それと、結果だけいえば白い騎士の捕獲は失敗に終わった。なんせあちらは最高飛行速度はともかく、ドッグファイトでは戦闘機に近い機動力を持つ上、小回りがきき、なにより小型なのだ。直線速度こそ高い戦闘機だが旋回能力は低く、次々に撃墜されていった。

その後、白い騎士のデータが公表され、世界は変わった。

女性にしか扱えないその兵器の登場に世界は一変、各国は女性優位の政策を打ち出し女尊男卑ともいうべき歪んだ世界が形成された。私は数少ない女性士官、それもパイロットであったため上層部の指示によりIS開発へ転属する事となった。

そしてISは表面上は軍事力ではなくスポーツとして使われ、私は国家代表に選出されるも第2回大会をさる理由でボイコットした責任として代表を引退。現在は特殊部隊『アイエスワットISWAD』の隊長を務める傍ら、未来の代表候補たちを育て上げる教導隊のような仕事を兼任していた。

「やあ、グラハム。ティナの事を覚えているかい？」

「教え子達の事は全員覚えているつもりだが」

前回と変わらず友である技術者、栗色の長髪を後ろでまとめて眼鏡を掛けている男。ピリー・カタギリの問いに返す。

ティナ、ティナ・ハミルトンだったか。まだ荒削りだが将来が楽

しみな生徒だった。確か今は日本のIS学園へ留学していたのだったか。

「その日本にいるティナから面白い映像が送られてきたんだよ」

そういつて携帯端末を差し出してくる。

そこに写っていたのはロールした金髪に青のISの乙女と、かつての少年が武力介入と時に使っていたガンダムに酷似したISだと！？

「先日行われた隣のクラスの試合で、イギリスの代表候補の新型と噂のISが使える男子のC・B社の試作機だそうだけど」

横でビリーが状況説明をしているが既に私の瞳はガンダムに釘付けた。相手が代表候補とは言え新型を与えられている以上並大抵の腕ではあるまい、それを一蹴するなど確かにこれはガンダムだ。

自分が乙女座であった事を、これほど嬉しく思ったことはない。

「この機体の背中の特徴的なスラスタ、もしかして君が白騎士事件の時に目撃したガンダムと書かれたISと同じかい？」

「多少異なるが間違いない、ガンダムだ！ ビリー、ティナにこの操縦者のことを調べるよう伝えておいてくれ」

「合点承知」

ふふふ、何と言う僥倖。生き恥を晒した甲斐があったというものだ。

抱きしめたいよ、ガンダム！

END

グラハム・エーカー

27才。元アメリカ代表IS操縦者であり、現アメリカ軍所属IS特務部隊『ISWAD』アイエスワッドの隊長。階級は大尉。

劇場版で超大型ELSに特攻したグラハムが転生、もしくは憑依した女性。

米国版織斑千冬というべき人物であり、第一回IS世界大会で千冬と死闘を繰り広げ僅差で敗れる。

第二回大会にも出場し千冬と共に優勝候補筆頭に上げられるも突如の千冬の辞退により単独首位独走かと思われたが「興が乗らん」と言い残し辞退してしまい大会は混沌の渦に叩き込まれた。

当時としては珍しく近接ブレードを主体として戦い、ファンからは『アメリカのサムライ』や『武人』と呼ばれていた。

現在は代表を引退し、ISWADの隊長を務める傍ら後輩の育成に力をいれている。もつとも、本編における彼女の出番はほとんど予定していない（そもそも彼女の存在自体、グラハムネタの気ぶりに作者が悪乗りした結果である）。

現在使用しているISはアメリカ軍主力ISフラッグの専用カス

タム機、『オーバーフラッグ』。

ビリー・カタギリ

31才。アイリス社からISWADへ出向している技術顧問。階級は特務大尉。

グラハムとは彼女が代表時代からの性別をこえた親友というか心友。

学生時代からとある女性に仄かな思いをよせているが、後輩のミナ・カーマインに露骨なアタックをかけられている。

ISフラッグ

グラハムがテストパイロットを務め、アイリス社が開発しアメリカ軍で制式採用されている第2世代量産型IS。

同世代の打鉄やラファール・リヴァイヴと比べ高い空戦機動力に定評があり、フラッグの操縦者の事を自他共に『フラッグファイター』と呼ぶ。ただし米軍専用として運用されている結果、IS学園では使用されていない。

仮面のような大型センサーマスクが特徴。

基本武装はリニアライフル、ソニックブレード兼プラスマソード。デیفュンスロッドの装備は選択できるが、ISにはバリアーシールドがあるため使う者は極少数の変わり者となっている。

ちなみにテスト中にグラハムが変形機能を所望したが、コストと構造の関係上実現することはなかった。

ISオーバーフラッグ

グラハム・エーカー専用としてISフラッグをビリーとフラッグの開発者であるレイフ・エイフマン教授がフルカスタマイズした機体。開発当初の名称はカスタムフラッグだった。

世代は準第3世代機、もしくは2.5世代機に分類される。しかし現在発表されている各国の第3世代機と比較しても遜色ない性能をほこる。

専用の大出力フィン・スラスタと徹底的な軽量化によりISフラッグの倍近い戦闘速度を出せる。その反面装甲は全IS中最も薄く、エネルギーの消費も激しく戦闘時間は半分以下となってしまう。

基本武装は専用大型リニアライフル「トライデントストライカー」、ソニックブレード兼プラズマソード。さらにグラハムは趣味でデIFエンズロッドを装備している。

ISブレイヴ（正式名称は「GNドライブ実験機」）

この話よりしばらく後の設定となるが、C・B・社がIS委員会からの度重なるGNドライブの無条件全情報開示に対し「できるもんならテメーらで勝手にやりやがれ」と言わんばかりに各国にばらまいた擬似GNドライブを始めとしたGN兵器のうち、アメリカが確保できた2基の検証実験機としてISフラッグをベースに開発された特殊実験機。分類上第3世代機となる。

C・B・社が日本用に開発した第3世代機「磨修羅生（後の量産機、刃鉄）」を参考にして両腰のスカートアーマーに左右1基ずつ擬似GNドライブを搭載され、ISフラッグに通じる構造が残っている。

グラハムがテストパイロットを務め、ブレイヴと命名する。

やはりと言うべきか、この機体にもグラハムが熱望した変形機構

は実現しなかった。なんてこつたい。

基本武装は専用GNビームライフル「ドレイクハウリング」、GNビームサーベル、GNバルカン、GNビームキャノン。

さらにドレイクハウリングとGNビームキャノンの3門を収束させた必殺技、「トライパニッシャー」を使用できる。

ユニーク10000ヒット記念期間限定作品

くアノ人が武力介入しようよ

という訳で、TSグラハムさんが武力介入しようとする話です。
最も本編で絡む予定はありませんが…

クラス代表♪でか白兔とちび黒兔のろっくんろーる♪(前書き)

みんな大好き眼帯黒バニーガール参上！
ちよっとだけよん

クラス代表くでか白兎とちび黒兎のろつくんろーるく

「ぱらりろぱらりらへろく」

薄暗い部屋の中、微妙に音程がずれたゴッド・ファーザーのテーマを口ずさむ軍服姿の長い黒髪の女性は壁のコンソールに繋げたモバイルパソコンを操作していた。

服のサイズが合わないのか、特に胸元が限界まで引き伸ばされその隙間から妖艶な大人の肌が覗いている。

更に異質な事に、その頭にはウサミミ付きのカチューシャが彼女の動きに反応してか時おりびくびく揺れている。

その女性の名は東雲亜理子。世界的に急速に発展しつつあるC・B・社の社長兼技術主任であり、その真の名は篠ノ之束と言った。

最も最近では真の名前で名乗った事も呼ばれた事も片手で数えられるぐらいしかないのだろうか。

左手でパソコンを支えているので右手だけで操作しているのだが、目まぐるしいスピードでデータが入力されながら画面がスクロールしていく。

「ちよいちよい…あそればちつとな!」

膨大な量のデータを入力していきEnterキーを押すとパソコンから急速にデータが送信され、扉の電子ロックが解除される。

「ふっふっふう、みんなのアイドル束さんの手にかかればドイツ軍基地のセキュリティなんて赤子の手を捻るより簡単さあ!」

とんでもない事を口走りながら扉を開ける。

まさかこの基地の人間達はたかがモバイルパソコン一台でハッキ

ングされ掌握されるなど夢にも思わなかっただろう。

今、彼女がいるのはとあるドイツ国内にある軍事拠点、それも基地の人間ですら極一部の者しか知らない隠し通路であった。何故こんなところにいるのかというところ…

「おうおう、こんな所に巣くって粗悪品なんか作っちゃって。でもこの程度のためにわざわざこの私が出ばってくるなんて、ほんと私つてばせつちゃんに尽くす女だなー」

彼女の目の前に並ぶのは円錐状のパーツ。それがズラリと並んでいる。その数は30弱。

一見なんのパーツかわからないが、彼女は知っていた。よく目にする、というより自分も似たものを作っている。

擬似GNドライブ。それが彼女の前にある円錐形の物体の総称だった。

電力を流す事でGN粒子を発生させる機関であるが、その基礎研究は数十年前に彼女の恩師が既に終えていたものだ。この特殊粒子は人類に多大な恩恵をもたらす事ができる。丁度恩師が開発した太陽光発電システムや現在は停滞しているが宇宙開発計画と同様にそれが公表されなかった理由はただ一つ。この機関で発生したGN粒子には一種の毒素が含まれていたからだ。だから恩師は毒素を含まない、もしくは少ないGN粒子を精製できるオリジナルGNドライブを作り出したのだ。

「それも先生が作った初期型とまったく同じ。ま、コソドロコーレくんにはこの程度の猿真似が限界かねえ」

所詮は他人から盗むしか能がない亡国機業^{コレクくん}か、と声に出さず頭の中で付け加える。

「はて、でも先生はどうやってオリジナルを作ったんだろうね？」

首を傾げる。オリジナルGNドライブを刹那とともに託されてから3年弱。今まで何度も解析しようと試みるがそのコアの生成法は彼女にもわからない。わかっているのは特殊なベースマテリアルを超高圧の重力で凝縮したらしいといった程度で、何をどれくらいつまで圧縮したのかは現在は失踪した製作者にしかわからないことだ。

「『ソラで種を集めて井戸の中心に落とす』って、何のことかさっぱりだよ。先生もつとわかりやすく書いてね！」

そこでウサミミがピクピクツを大きな反応をする。

「やや！ 私のせつちゃんセンサーに緊急反応あり！ ……襲つてるのはちーちゃん？ でもちーちゃんのツンデレのデレはいつくんにしか向かないはずだけど、もしかしてヤンデレた？ 何かやな予感があるからさっさと終わらせて帰る帰るお家に帰る」

丁度この時、風呂上りの刹那が千冬に薬で眠らされ拉致られた時間である。

そして束の予感はある意味当たっていた。この後、刹那はある少女の部屋に簀巻きにされて放り込まれることとなるのだから……

「いくぜ私の専用機、ラジエール！！ これからスーパー束さんタイムだ！ ハーハッハッハッハッゲホゴボツ！！」

慣れない高笑いをあげ、噎せた束のウサミミが粒子に変換されると、その全身を被っていく。服は量子変換され、そのしなやかな肢体を装甲が被う。

レオタードのような白いISスーツが豊富な身体を惜しげもなく曝け出しそれを彩るのは青い装甲、非固定浮遊部位には5対10枚の羽状の白いフィン・スラスタを装備している。

さながら甲冑をまとった天使といういでたちだ。その右手にはロングバレルの大型ライフルが握られていた。

セラアラシエル
天使の本。それが束が自分専用には刹那のエクシア、及びアストレアの兄弟機的设计データから再設計したISの名前だ。

他にも設計されていた候補機でサダルスード、アブルホール、プルトーネといった各種設計データもあつたが彼女がラジエルを選んだ理由はただ一つ。このバディが気に入ったからである。ボディではなくバディである。

動力は通常のISコアから出る駆動エネルギーに、武装関係には各所に設置されているGNコンデンサに備蓄されたGN粒子を使用している。

「じゃ、さくつと逝ってみよーか！」

ジャキンツ！ と2本のアンテナが伸びるヘッドギアからバイザーがおりて顔の大半を被うとGNロングビームライフルのセーフティが解除される。

GNロングビームライフル・バヨネットモード。

トリガーを引く。銃口から迸った光は光弾でもなければ光線でもなく光刃であつた。これが銃剣形態。バヨネットモード原理はビームサーベルと同じでGN粒子により固定化された大型粒子ビーム剣だ。別名ロングビームサーベルとも言う。

近距離で扱いにくいGNロングビームライフルに束が追加した独自の形態だ。

横薙ぎに一閃。並んでいた擬似GNDライヴを一字切りに全て破壊すると今度は室内に数個のハンドグレネードを放り込む。

「ほい、これでしゅーりょー。後はてっしゅーてっしゅー、っておっつと」

目的であった擬似GNドライブとその製造施設を完全に破壊し尽くして何時もの通りルパン三世ばりにすたこらさつさと逃げようとした足元に銃弾が撃ち込まれた。

「デメエ、よくもやってくれやがったな！」

「…EU軍のイナクト？　こんなところに居るといふ事はキミがユレーくんか」

赤系にカラーリングが変更されている現EU連合軍の主力第2世代型ISであるイナクト　おそらく何らかのカスタム機であろうを見て東はバイザーの下で目を細めながら先程までのあどけない口調とは打って変わって冷淡になる。

ISイナクト。EU連合が米軍のフラッグをばくる、もとい参考にして作られた最強の第2世代量産機といった触れ込みだが、その評価はEU以外からはフラッグの猿真似と言われるほど内部構造は似通っていた。

フラッグの製造元であるアイリス社のとあるポニーテールの男技術者のコメントは「特徴的なのは形だけ」だそうだ。

「こっちの商売を邪魔しやがって、ただで済むと思ってんじやないだろうな、ああ!？」

東は無言でGNロングビームライフルの引き金を引く。

今度は光弾が走るがイナクトは通路沿いにバレルロールする形で粒子ビームを避けると腰から近接ナイフ、ソニックブレードを引き抜く。ナイフから周囲に不快感を与えかねない高周波が発生する。

ISが自己判断で音をシャットダウンするがもしISを展開していなければ耳を塞がなければ耐えられなかっただろう。

「代わりにテメエのISを寄越しやがれ!!」

ISの装甲をも切り裂くソニックブレードを突き立て操縦者を殺そうとするが、次の瞬間イナクトは吹き飛ばされていた。

いや、弾き飛ばされたのだ。

束は後腰にマウントしていたGNビームサーベルの柄を握り、無造作に野球ボールを打ち返すかのようにその光剣でソニックブレードごとイナクトを薙ぎ払ったのだ。

「…私は、接近戦こっちの方が得意なんだよ」

壁をぶち破りドーム状の空間、おそらくIS演習用の室内アリーナであろう場所まで吹き飛んだイナクトが立ちなおす。その後を束がGNロングビームライフルを乱射しながら迫る。

「お前達みたいな奴らに、おじ様達は」

「へッ!」

軽く笑うと無造作に粒子ビームをかわし、ソニックブレードをプラズマソードモードに切り替えてそれを迎え撃つ。

粒子ビーム剣とプラズマ剣が鏖競り合いを起こし、光が跳ねる。

「殺し甲斐があるぜ!」

「…ぶっ潰す」

「やれるもんなら、やってみやがれ！」

敵と縦横無尽に切り結ぶ中、束はISを操作しながら思考のみであるシステムを立ち上げる。

38桁に及ぶパスワードを瞬時に入力。

スキャンセンサーが束の両目を走査し、バイオメトリクスが認証しシステムが完全に起動する。

トリアルシステム、スタンバイ。

ぼちつとな、と言いたげに視線でOKボタンを選択した。

その瞬間、切りかかろうと手を振り上げたイナクトが止まった。

元々そういう形で作られたオブジェであったかのように固まってしまう落下して地面に激突した。

篠ノ之束は自他共に認める天才であり、また変人であった。しかし決して狂人ではない。

もし自分が作り出したISが本来の目的とは異なり戦争に使われる事を想定し対策として全てのコアにある細工を施していた。

コア一個単位での無条件緊急停止システム。刹那によって審判システムと名付けられたそれはセファールラジエルの切り札であり、束の生体データとの連動によりコアネットワークシステムを通じて文字通り全てのコアの機動を無条件で停止させてしまうシステムだ。

更に悪質な事にそれはコアのブラックボックスの中で機動中枢と連動しており、事実上の解除は不可能である。

このシステムが適応外のISは一体、GNドライブをコアとして採用しているエクシアだけだ。

「な、何がどうなってやがる！ くそつ、動け！ 動けってんだよ！」

絶対防御だけは何とか残っていたISに守られ無事であったが、コアが停止して動くことのないイナクトを遮二無二動かそうとするがウンともスンとも言わない。

その前に束がゆっくり降り立った事にすら気付かない。

「あえて言おう、カスであると!」

赤いイナクトの操縦者が最後に見た光景はGNロングビームライフルとGNプロトビットの計11門の砲口だった。

その後、「ユニバアアス!」と謎の雄叫びを上げて黒煙立ち上る基地よりかっ飛んでいく青い天使が周辺住民達に目撃された。

試合からあけて翌日、朝のショートホームルーム。

「では、一年一組の代表は織斑一夏さんに決定です。あ、一つながりでいい感じですね!」

山田先生が喜々として喋っている。そしてクラス中大いに盛り上がっている。暗い顔をしているのは一夏だけだ。

「先生、質問です」

挙手する一夏に「はい、織斑くん」と山田先生が指名する。

「そもそも、俺は試合に出ていないのですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか?」

「それは 藤原君が辞退したからです」

「そう、断固辞退させていただいた」

「~~~~せえ〜つう〜なあ〜」

今度は俺の方を「ブルータスお前もか」って目で見てくる。

「一夏」

「……あんだよ」

「君はいい友人であつたが、君の姉上がいけないのだよ。ハハハハハ」

俺を気絶させ、その隙に部屋をリフォームと言う名の全壊にさせた君の姉上がな。私物がほとんどない事が幸いだったか。最も持ち込む私物などほとんどないのだが。

学園長より修理費とリフォーム代はチー姉の給料から天引きされることとなったが、修理完了までの約一ヶ月間は俺はセシリアさんと同室になることとなったのだからこれくらいのおちよくりは許されるだろう。

朝起きた時まず目に入ったのはテレビの中でしかお目にかからない天幕付きのベッド。左腕が少し痺れるので目を向ければそこには俺の腕を腕枕にして添い寝するようにすやすや眠るセシリアさん。マジで一瞬何が起きたのかわからなかった。

ちなみにセシリアさんとは名前で呼び合うようになった。朝起きたら姓ではなく名前で呼んでほしいといわれた。

「は、はかつたな刹那!!」

パンツッ! パンツッ!

「何馬鹿をやっている貴様ら」

お馴染みチー姉の出席簿チヨップ。

この痛みにもいい加減慣れてきたな。一夏も復活が早くなった。

「藤原もきちんと説明してやれ」

「だからさつきも言った通り、全ての原因は俺の部屋を半壊させたチー姉への八つ当たりだ」

「ち、千冬姉えええええ!!」

おお、血涙なんて初めて見たぞ。それに目を反らすなチー姉。

「ふ、藤原く〜ん……」

半泣きになりながら何とかしてください、と顔で訴えてくる山田先生。

これじゃあ進みそうもないし、しかたないか。

「まあ、本音は置いといて」

「それが本音なのかよ!？」

くわつとこつちを睨む一夏。だからその血涙拭け。

「一夏、代表選出の時のチー姉の言った事を覚えているか？」

「千冬姉の？」

「あくまで代表戦とは各クラスの実力推移を測るためのものであり、つまりクラス全体の成長率として扱われる。つまり慣れている俺やセシリアさんよりもまだ動かして一週間の一夏の方が目に見えてわかりやすいという事だ」

「う、うむむ……」

ある意味正論なだけに一夏も唸る。

それに以前に前年までの生徒資料を見せてもらった事があった。

代表候補は1学年にいても10人、少ない年は1人という年もある。そして専用機持ちは1学年に0の年もあったそうだ。

つまり、各クラスは代表候補のうえ専用機持ちがいても1年生のクラス対抗戦の大半ではワンサイドゲームになりかねない事から暗黙の了解というか、自ずと自重する傾向がある。

まあ、一部に空気の読めない子がいるわけだが。

そんな環境からすると初心者とは言え専用機持ちの一夏の存在は破格の存在だと言えた。

「まあ、俺も箒も訓練を手伝うから」

「わたくしもお手伝いいたしますわ!」

セシリアさんが立ち上がり、何時もの腰に手を当てたポーズを決める。

「わたくしと刹那さん、二人で教えて差し上げれば織斑さんもみる

みるうちに成長いたしますわ」

「生憎だが、一夏の教官は私と刹那で事足りている。第一近接型の一夏に射撃中心でどう教えるつもりだ」

この後、篁とセシリアさんがランク云々で言い合っが結果としてチー姉の喧嘩両成敗の出席簿チョップで静かになった。

「取りあえず、クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

一夏以外「はい」と答える。団結する事はいい事だと思う。

「一夏、対抗戦もデータ収集の一貫だと思って頑張ってくれ。俺からも社長に特別手当を出してもらえるよう申請しておくから」

「ああ、ありがとよ。刹那」

こんな騒ぎがあつて、今日一日は始まった。

「くそ、何で…何でだ…!!」

その日の任務は彼女達にとって気軽なもののはずであつた。

昨夜国内の基地を強襲した謎のISの破壊。

相手はたった一機であり、こちらは国に振り分けられた10機の内3機が、それも最新鋭である第3世代ISが配備されているのだ。自分達にとっては気軽なハンティング、になるはずだった…

なのに……

『きよーのわったしは すつてきにむつてきい』

『た、隊長おつ……!!』

青い天使が謎の歌を歌いながら銃剣で最後の僚機を貫き撃墜した。そして今までの戦闘で自分もレールカノンとワイヤーブレードを失っている。

その僚機も先程撃墜されたもう一人と同じく絶対防御により操縦者は無事なもの、IS自体は大破同然だ。つい先日配備されたばかりの3機の虎の子の内2機がスクラップとなってしまった。既にコア以外は粗大塵同然である。

「貴様あ!!」

彼女の中で色々な何かが切れた。もちろん白いISスーツで強調されている、自分にはない女性的なシンボルだけが原因ではない。そうだ、そうに決まっている。あんな大きなモノをぶら下げていて邪魔でないはずがない、全然うらやましくなんかないぞこんちくしよう! そう自分に言い聞かせながら狙いを定める。

撃墜した瞬間に気がとられている所をA・I・Cで動きを止める。アクティオン・シキルンセラ
今まで散々いたぶられたのだ、どう調理してやるか。まずはプラズマ手刀でその胸を突き刺して、と考えた時

『この私にこんなインチキ使ったあいい度胸だ! 本日二度目のイカサマ裁判タイムさあ』

トリアルシステム、スタンバイ。

『おしおきだべー』

青い天使が何かを口走ると縛り付けていたA・I・Cが解除され、再び自由に大空を飛びまわる。それどころか今度は自分のISが止まってしまっではないか。

相手もA・I・Cアクティオナーシキルンセラを持っている？ と一瞬考えるがそれは違つとすぐさま判明する。

空間に縛り付けられる訳ではなく、ISはウンともスンとも言わず地表へ落下してしまつたのだ。

まるでコアが故障して停止してしまつたかのように。絶対防御などいくつかの重要なシステムを除いて停止してしまつたのだ。

『獲物を前に舌なめずりは三流のすることさあ！ ウサギちゃんはね、食べられちゃうためにいるんだよー？』

私もせっちゃんに美味しく食べられたいなー、と小首をかしげて呟きながら非固定浮遊部位アンロックユニットに浮遊していた10基のフィン・スラストターが分離して動けなくなった黒いISを取り囲む。

いや、フィン・スラストターなどではない。これは…

『強すぎてゴメンナー、狙い撃つぜえええ！』

一見謝っているように聞こえるが謝罪の意思など微塵も感じさせない声とともに10の粒子ビームが黒いISシユヴァルツロアケン、黒い・雨の操縦者、銀髪に眼帯をつけた小柄な少女、ラウラ・ボーデヴィツヒを飲み込んだ。

クラス代表でか白兔とちび黒兔のろっくんろーる（後書き）

さて、今回のお題は

スーパードさんタイム

ー夏代表就任

白兔対黒兔 眼帯黒バニーガールは白兔さんに食べられてしまいました

の3本でした。

授業とパーティーと悩み事

「ではこれよりISの基本的な操作を実行してもらおう。織斑、藤原、オルコット。試しに飛んでみせる」

刹那とオルコットさんの試合から一週間後、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部なくなった頃。

俺は今日もこうして鬼教官こと千冬姉の授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

せかされて意識を集中する。既に刹那もオルコットさんもISを展開していた。

俺は右腕を突き出し、待機状態のガントレットを左手で掴む。

個人用の専用機はフィッティングしたら操縦者の身体でアクセサリー状で待機している。が、刹那の腕輪は兎も角、俺のは完全に防具だなんてだろ？

(来い、白式)

心の中で呟くと0.7秒で展開。右腕から光の粒子が溢れ、再集結するようにまとまり、IS本体として形成される。

隣の刹那のエクシアとオルコットさんのブルー・ティアーズも両方とも先の試合での損傷は完全に修復が終わっていた。もっとも刹那のほうは失ったシールドとビームダガーを補充した程度らしいが。

「よし、その場から急上昇しろ。ただし藤原はフェザーは使わない」

言われて次の瞬間には2人とも急上昇していて遙か頭上で静止していた。

「何をのろろしている。スペック上の出力ではブルー・ティアーズはおろか今のエクシアより白式の方が上だぞ」

通信回線から早速おしかりの言葉を受ける。

ちなみに急上昇、急下降は昨日習ったばかりだ。『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で行うらしいが、何となく感覚がつかめない。

「織斑さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「結局は自転車と同じで何度も乗って慣れるしかない。経験を積みばISの方もあわせようとしてくれる」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体まだあやふやなんだよ。なんで浮いているんだ、これ」

白式には翼状のフィン・スラスタが背中の非固定浮遊部位に二対あるが、どう考えても飛行機と同じ原理で飛んでいない。大体、翼の向きと関係なく好きに飛べるのだから、ますます訳がわからない。

それ以上にわからないのが刹那のエクシアだ。ドーム状というかコーン状？ そんな感じの背中スラスタから緑色の粒子を放出しているだけで飛んでいるのだから更にだ。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

すぐさま断る。絶対に俺の頭では理解できない。

刹那との試合以降、何かと俺の訓練に手を貸してくれている。それは非常にありがたいし、流石に代表候補だけあって優秀だ。

でも、どういった心境の変化なのだろう。初めて会ったときの態度が嘘のように思えてくる。

「習うより慣れるという通り、こればかりは何度も基本動作をこなすしかない」

「よろしければまた放課後に刹那さんとふたりで指導して差し上げますわ」

……ははぁん、そう言う事か。

つまりはオルコットさんは刹那の事を好きになってしまったのか。こりゃ強敵出現だぞ箒……

でも実際に刹那やオルコットさんの方が箒の教え方よりずっとわかりやすい。刹那は企業所属、オルコットさんは代表候補ということもあって知識面も豊富で非常に勉強になるのも事実だから俺としては助かってるけど。

これが箒の場合だと、『ぐっ、とする感じだ』『どんっ、という感覚だ』『ずかーん、という具合だ』といった感じでほとんど役に立ちそうにないものなァ。

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。

約二百メートルは離れている地上では山田先生が箒にインカムを

とられて「返してくださいあい〜」とおたおたしていた。あ、千冬姉に殴られた。

「次は急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ。藤原、オルコット、織斑の順だ」

「了解、降下開始」

「では、お先に」

まず刹那が地上へ到達するとオルコットさんも続いて向かっていく。ぐんぐん小さくなっていく姿を感心しながら眺めていた。どうやら二人とも難なくクリアしたらしい。よし、俺も行くか。

意識を集中。背中のフィン・スラスターからロケットファイアーが噴出しているイメージを思い描く。それを傾けて、一気に地上へ。

ギョーンッ！

ズドオオンッ！！！！

「なに犬神家の一族ごっこなどしているか、お前は」

一応地上には着いた。

ただしこれは専門用語では墜落というらしい。

今の俺の状態はというと、千冬姉が言っている通りクレーターの中心で逆立ちするように上半身が埋まり二本の足が空に向かっていきつと突き出している、ここが温泉なら犬神家の一族の有名なシンと同じ状態だ。

「刹那さん、イヌガミケってなんですか？」

「古い日本の推理小説でな、劇中あんな格好で死ぬ登場人物がいる」

ISのおかげで身体は衝撃から守られているが、心はクラスメイ
トのくすくす笑いと二人の会話で瀕死状態だ。できれば心も守って
ほしかった。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けて
どうする」

「……すみません」

とりあえず力任せに上半身をずぼっと引き抜くと姿勢制御をして
上昇、地面から離れる。シールドバリアーのおかげで白式には汚れ
ひとつない。

そこには腕を組み、目尻を吊り上げている箒が待っていた。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

「昨日教えたって、あの擬音の事か？」

箒も冗談を言うようになったのだな。うむ、感性の発達はすばら
しい。

「貴様、また失礼な事を考えているな？」

なんでバレるんだらうね、俺の考えてることは。

ってか箒さんお願いですから背中から竹刀をスルスルと抜かない
で下さい！マジで怖いですから。

というか何処にしまったんだよそんなもん！あれか、箒の背
中はどこぞの少年ジャンプの不良と同じで四次元空間と繋がって
てバットやら鍋やら取り出せるのか！？

「大体一夏、お前は昔から」

「そこまでだ、後は終わってからにしろ。では三人ともそれぞれ武装を展開しろ」

篝の小言が始まったかと思ったら、それを遮るように千冬姉が俺たちの前に立つ。

「でははじめろ」

言われて周囲の安全を確認してから、イメージを集中させる。

。 物体を斬る、刃のイメージ。鋭く、堅固な物体。強い、武器

(来い……!)

集中力が極限にまで達したとき、手のひらから光が放出し、それが形をなして成立する。

光が収まった頃には、俺の手には雪片式型が握られていた。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

ぐあ。またこの人は……褒めるどころかけなされた。これだつて一週間訓練してできるようになったのに。

俺の隣では大して動くことなく既にビームライフルを展開し銃口を下げている刹那と、左手を肩の高さにまであげて真横に突き出した姿勢でスターライトmk?を展開しているオルコットさんの姿があった。

二人とも俺より圧倒的に速く、既にセーフティが外れていて一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「ふん、慣れている藤原は当然だが、オルコットは流石に代表候補といったところか」

「ありが…」

「ただし、オルコットはそのポーズはやめる。横に向かって展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な…」

「直せ。いいな」

「……はい」

反論の余地は大いにあるような顔をしていたオルコットさんだったが、千冬姉の一睨みで話は終わった。

「では次。一旦収納し、今度は藤原と織斑は実体シールドを。オルコットは近接武装を展開しろ」

お、こんどは雪片式型より簡単だ。

雪片式型を粒子に変換　ちなみに専門用語では展開オープンと収納クローズというらしい　そして再びイメージを集中する。

盾、遮る壁。そしてそれは手でもある。全てを打ち砕く鋼の拳の盾。

矛盾したイメージながらも、左手に剣道の籠手をつけるイメージを固める。

こちらのほうがイメージしやすいのか雪片式型より格段に早いスピードで展開されて俺の左腕にナックルシールドが装備される。固定してあるシールドを取り外し、打撃武器のナックルガードに移行させる。

「合格だ。だが副装の方が展開が速くてどうする。雪片も同じ速さで展開できるよう毎日練習しろ」

仕方ないだろ千冬姉。剣が現れるイメージと籠手を付けるイメージではどっちが簡単にできるか比べるまでもないだろ。

「で、オルコットはまだか」

「も、もうすぐです……」

刹那も俺と同じタイミングでシールドを展開していたが、千冬姉は当然だという顔で見るとオルコットさんの方を向く。

彼女の手の中の光はなかなか象を結ばず、くるくると空中をさまよっている。

「セシリアさん、落ち着いて。焦ったつてできるものではない。一度深呼吸してから目を閉じてイメージを練り直すんだ」

「は、はい………できました！」

刹那の助言通り一回深呼吸してから目を閉じて集中、次の瞬間その右手に大振りのナイフが展開された。

「……遅すぎる、何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待つてもらおうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。藤原との対戦では簡単に武装を破壊されて初心者用の手段で展開した拳句、近接戦闘で初撃から見切られて背負い投げで投げ飛ばされたはずだったか？」

「あ、あれは、その……」

「まあいい。藤原、放課後にオルコットの近接戦の訓練もしてやれ。お前がこの中で一番ISの稼働時間が多いんだ。それくらい面倒見てやれ。いいな？」

オルコットさんはごによごによとまごついていたかと思うと刹那の方とキツと睨んだ。と思ったら次の瞬間にへらつと顔が緩んだ。何があつたんだ？ 俺にはさっぱりだ。

「む、もう時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ。他は解散！」

つまり、あのクレーターを埋めておけということか。土、どこにあるんだろ？

ちらつと筈の方を見るとフンと顔を逸らされた手伝ってはくれならしい。

「さっさと終わらせて帰るぞー夏」

ああ、やっぱり持つべきものは気のきく親友だよな。

先を進む刹那のエクシアの後を追って、俺も校庭の端にある土砂の入ったコンテナへ向かった。

ISの操縦をものにするには、まだまだ先は長いようだった。

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとっ！」

「おめでと〜！」

ぱん！ ぱぱん！ と弾けるクラッカー。吐き出された紙テープがどんよりとした顔の一夏の頭に降り注ぐ。

現在は夕食後の自由時間。既に営業の終わった食堂を貸切にして一年一組のメンバーが集まっており、各自飲み物やらお菓子を手にやいのやいのと盛り上がっている。

その壁にかかっている『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた横断幕が全てを物語っていた。

「人気者だな、一夏」

女子陣に囲まれている一夏を横目に筭が不機嫌そうにお茶を飲んでいる。いい加減気付け一夏、鈍感にも程があるぞ。

俺は飲み物と適当に広げられていたお菓子を手に取ると静かに食堂から外に出た。

暖房がきいていた訳ではないが、熱気溢れる室内とは違い夜空の下は春先の心地よい夜風が髪を撫でる。

入り口脇のベンチに腰掛けてゆっくり飲み物に口を付ける。

「ここに居たのですか？」

「どうも、賑やかすぎるのは苦手です」

「ふふ、刹那さんらしいですわ」

俺と同じように飲み物を片手に出てきたセシリアさんが横に腰掛ける。

あの試合の翌日から、セシリアさんは急に軟化し俺にちよくちよく構うようになってきた。

一夏の訓練など何かに理由を付けて一緒に居ようとする。寮の部屋でもそうだ。

流石に会ったばかりの年頃の男女が急に共同生活をしろと言われたわけだから、これがもし昔から知っている筈だったのなら幾分気は楽だったのだろうが、トラブルの起きぬよう色々気を使って極力部屋は寝るためだけにして夜中だけ帰ってきているのだが、翌日起きると何故か彼女のベッドに引きずり込まれていたり俺のベッドにセシリアさんが添い寝をするように潜り込んでいたりするのだ。

もしかしなくてもあの試合の所為か？ 投げ飛ばされて危ない趣味に目覚めてしまったとか……ドMは一人で十分だ。二人なんて面倒見切れんぞ……っていやいやそれはないな、うん。

しかし、彼女の男性の好みは確か精神的な意味での『強い』男性だったはずだが、果たして一夏は兎も角俺は当てはまるのだろうか。まあ、精神年齢は高いのだろうか。

存在しないはずの異質な存在イレギュラーでしかない俺が、精神的に強いはずがない。もし強ければ今ここに存在するはずがない。この世界は元々織斑一夏を主人公とする世界なのだから。

俺は、ここに居てもよいのだろうか？ この暖かい世界に。

いや、そんなはずはない。俺は、所詮……

ヒトゴロシデシカナイ……

あの日も、俺は憎しみでしか剣をふるえなかった。誘拐された一夏を救うというのも単なる免罪符で、ただ俺は復讐したかっただけだった。そんな俺を戻したのは怯えた一夏だった。奴らの血で白い装甲が赤く染まったアストレア、結局、俺は

「刹那さん？」

「いや、大丈夫だ」

不安そうなセシリアさんに誤魔化すように笑うとベンチに座りなおそうとした。その時、

「あ、丁度いいところにいた！　ねえあんたたちちよつと……げえっ！？」

後ろから最後は失礼だが元気な声がかけて振り向いた先にいたのは小柄な体系に不釣り合いな大きいボストンバックを抱え、長い黒髪を頭の両脇で結わえた少女。一見日本人に見えるが良く見ると大陸系である事に気付く。

どこかで見たことがあった気がするが、はて誰だったか？

「何で…何であんたがここにいるのよ！？　藤原、刹那！！！」

「……ああ、何だ……」

そつだ、思い出した。

篤が転校した後に一夏のクラスに転入してきた中国人の少女。

「チヨビか」

「ちよ、ちよびって言うなあ!!!」

チヨビ、もとい凰鈴音が夜闇に吼えた。
今何時だと思っている？近所迷惑だぞ。

「ふっふっふっふっふっ………」

そこは奇妙な部屋であった。

薄暗い部屋中に機械の備品が転がっており、その中をバスケットボールサイズの球体が転がって行つては床からボルトをマジックハンドで取つては開いた口の中に放り込む。不要な部品を選別し、その構成素材を分解吸収、そして別のモノへ再構成していく。

ここはC・B・社にある篠ノ之束のラボである。

現在彼女は何時ものお気に入りであるアリスと白兔が同居した『一人不思議の国のアリス』ではなく、刹那がしつらえた白いスラックスに同じく白のインナーそしてその上に薄赤色のジャケットといったC・B・社の制服を着て作業台の電灯のみを灯して何かしていた。

パチンパチン、と何かを切る音が聞こえたかと思つたら今度はシユツシユツと何かを擦り合わせて削る音、そしてまた今度はカチカチと何かをはめ込む音が聞こえてくる。

「できたーっ」

しばらく作業に没頭していた作業台の上には全長25センチほどの小さなエクシアがスタンドの上に鎮座していた。

つい先日発売されたC・B社の新商品、ソレスタタビーイングインフィニティモータースクションFの第一弾、8分の1スケールモデルの藤原刹那&エクシア。

俗に言うISのプラスチック製模型、通称インプラである。

メーカー販売希望価格2980円、全国の模型専門店では絶賛好評発売中である。もっとも人気がありすぎて現在売り切れ御免中で増産が待ち望まれている。

因みに第二段の織斑一夏&白式は来月発売予定。こちらにも既に予約で一杯だ。

イッターイムナーウ スィーミナウ アア アア アア
ヤットーデアーエタンダーネー

アカペラの着信音が流れる。

偶然録音できた愛する男が口ずさんでいた歌を着メロにするなど、世界広しといえど彼女ぐらいだろう。

「う、う、この着信音はあ！！ クオリヤア！！！」

ピヨーン、と椅子から飛び上がると地面に落ちる。そのままゴロゴロと高速で転がり、途中にいたバスケットボールこと八口を跳ね飛ばして携帯電話へ向かって転がって行く。

八口が電子音で乱暴な扱いを訴えるが、彼女には気にしない。

「はい、せっちゃんのアイドル東さんですよー！……うんうん、わかった。せっちゃんきつての頼みだからもう東さん頑張っちゃうよー。ふむふむ。じゃあ明日にでもいつくんの分も送っておくから……うん、じゃあおやすみせっちゃん、愛してるぜー」

転校生はチヨビ？（前書き）

今回はグラハムネタがある意味トランザム！！ この程度の
に身体が耐えられんとは…！ 君の瞳を釘付けにする

一見刹那が変態というか、犯罪者に見えてしまう…

そろそろ黄色い救急車が必要かなーと思ってしまう自分はびよーき
でしようか？

転校生はチヨビ？

「せ、刹那さん……なにを……？」

「君を後ろから抱きしめている」

放課後の教室。赤い夕日が差し込む中、セシリアは背後から肩越しとお腹越しに手を回され刹那に覆い被さられるように身体を重ねていた。大して力を入れてるように見えないのに、その腕のなかから抜け出す事ができない。体温を感じられるほどの密着状態だった。

「ま、待つてください！ そんな、こんな所で、いきなり……」

「何を今更。君だってこういう事を望んでいる筈だ」

耳元で呟かれ、顔が赤く染まったのは夕日だけの所為ではない。そう、セシリア・オルコットは始めて恋した彼とこのような関係になる事を夢見た事もあった。

でもそれはもっとムードがあるもので、夜のホテルや自室のベッドの上といった場所を想定していたが、放課後とは言え何時誰が来てしまうのかわからない教室でこうなるうとは夢にも思わなかった。今誰かに見られてしまったら。そう考えただけで胸の鼓動が早鐘のように痛いほどに激しく高鳴らせる。

「せ、せめて、シャワーを、浴びさせてください……」

今日の訓練で汗をかいてしまいましたので、と俯きながら小声で震えながら付け加えるが刹那はそのうなじに顔を近付ける。

「……ああ、いいかほりがする」

「い、いやぁ！！ やめて刹那さん！ やめてええっ！！」

羞恥のスピードメーターが振り切って臨界点を突破する。すでに三回転半ぐらいしているのではないだろうか。明らかに暴走だ。

肌が完熟したトマトのように真っ赤になったセシリアは腕の中から抜け出そうとしたばたともがくが、抜け出す事は適わずその締め付けは更に強くなった気がする。

「セシリア・オルコット、私は君を求める！ 果てしないほどにいい！」

「きゃあっ!?!」

オレンジ色の光景のなかで二人はもつれ合うように倒れ、セシリアは刹那と向かい合う形で押し倒されてしまう。

とつさにISを展開しようとするが、何時までたっても馴染んだ相棒たる青の装甲は展開されない。

「ふふふ、これで君を守るものはなくなっただな」

刹那の手には何時の間に取りつたのかセシリアの左耳に付いていたはずのイヤークラス、彼女の専用ISブルー・ティアーズの待機状態が握られていた。

「さあ、曝け出すといい。君という存在を、その全てを！」

「……………優しく……………シて、ください……………」

「ラジャー」

せつかく彼の方から求めてきてくれたのだ、と覚悟を決め目を瞑りながら精一杯の思いを振り絞る。

彼は制服の上から同年代の白人女性と比較しては少々慎まじやかではあるもののそれでも十分なポリウムはあるバストと美しい曲線を描くヒップへ手を伸ばし、そこから発した快樂信号がセシリアを身悶えさせる。

（あ、ああっ、んっ……刹那、さぁん……まるで、夢のようですわ……）

「そりゃあ夢ですから」

とろけかかった思考に返答する声に一瞬で意識が覚醒する。

自分の上から聞こえた声は、刹那のものではない。もっとハスキーで女性的な、よく聞きなれた声。

「チエ、チエルシー!？」

ずれていた焦点が戻って目に入ったのは自分の上に四つんばいで覆い被さっていたのは刹那ではなく今はイギリスにいるはずの専属メイドにして幼馴染の姉代わりの女性であった。

「こ、こ、これは、一体……?」

「ではお嬢様、そろそろご起床の時間です」

チエルシーがにっこりと微笑むとパン、と風船が割れるような音

が響いて視界が真っ白に染まった。

「です……………ひどい……………ひどいオチですわ！」

がばつと跳ね起きるセシリア。

場所はIS学園一年生寮の自室。天幕つきの自分のベッドの上。壁にあるセシリアが持ち込んだ家具の一つであるアンティークな掛け時計は6時を指そうとしている。

「お、思えば最初から何かおかしかったんです！ 自主練習の後に何故か教室にいたり！ 刹那さんが自分の事を私と言っていたり！」

外から聞こえてくる雀の鳴き声がチュンチュンではなくアホーアホーと聞こえてくるのはきつと幻聴だろう。

「せ、せめてあと十分…いえ、あと一分でも見ていられたら……………」

お気に入りのビデオやDVDを見るかのように夢の内容を脳内再生する。そしてその後起こるであろう展開までも妄想し、セシリアは赤くなった。

意識がはつきりしていくにつれて途端に恥ずかしくなってくる。

「が、学校の教室で、だなんて……………破廉恥すぎますわ」

違つとはわかっているのに、隣にいるであろう刹那を求めて視線をさ迷わせるがそこには誰もいない。

今日に限らず刹那は彼女が起きるよりも前に起きて何処かへ抜け出しているのだ。

セシリアはベッドから抜け出すとぐっしょりと濡れた寝間着と下着を脱ぐ。ドコがナニで濡れているのかと突っ込みを入れないでほしい。でないと彼女は乙女として大切なナニかを失ってしまう気がする。

火照った身体を冷まそうとシャワーを浴びるがドキドキと高鳴る鼓動は一向に収まらない。それどころか欲望が体の端からにじみ出てしまう。何度ぬぐっても次々にしみ出てしまう。

彼女のシャワールームよりしばらくの間、艶やかなオナナの声が響くのだった。

一夏の代表就任パーティーの翌日。

寮の裏側、時おり簡単な集会場としても利用されている場所で木刀を振る。

それを受け止めるのは剣道着姿の箒。もっとも俺は私服。手にしているのも箒は木刀一本だが俺は大小長さの違う木刀を二刀流のように構えている。ある意味ぶつとんだ他流試合のような光景だ。

この二本の木刀は元々学園で使用禁止を言い渡されたGNロングブレイドとGNショートブレイドと同じサイズに削って作られたものであり、ブレイドを使用できなくとも身体がわすれないよう早朝素振りをしていたのだ。それが数日前に偶然素振り場所を探してさ迷っていた箒に見つかり、以降毎朝と言うわけではないがこうやって打ち合いをしていたのだ。

斬りかかってきた箒を左手の短い木刀でいなすと右手の通常サイズの木刀を眼前で寸止めする形で止める。それと同時にピーツと電子音のアラームが6時半になった事を告げる。

「また、勝てなかった…」

木刀を持つ力を抜いてがっかりする篤。

一刀と二刀での変則戦で同列に考えるのはどうかと思うけど。

「じゃあそろそろ上がるう。何時も通り先に席をとって食べてるからシャワーでも浴びてから一夏とゆっくり来るといい」

「ああ、ありがとう刹那」

「……そう言えば篤、一夏は朝練に誘わないのか」

「…あいつは何度起こそうとしても起きないんだ」

篤の後ろ姿が少し煤けて見えたのは見間違いではないだろう。さつさと気付いてやれよ、一夏。

シャワーを浴びるため部活棟へ向かう篤の後ろ姿を見送った後、俺も持ってきていたナップザックを手にとり職員寮の男性用大浴場に向かった。

シャワーで軽く汗を流すと汗で湿った服をナップザックから換えの服と交換する。荷物は更衣室のロッカーに入れ、鍵をかけると食堂へ向かう。

「せ、刹那さん……」

その途中、セシリアさんと鉢合わせしたのだが赤い顔をして俯いてしまう。はて、何かあったのだろうか？　と思っただらすると腕を絡めてきた。

「え、エスコート、していただけますか？」

赤い顔で瞳を潤ませて見上げる形で聞いてくる。だからマジで何があった!?

特に断る理由がなかったたのでそのまま食堂へ向かうのだが、それまで行く先々で周囲の視線が気になった。その視線を受けてセシリアさんは心地よさそうにしている。

食堂に着いた俺たちはそれぞれ和風朝定食（御飯、味噌汁、御新香、小鉢、焼き魚）と洋風モーニングセット（トースト、バターとジャム、スープ、サラダ、オムレツ）を注文して四人分の席を取って先に食事を始めた。

席は俺の隣にセシリアさんが、そして俺たちの前にはお盆でそれぞれ一夏と篝の分の席をキープしてある。

「おはよーせつなん、セツシー。隣いいかなー？」

食べ終わってお茶を飲んでいたら頃、間延びした声で変なあだ名で呼んできた黄色い電気ネズミ…もとい着ぐるみパジャマ姿の同じクラスの布仏さんと、髪を三つ編みにして眼鏡をかけた女性がいた。リボンの色からすると三年生か。

布仏さんはいつも通り何だか眠たそうで、三年生はしっかりしておりいかにも秘書然とした女性だ。お盆よりもファイルを持っていたほうが似合う気がする。

「まあ、別に構わないが。それと朝の挨拶、すなわち『おはよう』という言葉を慎んで送らせてもらおう」

セシリアさんがむっとした顔をするが布仏さんは俺の隣にえへへと笑いながら座り、三年生はその正面に席を取った。

「始めまして藤原さん、オルコットさん。私は布仏虚。本音の姉で

す、妹がいつもお世話になってます。お二人の事は妹から色々とうかがっております」

「ご丁寧に自己紹介された。

「いえ、というかまだ友達にもなってませんが」

「ひ、ひどいよせつなん！」

まだ教室で少し話した程度のクラスメイトでしかないのだが。

俺の言葉にセシリアさんは安心した顔になり、対して布仏さん

二人居てややこしいので以下それぞれ布仏・妹と布仏・姉と呼称

もとい布仏・妹はガンといった表情の後、「あーんあーん」

と泣き出してしまおうが

「嘘泣きはやめろ（嘘泣きはやめなさい）、布仏・妹（本音）」

俺と布仏・姉の突っ込みがみごとに八モった。

「てへへ、ばれたかー。でもお姉ちゃんとせつなん今日会ったばかりだよー、何でそんなに息びったりなのかなー？」

「そんなことないぞ（そんなことないわよ）」

「ほんと、仲よろしいですね」

また八モった俺達を見ながらセシリアさんはジト目でびくびく、つと引きつきながら呟く。その背後で量子的な揺らぎが見える。

「そんなに仲がいいならせつなんはお姉ちゃんどー、結婚しちゃえ

「ばいーんじゃないかなー？」

「…そうですね、では藤原さん。不束者ですが未永くお願いいたします」

「いえいえ、こちらこそ」

「え？ ええ？ マジで？ マジなのせつなん！？ マジなお姉ちゃん！？」

ボケにボケで返して頭を下げた俺の後頭部にガツン、と何かが突き付けられた。

フィン状の浮遊物体。それは最近放課後によく見かけるもの、即ち、ブルー・ティアーズのビット。間違っても冗談の突っ込みで使っていないものではない。

「刹那さん…貴方は私の夢に出てきてあんな事をまですたのに、会ったばかりの女性とこんな…こんな……」

何をやってるんだセシリアさんの夢の中の俺の知らない俺！？

「冗談だ（冗談よ）」

「ホント二人とも仲いいねー」

布仏・妹はいつも通りのほほんとした顔で見物しながらサンドイツチをもぎゅもぎゅとマイペースで食べていた。

この後、一夏と筭が来るまでこんなやり取りが続けられた。

「織斑くん、おはよー」

食堂で刹那とオルコットさん、それに何故か一緒に居たのほほんさん（本名不明）と眼鏡をかけた三年生。後でのほほんさんに聞いた所、彼女のお姉さんらしい。名前までは聞いてないので今後は眼鏡さんと呼ぶ事としよう。と食事をとった後、もっとも先に来ていた4人はその頃には食べ終わっており、オルコットさんのビツトが火を噴くと同時に刹那の目が金色に光った？と思ったら眼鏡さんを抱きかかえて逃走。早朝校内鬼ごっこが開始された。

のほほんさんがのんびりとホットミルクを飲みながら「せつなんがんばれー」と手を振っていたのが印象的だった。のほほんさんはクラスメイトを変なあだ名で呼ぶ癖がある。俺のことなんて「おりむー」とか呼んでるしな。そっいえばあだ名といえば昔、刹那が一度だけ一人に変なあだ名を付けた事があつたな。そいつは一年前に故郷に帰ってしまったが元気だろうか。

「ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

今日はその話題で持ちきりだった。なんでも隣の二組に転入してきたそうさ。

でもなんで今の時期に？まだ四月だ。なんで入学ではなく転入なんだろう。しかも転入は入学よりも条件が厳しかったはずだ。試験だけではなく、国からの推薦も必要となってくる。つまり…

「家庭の事情か、国の事情かは知らないが代表候補、というわけだろうな」

隣に座っていた刹那の意見ももつともだ。家庭か国の事情……つまり家庭内で何か起こって試験を受けられなかったのか、専用ISが間に合わなかったといったところだろうか？

刹那はショートホームルームまでISを使わず眼鏡さんを両手で抱きかかえて、オルコットさんのビットと校内鬼ごっこで逃げ切った割りに普通にしている。こいつ本当に人間？ 実はどこその秘密結社が作り上げたアンドロイドとか強化人間だと言われたほうが納得できそう。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

ISを無断使用して校内鬼ごっこで鬼役をしたため、大量の反省文を書く事となった一組のイギリス代表候補、セシリア・オルコット。無意味に腰に手を当てたポーズが似合っている。

「別にこのクラスに転入してくるわけではないのだろうか？ 騒ぐほどの事ではあるまい」

さつきまで自分の席にいた筈が気付いたら隣に居た。

「どんな奴なんだろうな」

代表候補っていうからには強いのだろう。入学したばかりの頃のオルコットさんみたいなやつだったらやだな。正直疲れる。

まあ、隣のクラスの事だから関係ないか。

「む……気になるのか？」

「ん？ ああ、少しは」

素直に答えたら筈の機嫌が悪くなった。むすつとした顔をしている。

最近やたらと機嫌が良かったり悪かったりところどころ変わるのだ。情緒不安定なのか？

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そうですね織斑さん、せっかくわたくしと刹那さんがコーチして差し上げているのですから軽く優勝くらいしていただかなくては。今日から対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう。丁度射撃タイプと近接タイプの専用機持ちがいるのですから」

確かに実戦経験は必要だと思っけど、こっちはようやく基本動作をマスターできたところだぞ。

最初にISを動かした時の一体感。あれ以降まったく感じることはないけど、気のせいだったのだろうか。

「織斑くんにはぜひ勝ってもらわないと！」「優勝賞品は学食デザートの半年フリーパス券だからね！」「織斑くんが勝つとクラス皆が幸せだよー！」

俺の周囲に女子が次々にやいのやいのと集まってきた。

クラス対抗戦でやる気を出させるため一位のクラスには賞品として学食デザートと半年フリーパスがクラス全員に配られる。それもこの学園専属のパティシエはなんでも数年間ヨーロッパ各国を放浪して修行してきたとかでその本格的なデザートは大人気だ。俺も何度か刹那が訓練が長引いた時に差し入れに買ってきた弁当のおまけにもらってきたのを食べたこともあるが、俺はそんなに甘いものが好きという訳ではないが確かに旨かった。千冬姉が独り占めしよう

とするのも肯ける。

「まあうちには専用機持ち二人がサポートしてくれるから楽勝だよ
ね」

「一組以外に専用機持ちが代表なのは四組だけだから余裕だよ」

熱意のこもった視線にさらされ、おれも「おう」としか言えなかつた。

確か今年の一年生で代表候補は4人、うち専用機持ちはオルコツトさんのみ。そして他3人の専用機持ちは俺と刹那、そして四組の子と3人とも企業所属だそう。でも四組の代表って何処の企業に所属してるんだろう？

「その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえた。なんか、すげえ聞き覚えのある声だが……

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれているのは……

「チヨビ？ やはり転校生はお前だったのか」

「あらチヨビさん。一日ぶりですわね、ごきげんよう」

「だからちよびって言うな！！ だいたいなんで藤原と金髪ドリル女がこのクラスにいるの!？」

それは刹那が一人だけ変なあだ名を付けたサード幼馴染、凰鈴音だった。

オルコットさんがスカートの端をつまんで優雅に挨拶しているが、昨日会ったのかな？

刹那も鈴が転入してきたことを知ってるみたいだ。だったら教えてくれればよかったのに。

IS学園のコンピュータールーム。

機械を冷やすためにひんやりと冷房がかかり、大量にモニターが並んでいる部屋で真耶は一台のパソコンを操作していた。

そのモニターに映し出されているのは以前あった刹那とセシリアの試合内容。そしてエクシアとブルー・ティアーズの数値化されたデータが次々と映し出されていく。

「これは、やっぱり……」

その二機のパラメーターは圧倒した試合内容が嘘だと思えるほど大きな差はない。エクシアの方が推力やパワーが少し上回っている程度だ。

彼女も知らないことだが、エクシアには訓練リミットにより一部の武装とGNドライヴの出力を制限されていた。その制限されたGN粒子はビーム攻撃だけでなく機体稼動にも使われているのだからエクシアの真の性能を知った時、彼女は自分の常識を疑うこととなる。

組み立て途中だった機体を完成させた束ですらエクシアのスペック

クを第4、もしくは第5世代機相当と推定しているが、粒子出力を制限されていることで機体出力もビーム出力も劣ってしまい現行の第三世代にまでスペックダウンしたエクシアがブルー・ティアーズを圧倒した理由はただ一つ。操縦者の技術の差だ。

「……男の子の背中って、あんなに大きかったんですね……」

以前、偶然風呂場で遭遇してしまった時に見た刹那の姿を思い出す。

決して低くはないものの一夏と比べると小柄な身長。でもその体付きはできあがったもので、女子高育ちであり異性の裸体など幼稚園に通うかどうかの頃と一緒に風呂に入った父親のものしか見た事がなかった真耶には色々な意味で衝撃的だった。

「……それに、とても大きかった」

あのときの事を鮮明に思い出して真っ赤になってしまう。ナニが大きかったのかはご想像にお任せする。

兎も角、刹那という存在は真耶の中の興味と何らかの本能を呼び起こしてしまった。

キーンコーンカーンコーン……

「い、今のは予鈴！？ い、い、い、急がないとお！！？」

物思いに耽っていたところで聞こえた予鈴の音に引き戻され、急いでファイルを全て閉じたあと『パソコンの電源を切る』を選択して猛ダッシュで担当する一年一組の教室へ向かう。教師である自分が遅刻などすれば憧れの千冬になにをされるかわからない。少なくとも出席簿チェックでは済まないだろう。

真耶が飛び出した後もまだログオフ中で電源が入っていたパソコンに一瞬ノイズが走るとモニターは真っ黒に消えた。

転校生はチヨビ？（後書き）

結局夢オチだったドラマCDネタ。

あのドラマCDのハムさんはまさしく最狂の変態紳士。異論は認めない。

今回のほほんさんからませようとしたらその役は虚さんに食べられた。なんでー？

そして束さんのシリアスブレイクは本日お休み。

幼馴染と昼食タイムと特訓（前書き）

何とかようやくできました。

一日一話投稿しているひともいてみなさんすごいなー、と思います。
やっぱり社会人は時間が少ないです。

幼馴染と昼食タイムと特訓

(さっきの女子は何なのだ……一夏とずいぶん親しそうに見えたが……)

ショートホームルーム前に現れた二組の転入生……刹那とセシリアが『チヨビ』と呼ぶ少女の事が気になり、箒は不機嫌だった。なかなか授業に集中できない。

『チヨビ』とは本人の態度からおそらくあだ名か何かだろう。もしそれが本名だったら彼女の両親の神経と感性を疑う。

もっとも、自己紹介する前に千冬の出席簿チヨップと、本鈴と同時にヘッドスライディングで教室に飛び込んできた真耶のおかげでうやむやになってしまった。

(それに、一夏はまるで……)

まるで、幼馴染と再会したような反応だった。その事実が彼女を更に不機嫌にさせた。

(一夏の幼馴染は、この私だろう……！)

こみ上げてくる怒りをどうにか抑える。

この感情はまさしくあの時と同じだ。

彼女が小学校に通い始めた頃、まだISの構想が発表されて間もない頃、世間では『へー、そんなのあるんだー。でも女性しか使えないなんて意味なくね?』といった意見がまだ主流だった頃、まだ実家の篠ノ之神社で剣道場を両親が開いていた頃……といっても門下生は箒と千冬と一夏だけで他にはたまに参加する刹那しかいなかった。

た。

とある日、学校と藤原家に通う以外は何時も自室でパソコンやら訳のわからない機械を弄っていた東がふらっと剣道場に参加するようになった。気まぐれなのかもしれないが、半分引きこもり同然だった東が出てきた事に両親は大いに喜んだ。

箒も同じく姉の参加を純粹に喜んだ。当初は。

今まで竹刀を握ったこともない東はたった三日で箒が手も足も出ないまでに上達した。それだけならば年齢や体格差といった物もあるのだろうがそれだけに飽き足らず一週間で本気の千冬と同等に切り結ぶようになり、更に一カ月もしない内に父親すら適わなくなり免許皆伝するまでになった。

それはまるで一生懸命マラソンしていたら、いきなり途中地点から走り出した選手に追い抜かれてしまったような理不尽な気分だ。

ちらつと一夏の方を自然を装って窺う。真面目にノートを取っていた。

(私は授業に集中できないというのに、お前という奴はっ……！)

ますます腹が立った。少しくらい、私を気にしたらどうだという気になってくる。

(いかん……！ K O O Lだ、K O O Lになれ……っ！)

微妙に単語を間違えながら怒りが頂点に達そうとしていた頭をなんとか冷静に保つ。

冷静に考えればたいした事はない。

箒は一夏と同じ部屋だ。二人きりの時間など作るうと思えばいつでもいくらでも作れるだろう。そのアドバンテージだけは揺るがない。それを上手く利用して立ち回れるかは別として……

『今の君はまさに眠り姫だ。何時か白馬の王子様が迎えに来てくれるのをただじっと待つだけのな。だが現実はその上手くはいかない。眠っている内に積極的なお姫様が横から王子様を搔っ攫ってしまうかもしれないぞ?』

(ああ、刹那。確かにお前が言っていた通り私は今まで一夏が気付いてくれるまで何も行動を起こさそうとしない、まさしく眠り姫だった。だがここに宣誓しよう。私、篠ノ之箒はあの女、チョコビ名前は知らないから刹那に習って暫定的に呼ばせてもらう。を倒し必ずや織斑一夏を射止めてみせると……!)

そうと決まれば今日の放課後はまた一緒に特訓だ。机の中から数枚の書類を取り出して考える。今から書けば放課後までには間に合うはずだ。私を応援してくれている刹那もきつと気を使ってくれるはずだ。

うんうん、と一人肯く箒。その表情はどこか楽しげであった。

「では……そうだな、篠ノ之、答えは?」

「は、はいっ!?!」

突然呼ばれて、箒は素っ頓狂な声を上げる。

今は授業中。それも千冬の授業だ。

ちなみに真耶は遅刻ギリギリだった罰として頭にでっかいたんこぶを作り、両手に水が並々に入ったバケツを二つ持って教室の一番後ろに立ってる。

「答えは?」

「……き、聞いてませんでした……」

ぱしーん！ と小気味のいい打撃音が教室に響いた。

教室の後ろの方の席で、セシリアがノートにペンを走らせていた。しかし、書かれているのはおよそ意味の無いある意味芸術的な線で、言葉にすらなっていない。

（なんなのですか、あの方は！）

朝食の時に刹那と息がピッタリだった先輩が気になってしょうがない。

ただでさえ、学園に数少ない男子ということで同学年だけでも競争相手は多いのだ。これ以上増えるのではないかと気が気ではない。条件としては同室である自分が他より一歩リードしているのだが、なんせ男子を取り合うことなど初めての事で、思うように状況が進まない。その事実にじれているのだ。

（大体、刹那さんにお姫様抱っこされるのはわたくしの役目なのに！）

以前の試合でお姫様抱っこされた（本人は気絶して覚えていないが、翌日の校内新聞にでかかど写真が掲示されていた）セシリアとしては自分だけにして欲しかったのだが、彼は簡単に会ったばかりの虚をお姫様抱っこで抱き上げたのが気に入らなかった。

学年が違つと言つことで接点か妹の本音というだけだが、彼を奪

われるわけにはいかない。これが自分にとって最初で最後の恋になるかもしれない。何せ15年生きてきた中で初めて出会った理想の男性だ。もう出会えないかもしれない。

「ではオルコット。次の文を読んでみる」

「またベッドに……いえ、もっと効果的にデートに誘うとか……」

「……………」

つつかつか ぱしーん！ ふんわりとしたブロンドの髪が出席簿によって浮かんだ。

「待ってたわよ、一夏！ って何で藤原達までいるのよ!？」

昼休み、何時も通りのメンバーで学食へ来て券売機で食券を買った俺たちの前にラーメンを持った凰鈴音が立ちふさがった。ちなみに俺は刹那みたいにチヨビではなく普通に略して鈴と呼んでいる。しかし変わってないな、こいつ。髪型も昔から一貫してツインテールだし。

「とりあえず退いてくれ。通行の邪魔だ」

「うっさいわね、わかってるわよ」

刹那に言われて鈴もすくすく道を開けるが席に付く様子もない。

「ラーメンのびるぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体、あんたを待ってたんでしょ！
なんで早く来ないのよ！」

なんで早く来ないといけないんだよ。

まあこいつが五月蠅いのは何時もの事だし、とりあえず俺も食券をカウンター越におばちゃんに渡す。

「刹那、お前がチョビと呼んでいるこの女は一体なんなんだ」

「そういえばわたくしも本名は何っておりませんでしたわ」

「そうだな…… 箒が転校していった後に転入してきた中国出身者で本名チョビ、通称凰鈴音、一夏は鈴と呼んでいる。実家が食堂を切り盛りしていて、俺が一夏やチー姉の行きつけの店だった」

その隣で箒とオルコットさんが刹那に鈴の事を聞いていた。

大体合ってるけど、わかって言っているんだろうけど本名と通称が逆だ逆。聞いてた鈴もプルプル震えてるぞ。

そうこうしている内に注文した料理がお盆に載って出されてくる。俺と刹那は日替わりランチ、箒はきつねうどん、オルコットさんは洋食ランチだ。箒、もっと色々試そうぜ。俺たちも人のこと言えないけど。

そういや刹那なんて、『あんまり考えるのは面倒だし、バランスがよくて外れのない日替わりでいいや』とか言ってたな。

それぞれ食事ののったお盆を受け取ると空いているテーブルを見つげ席を取った。席順は俺の隣に箒、その向かいに刹那とオルコットさんという普段の組み合わせだが、今日は俺をはさんで箒の反対

側に鈴が座った。

「それにしても久しぶりだな。丁度一年ぶりになるのか。いつ帰ってきたんだ？ おじさんとおばさん元気か？ いつ代表候補になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。あんたこそなにIS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

丸一年ぶりの再会ということもあって、俺は普段では考えられないくらい質問を投げかけていた。付き合いの長い幼馴染は、やっぱり空白期間が気になるものだ。箒も刹那もそうだったし。

「一夏、そろそろどうい関係か説明してほしいのだが」

疎外感を感じてか、箒が少し棘のあるというか怪訝そうな声で聞いてきた。周囲の席で食事をしている生徒たちも興味深々とばかりに聞き耳を立てている。

「ただの幼馴染だよ。刹那が言ってた通り、箒が引っ越していったのが小三の終わりだったろ？ 鈴が転校してきたのが小五の頭で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ぶりだな」

「そっぴや箒と鈴って面識ないんだよな。丁度入れ違いで引っ越してきたし。」

「で、こっちが箒。ほら、前に話しただろ？ 刹那と同じで小学校に入る前からの幼馴染で、俺の通っていた剣道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

鈴はじろじろと箒を見る。箒は箒で負けじと鈴を見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言っただけ挨拶を交わす二人の間に何だか火花が散ったように見えた。そのうえ二人の背後に鎧武者と龍がにらみ合っている姿を幻視してしまった。

俺、疲れてるのだろうか？ 今日はずっと休んだ方がいいのかも
しれない。

「で、藤原の隣にいる金髪ドリル女はなによ？」

金髪ドリルって…確かにオルコットさんの髪型はロールしてるけどさあ。

「同じクラスのイギリス代表候補のセシリア・オルコットさん」

「よろしくお願いたしますわ、中国代表候補鳳鈴音さん？」

「ああ、あたし他の国とか興味ないから」

ペコリと頭を下げてオルコットさんが挨拶するが鈴の返答に固まって言葉に詰まりながら怒りで顔を赤くする。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦つたらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん。それとあんなさ、藤原と付き合ってるの？ はつきり言って男の趣味悪いわよ」

ふふん、といった調子の鈴。

相変わらずだな、こいつ。妙に確信じみてるし、しかも嫌味でない言い方をする。素なのだ。素でそう思っている。

けど、刹那の事は違ふと思うぞ。そういえば刹那と鈴もそんなに面識なかったな。いつも幼馴染三人は奇妙な偶然で一緒のクラスだったけど、簿が転校してからは別々のクラスになってしまったし、中学にあがる直前に刹那はどこかへ行ってしまった。

鈴が刹那に何というか刺々しい態度をとっているのは変なあだ名だけじゃなく、そのへんも関係しているんじゃないかな。

「べ、べべ、別に付き合っている訳では……」

「違う。何故いきなりそんな話になる」

オルコットさんが別の意味で赤くなりながらしどろもになって言い訳をするが、刹那の関係をきっぱり否定するコメントに対してわなわなと拳を握り締めて睨んだ。

鈴は何食わぬ顔でラーメンをすすする。何食わぬ顔でメシを食う……なんつって。

「一夏」

どきつ。考えていることがバレたのか？

しかしまらない事を考えただけで怒られるようなことは何一つ無いぞ……たぶん。

「あんだ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

鈴は丼を持ってスープを一口飲むと視線だけコツチに向けてくる。言葉にしても、鈴にしては珍しい歯切れの悪いものだった。

「そりゃ助か」

ダンツ！ とテーブルが叩かれ遮られた。

「一夏に教えるのは私達の役目だ。頼まれたのは、私だ」

箒がテーブルを叩いた勢いで立ち上がりまくし立てる。よほどクラス対抗戦に燃えてるんだな。俺も少し見習おう。

「あたしは一夏に言ってるの。関係ない人は引っ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ！ 私が一夏にどうしても頼まれているのだ！」

「それにあなたは二組でしょう？ 一組の事は一組で教えるのが当然ですわ。敵の施しは受けませんわ」

箒に続きオルコットさんも反論する。思わぬ援護射撃に箒は最初こそ驚いたような顔をしていたがそれはしだいに信頼の視線に変わった。そしてどちらからともなく手を握って握手する。この二人、何時の間に仲良くなったのだろう。

「ふ、ふーん……じゃ、じゃあさ、今日の放課後時間ある？ このカフェでもいいから、積もる話もあるでしょ？」

「あいにくだが、一夏は私たちとISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

待て筈。なんでお前が俺の放課後の過ごし方を決めるんだ。俺には放課後の自由すら選べないのか。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね一夏」

残っていたラーメンのスープを一気に飲み干して俺の答えも待たず鈴は井を返却口のカウンターの上に置くとそのまま食堂から出て行ってしまふ。

断ることもできなかったから、絶対待ってるしかないじゃねえか

……

「一夏、当然特訓が最優先だからな」

こっちも断れる状況ではなかった。肩に置かれた手に力が入りすぎて痛いです、篝さん。

そして放課後に借りられた第三アリーナ。今日も刹那とオルコツトさんにIS操縦を教わる予定だった俺は、予想外の光景に、おそらく間抜けな顔をしていただろう。

「な、なんだその顔は……おかしいか？」

「いや、その、箒…その格好は……」

アリーナに居たのは箒だった。しかもIS『打鉄』を装備、展開している。

打鉄は純国産ISとして定評のある第二世代の量産型。安定した性能を誇るガード型で初心者にも扱いやすい。そのためIS学園以外でも多くの企業や国家において訓練機として一般的に使われている。……と教科書ではこんな感じだったかな。

日本製という事もあってか打鉄のデザインは戦国時代の鎧武者を連想させ、基本武装も日本刀型近接ブレードを装備している。それがまた箒に……

「似合ってる、すごく似合ってるよ箒」

「そ、そうかそうか！」

素直に感想を言ったら怒られるかと思っただらちよつと上機嫌になつて微笑みながらこくこくと肯いた。何時もこつなら可愛いんだけどなあ。

アリーナを見回してみると他にはオルコットさんだけで刹那がいなかった。

「あれ？ 刹那は？」

「刹那なら千冬さんに呼び出されて職員室に行っている。だから今日は私が近接格闘訓練をするぞ。では一夏、刀を抜け」

「お、おうっ」

やる気満々だな。お互い武装を展開、鈍い鉄色が実体剣特有の鋭利さを感じさせる。

「では 参るっ！」

箒が振るう近接ブレードを雪片式型で受け止めた。

「無駄な動きが多すぎる。だから疲れるのだ。もつと自然体で制御できるよつになれ」

特訓が終わってピットに戻るなりせいせいと息切れしている俺に對して、箒は多少疲れているようだが俺のように疲労困憊ということはない。逆のピットに戻っていったオルコットさんなどけろりとしている。これが経験の差というものか。

展開解除するとISの補助がなくなったので、疲れが一気にのしかかってくる。

同じく展開状態を解除した箒が、汗に濡れた髪を結び直す。その姿は汗でうっすらと独特の艶っぽさを持っていてすこしドキリとした。

でも何故か毎回箒は俺と同じピットから上がるうとするのだが何だろう？ 気付けば自然とピットに二人きりといった状態になってしまう。

箒は自分の鞆の中からペットボトルのスポーツドリンクを取り出すとゴクゴクと飲みだす。いいなあ、俺も何か持つてくるべきだったかな？ そんな感じで見ていると、箒は半分ほど飲み終わった所で俺の視線に気付いたのか飲むのを止めてこっちを見た。

「い、一夏。飲みかけで、よ、よければ……飲む、か……っ？」

「お、サンキュー。あー、生き返る」

幼馴染の優しさに涙が出そうになりながら差し出されたボトルを受け取って口にする。

平時に飲むには少し糖分が高すぎるそれも、スポーツ後の体には非常に助かる。糖は大事なエネルギー源だ。

ちなみに冷えてないドリンクだが、それが正解だ。運動後の熱を持った体に冷たい液体を流し込むなんて自殺行為に等しい。こっぴうぬるめの飲み物が最適だ。冷たいドリンクは気分爽快だが、その一時の気分の為に体にダメージを与えるのはどうかと思う。

その光景を見ていた篤が真っ赤になって（間、接キス…！ 一夏とっ！ 間接…キス……っ！）と心の中で舞い上がるように喜んでいたり、

（あ、あの女あゝ、一夏と、か、かか、か、間接キスだとお！！？）と鈴音がピットの外から覗き込んでいたことは十分余談である。

「これがアイツから送られて来た荷物だ」

IS学園の搬入倉庫に俺とチー姉は来ていた。以前タバ姉に頼んでおいたエクシアの追加武装や他一式が搬入されたのだ。

コンテナを開けるとビームマシンガンやビームランチャーやビームピストルやビームスナイパーライフルといったエクシア専用武装の他に実弾マシンガンやミサイルランチャーといった堅実な実用性

の高い汎用武装、他にもコードにつながれた棘付き鉄球やりボルバ
ー式バズーカのような趣味に走ったものなど様々な武装の姿が見え
る。

コンテナの中からさらに、バレーボールより一回りほど小さいサ
イズのボールが二つ飛び出してくる。

「ハロハロ!」「アニキーアニキー!」

「……何だ、その玩具は?」

青と白のボール……即ちハロを見たチー姉が怪訝な視線を向ける。
確かに見た目こそ玩具だが、そこは白兎印の特注品。こいつらは
各種サポートもしてくれる上、エクシアと白式の簡易メンテナンス
も可能な一品だ。

「ヨロシクナ! ヨロシクナ!」「アネゴー! アネゴー!」

俺たちの周りを嬉しそうに(もっともハロのAIに感情はないか
らそうするようプログラムされているからだろうが)跳ね回る。

「で、あれは本気か?」

「……あれって?」

はて、何かあったかな?

「惚けるな、アイツから学園長に申請された独自行動権のライセン
スのことだ」

「あれ? 許可おりたんですか?」

あれは『出ればいいな』程度の気分で言い出してみたものなのだが。

「忌々しいことにな。つまり今日からお前は自己判断で学園の許可を得ずともISを自由に使える訳だ。各国がまた五月蠅いぞ」

「あれは元々奴らに即座に対処するために所望したものであるから基本的に校則に従う」

「……ならばいいがな。私は使用する日が無いことを祈ろう」

一夏への荷物 社員証とC・B社の制服（制服の方はガンダム00セカンドシーズンのソレスタル・ビーイングの制服をイメージして俺が用意したものだ。男女用の違いは大まかなサイズのほかにジャケットの色が男性用は青、女性用は赤になっている）を取り出すとコンテナの閉鎖とロックを確認する。

もうすぐ時間的にアリーナの貸し出し時間は終了になるはずだ。その足で第三アリーナへ向かうのだった。

その頃某所では。

軍服に眼帯を付けた少女達が細い通路を逃げ回る。

その少女達の軍服の部隊章はそろってデフォルメされた眼帯付きの黒ウサギだ。それ以外の共通点といえば、それなりにスタイルのよい少女達というくらいか。

その内、数人の少女達が行き止まりの通路の角に追い詰められて

しまつ。

「ふふふふふふふふふふ………」

その背後から彼女達を追ってきたのは、彼女達より小さくほっそりした影。

彼女達と同じ部隊章の軍服に、眼帯を付けた小柄な銀髪の少女がその身体に似合わぬ大鉈：ではなくタクティカルナイフを手にしながら目には焦点が合わず壊れた笑みを浮かべてゆつくりと迫る。

それに怯えて壁に背を任せるように限界まで後退する少女達。何処ぞのホラー映画ばりの恐怖を彼女達は現在進行形で味わっていた。

「やめてください、隊長！！」

少女達より年上の女性により銀髪の少女が羽交い絞めにされる。

「「「お姉さま！」「」」

「私の事はいいわ、今のうちに逃げなさい」

必死の形相で羽交い絞めにする女性の言葉に少女たちは揃って肯くと部隊章にちなんで脱兎の如く逃げ出す。

「……大丈夫ですよ、隊長。もうあなたを脅かすものはいませんか」

子を慈しむ母のように隊長と呼ぶ少女に話しかける。

少女の瞳に光が戻るとえぐっえぐっ目には涙を溜めて泣き出してしまつ。

(たいちよーかぁいいのおー おもちかえりいー)

女性は顔に出さずそんな事を考えながら後ろから優しく少女を抱きしめる。

ふによん、と女性の豊かな胸が少女の後頭部に当たると途端に少女の眼が厳しくなった。

「クラリツサ！ お前も…お前も私の敵だ！」

再び手のタクティカルナイフに力が籠り、振り回そうとするところを再び羽交い絞めにされる。

「お、落ち着いてください、隊長おー！」

「敵だ…っ！ 胸のでかい女はみんな私の敵だぁーっ！…！」

ドイツ軍の基地内に、ラウラ・ボーデヴィツヒの叫びが木霊した。

「はっ、今誰かの魂の叫びを聞いた気がするわ！」

「どうしたの？ ファンさん」

一旦出していた私物を持ってきた大型ポストンバックへ詰め直していた鈴音は何らかの電波を感知したのか顔を上げて口走る。それを寝転んでバラエティ番組を見ていたルームメイトにて二組の元代表、ティナ・ハミルトンが顔を向けた。

「う、ううん、何でもない。でもよかったの？ 簡単にクラス代表

を譲っちゃって」

「いいのよ、一組の代表は藤原くんがなると思ったから立候補しただけだから」

「げ、あんたも男の趣味悪いわよ」

「そう？ 私は好みのタイプよ」

まるで恋する乙女の顔でわずかに頬を赤く染めて微笑むティナに鈴音はイギリス代表だとかいう金髪ドリル女もだけどなんであんなのがモテルの？ と心の中で突っ込む。

「あら、何処行くの？」

全ての荷物を詰め込み直したポストンバックを抱えて出て行くこととするところを呼び止められた。

「1025室。篠ノ之さんと部屋交換してもらおうと思って」

「……そういう事は寮の責任者の先生か学園長先生に許可もらわないとできないわよ」

「ふーん、じゃあ責任者の先生って誰？」

「織斑先生」

鈴音の部屋交換して一夏と同居計画は一瞬で潰えた。

クラス対抗戦

「最つつっ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！ 犬に噛まれて死ね！」

寮の一室から鈴音は涙をこぼしながら飛び出した。

転入した初日の放課後、一年ぶりに再会した幼馴染の織斑一夏と話そうとアリーナへ向かったが入るタイミングを逃してしまった。

それに一夏は彼女の知らないもう一人の幼馴染の少女と何故か同じ部屋で生活していると聞き、直談判して部屋を交換してもらおうとするがそれすらも彼女が苦手とする千冬が存在により速攻で潰れた。

それでも少しでも話をしようと思えば彼の部屋を訪ね、それとなく昔した約束のことを切り出してみるとなんと一夏はその約束を綺麗さっぱり忘れていた。

もし約束したのが五年前や十年前だったら鈴音もここまでシヨックは受けなかつただろうが、そこまで昔の出来事ではない。一夏にとって自分はその程度の存在でしかなかったのか？

それが悲しくて、悔しくて、こぼれ落ちる涙に構わず全力で部屋へ走った。

それがいけなかつたのだろう、駆け下りようとした階段を踏み外してしまった。

「あっ………！」

鈴音の小柄な身体がバランスを崩し階段から転げ落ちそうになる。

ISを展開しようとするがその脳裏に日本に来る前に、無許可でISを起動させたら最悪外交問題に発展しかねないからそれだけは本当にやめてくれと何度も言ってきた政府高官の情けない顔が浮か

んだ。

（な、なんでこういう時に思い浮かべるのが一夏じゃなくてこんななのぉ！！？）

思考の間にも鈴音の身体が下の踊り場に向かって落下する。

もっとも、こういつた状況での咄嗟のISの起動には学園も外交問題にするほど頭は固くない。精々十枚ほどの反省文で何とかなるだろう。

そこに下の階段から踊り場が上がってきた見覚えがあるような影が目に入った。

「ど、どいてどいてえっ！！」

その人物を確認する間もなく踊り場に落下した鈴音は、抱きとめられるような優しい衝撃のあと気を手放してしまった。

懐かしい夢をみた。

『あたしがもつと…料理が上手になったら、毎日一夏に酢豚を作つてあげるね』

筈に続いて急に刹那が居なくなり、落ち込んでいた一夏に鈴音はもうすぐ卒業する小学校の教室で言った。

活発であるが恥ずかしがりやであった鈴音にとってこれが精一杯の告白であり、一夏も『それ本当か？ すっげー楽しみ』と喋ってくれた。

ふたりだけの約束だから、と指きりまでした。

ちゃんと覚えてくれていると思ってた、でも一夏は……

意識を取り戻した鈴音は誰かの背中に背負われていた。

「……………いち、か？」

もしかして、一夏が追いかけてきてくれて倒れてる自分を運んでくれているのか？ と期待したが

「一夏じゃなくて残念だったな」

「マヌケマヌケ」

聞き覚えのある声と小馬鹿にするような電子音。それは求めていた一夏ではなく、苦手なアイツ。

「ふ、ふふ、藤原あ！？」

素っ頓狂な声を上げてしまう。鈴音を背負っているのは刹那だった。

その手には紙袋を持っており、中から丸い玩具が顔を除かせては目に当たる部分のライトを点滅させながら電子音を発している。

「お、下ろしなさいよお！！」

「もう目の前が保健室だから人がおとなしくしてる」

じたばた暴れる鈴音を無視して刹那は保健室のベッドにおろす。

「……………何も聞かないの？」

「聞いてほしいのか？」

逆に問いかけられて消沈してしまう。

「どうせ一夏と曖昧な約束でもしてて忘れられたとか、その辺だろ」

鈴音の心にぐさつと何かが刺さった。

「ちゃんと言葉に出してはつきり言わないと伝わらないぞ、俺も一夏もエスパーでもなんでもないんだから」

「……………あんたは何時だつてそう、苛められてた私を一夏と一緒に助けてくれたかと思えば変なあだ名を付けて、嫌な奴だと思ったら優しくして、それで突然私達の前から姿を消した」

ベッドの上に座って膝を抱えて俯いた鈴音の愚痴をただ静かに聞いている。

同じ学校に通っていた同級生としての時間は2年もない。それも鈴音は刹那とはクラスが違い、知り合ったのも一夏を通してと、面識も薄かった。

「失踪した件は兎も角、あだ名の件はお前から言っただんど。好きに呼んでいいと」

「へ、それだけ？」

「お前も『いうな』とは言っても『変える』とは言わなかったからずっとそのままだ」

「……じゃあ、変えてよ」

ふむ、と刹那が少し考え込む。

「『りん』では一夏と被るから……じゃあ『すす』でどうだ？」

やっぱりこいつは変なヤツ。でも昔ほど嫌いというか、苦手じゃない。

鈴音の心は少しだけ晴れた気がした。

ちなみにその頃、生徒会室では。

「おーい、虚ちゃん？」

虚の前で生徒会長がぶらぶらと扇子をふるが、虚はぼーっとしたまま反応しない。手にした急須を傾けているが中にはお茶は入っておらず、湯のみには表面張力ギリギリで溢れそうなほど温くなったお茶が注がれていた。

普段、周囲の生徒や教師からも秘書が学生のコスプレをしているとすら言われる彼女だが今日一日こんな感じでぼーっとしていて、幼馴染である会長も流石に心配になってくる。

それを傍目で見っていた妹の本音はというと。

（意外と乙女趣味なお姉ちゃんにいきなりお姫様抱っこははやばかったかな？ でもお姉ちゃんもせつさんに脈ありみたいだね、セッシーに対抗するにはやっぱり私とお姉ちゃんて組むしかないかな。それにおじよさまも興味深々だからまきこんでみよかな（？））

微妙に黒いことを考えていたりする。

そしてその同時刻、ある食堂。

バンドナを付けた茶髪の少年の箸から、この食堂のある意味名物であるメチャクチャ甘いカボチャの煮物がポロリと落ちる。

「何やってるのよお兄、さっさと食べちゃいなさいよ」

テーブルを挟んで向かい合って食事をとっていた妹がぼーっとしている兄に文句を言うが本人は聞いてない。

「……何だろう…今日、何か大切なモノを取られた気がする……」

少年は微妙に虚ろな目でポツリと呟くとカボチャに箸をぐさつと付き立てるのだった。

五月。

あれから数週間たった今でも、鈴の機嫌は安定しない。それどころか日増しに酷くなっている気がする。

俺に会いに来ることはまずなかったし、たまに廊下や学食で会っても露骨に顔を背ける。

あの後、俺宛に届いた社員証や制服にサポートマシン『チビ白八口』を持ってきた刹那にも「こればかりはお前が悪い」と言われてしまった。

先週に一度だけ放課後訓練中のピットに鈴が来た事があったがそのときは売り言葉に買い言葉と言うか結局口喧嘩になり鈴にとって

禁句である「貧乳」と言ってしまう、ISを使ったとは言え特殊合金製の壁に直径30センチのクレーターを作るような怒りを買ってしまった。

だから刹那、「俺もう知らね」って顔で呆れてないで幼馴染だったら何か言ってくれ！

そして今日はクラス対抗戦当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と鈴。

噂の新入生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。それどころか通路は立ち見の生徒で埋め尽くされている。入りきらなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

俺の視線の先では、鈴とその専用IS『甲龍』が試合開始の合図を静かに待っている。正式な読み方は『しえんろん』なのだが、某龍玉とかぶるので『こうりゆう』と読ませてもらおう。

白式と同じ近接型で、肩の横に浮いている攻撃的な棘付き装甲のついた非固定浮遊部位アンロックユニットが特徴的だ。おそらくあれは白式のような機動力重視のスラスタータイプではなく攻撃力重視の武装タイプだろう。

でもあれでどうやって戦うんだろう。スパイク部分でタックルでもしてくるとか？

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

俺と鈴は空中で向かい合う。その距離は5メートル。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げたあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

これは強がりでもなんでもない。

訓練や練習なら兎も角、俺は真剣勝負で手を抜くのも抜かれるのも嫌いだ。

勝負つてのはそういうものだ。全力でやって、初めてそこに意味が生まれるのだと思う。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。ワールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

それは脅しでも何でもなく、本当のことだった。

噂では操縦者に直接ダメージを与えたり、絶対防御を破壊するためだけの装備も存在するらしい。もちろんそれは競技規定違反だ。けれど、殺さない程度にいたぶることは可能であるという事実は変わらない。

そして、代表候補クラスであればそれが可能なだろう。

「それともう一つ、今のあんたより藤原の方が十倍マシよ」

よかつたな刹那、どうやら鈴の中で刹那株がいつの間にか上昇しているようだ。俺の株は暴落しているみたいだけど。

『それでは両者、試合を開始してください』

アナウンスと同時に鳴り響くブザー。その瞬間に俺と鈴は動いた。雪片式型が鈴の二刀流の異形の青龍刀で弾き返される。俺は先日習ったばかりの三次元躍動旋回クロスグリップターンでどうにか鈴を正面に捉えた。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

鈴は二本の異形の青龍刀を柄で接続しナギナタのような形態にするとISの手首を回転させながらバトンでも扱うかのように振り回して斬り込んでくる。鈴の手によって自在に縦横無尽に高速回転する攻撃に俺は捌ききれない。

まずい、このままじゃ消耗戦になるだけだ。一度距離を取って……

「甘いっ……！」

甲龍の非固定浮遊部位アンロックユニットがスライドして開く。中心の球体が光ったと思った瞬間、俺は目に見えない何かに殴り飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

不敵な笑みを浮かべる鈴。牽制ジャブの後は本命ストレートと相場が決まっている。ドンッ！！と音と共に再び不可視の攻撃に殴られて、地表に打ち付けられる。

ずきんつとした痛みがシールドバリアーを貫通して届いていた。ダメージもいきなり76食らっている。これは、かなり、まずい。

「なんだあれは……！？」

俺達と一緒にピットでリアルタイムモニターを見ていた篤が思わず叫んだ。

「衝撃砲ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾にしてぶつける武器です」

「フルト・ティアーズBTと同じ第三世代型特殊装備ですわね」

「打撃力は低いが砲身と砲弾が見えない、その上に射撃角に制限がない。ハイパーセンサーで空間の歪みを探させれば射線の予測はできるだろうが、それでも少々厄介な攻撃だ」

山田先生にセシリアさんに続いて俺が説明する。

モニターの向うでは何とか立ち上がった一夏が再び空中を舞い、連射する衝撃砲の攻撃に幾度と無く吹き飛ばされるがその内回避するようになってきた。

『よくかわすじゃない。衝撃砲 龍咆 は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴的なのに』

スピーカーから鈴の声が聞こえ、再び衝撃砲の連射が再開される。

「しかもあの武装は藤原君が言っている通り、射角はほぼ無制限で撃てるようです」

「つまり、死角が存在しない？」

「そついう事ですな……」

「……一定数使用したらエネルギー充電か強制冷却かは知らないが短時間だけ使用不能となるようだがそれでも気休めだな」

俺たちの言葉は篝の耳に届いていないようで、ただ腕の中にいるチビ白八口をぎゅっと抱いてひたすら祈るようにモニターの向うで砲撃にさらされる一夏を見つめていた。

(「やれやれ、こうも一途に想われているとは、一夏も幸せ者だな。はやく気付いてやれよ」)

ま、無理かもしれないけど。と心の中で自分に突っ込みを入れる。モニターの中で一夏の動きの変化に最初に気付いたのは山田先生だった。

「動きが変わった？ 織斑君、何かするつもりですね」

旋回するように回避しながら一定の距離をキープし続ける機動に変わっている。

「私が教えた、瞬間加速だろう」
イグニッションブースト

「イグニッション、ブースト？」

その意味と目的を察したチー姉が答えを呟いた。聞きなれない単語にセシリアさんが尋ねる。

「後部スラスタからエネルギーを放出し、それを一度内部に取り込んで圧縮し再び放出することでその時の慣性エネルギーを利用して一瞬でトップスピードに乗る奇襲攻撃だ」

「そう、出し所さえ間違わなければ、アイツでも代表候補とでも渡り合えるはずだ」

俺の説明にチー姉が付け加える。

しかし瞬間加速は近接特化の操縦者にとって必須技能のような気イグニッションブーストもしてきたが、仮にも代表候補のセシリアさんが名前も知らないと

はどういうことだろうか。もしかして必要ないからと教えられなかったとか？ でもいくら自分が使わないからといって対戦相手が使つてこないとは限らないからちゃんと言前と原理位は教えた方がいいぞ、イギリスの教官。

「そんな技術を何時の間に……」

「だがあくまでも奇襲攻撃。通用するのは一回だけだ」

チー姉の言葉に全員黙った。

この一週間で俺とチー姉の二人掛りでなんとか教え込んだ付け焼き刃の切り札。^{ジョーカー}

通用するのは一度だけ。知られてしまえばおそらく二度目を使わせないよう異形の連結青龍刀 双天牙月 の回転斬撃に持ち込まれるだろう。

ピットにいた全員がモニターを見ている中、おそらく俺だけが気付いた。^{イグニッションブースト}瞬間加速にしてはチャージが違う？ まさか……！！ 山田先生からインカムを奪い取る。

「ふ、藤原君？ そんな、みんなの前でなんて…先生、困りますっ……」

机の上に押し倒される形になった山田先生が顔を赤くしてうつつとりした口調で何かを呟いていた、セシリアさんのこめかみに青筋が浮かんでいるが無視してインカムに怒鳴った。

「止める一夏！ 今のお前と白式に、^{オーバーブースト}限界加速は無理だ！！」

『いや、やるんだ！ 千冬姉にもらった雪片と、刹那に教えてもらった技で……！』

「……藤原、まさかアレを教えたのか？」

「応用でこういったものだと教えて一度やって見せたただけだ」

チー姉の問い詰める口調に反論する。

まさか俺もこんなところで使おうとするとは思わなかった。

「刹那さん、オーバーブーストとは？」

「俺の、瞬間加速イケニッションブーストの応用技術だ。名前の通り限界を突破する加速で、エネルギーのタメに時間が必要だが……」

セシリアさんの問いかけに説明している間、モニターからドンッ！！と大きな音が聞こえた。

衝撃砲の音ではない。一夏が限界加速オーバーブーストを起動させた音だ。

一夏がいた場所にはフィンスラスタから放出されたのであろう、翼状のエネルギーが一瞬残留し、雪片式のバリアー無効化能力であるエネルギー刃を眼前に構えた一夏が一瞬でシールドへ突っ込んだ。

……アリーナの遮断シールドに。

僅かにずれた機動により直撃こそならなかったものの、そのすぐ脇を超高速で翔け抜けられた鈴音の小さな身体は一瞬遅れてやってきた衝撃波に見舞われ、大きく吹き飛ばされると地面に激突。二度三度とバスケットボールがバウンドするように跳ね回り、五度目のバウンドする直前にISが自動姿勢制御でバランスを取り戻す。遮断シールドへ突っ込んだ一夏も抜け出さず再び二人は対峙する。

「……今のが当たっていれば、織斑君の勝ちでした」

「…これが、オーバーブースト限界加速……」

「違うな」

「ああ、オーバーブースト限界加速を正常に発動できれば瞬間的に亜音速領域を突破できるはずだが、一夏はまだ亜音速に入った程度だ。それにスピードに振り回されている。あれじゃあ交通事故だ」

チー姉と俺の言葉に全員目が丸くなる。

まあ、仕方ないか。現行の第3世代機の高機動パッケージ一式を使用しても巡航速度は時速500〜600kmだというのに一瞬だけとは言え亜音速、つまり時速600〜800kmにまで到達するというのだからそういう反応も無理ないかもしれない。

「そうそう、篠ノ之とオルコットは間違っても真似するなよ。あれは近接主体で屈強なエクシアや白式だから耐えられるんだ。第2世代の量産型や射撃型のブルー・ティーズでやると間違いなく空中分解するぞ」

俺たちの話を聞いて見入っていた篝とセシリアさんにチー姉が釘を刺す。

「やるじゃない、まさかこんな隠し玉を持ってたなんてね。でも当たらなければ意味ないわ!」

「そつちも結構ダメージ受けてるじゃないか、次は本気で行くからな」

「当たり前じゃない! 格の違いってのを見せ付けてあげるわ!」

鈴音が双天牙月を振り回し、一夏は懲りたのか今度は瞬間加速を
イグニッションブースト
機動しようとする。

二人が激突する、と思った瞬間。

二人の間に赤黒い超高出力の粒子ビームが撃ち込まれた。

あの色、は……！！

貫通したアリーナの遮断シールドを抜けて入ってきた敵の数は3。
それを見た千冬は誰にとなく呟いた。

「個別対応のカスタム量産機？　しかし、全身装甲とはエクシア並
フルスキン
みの重装甲に、軍用機が玩具にしか見えないふざけた火力じゃない
か……しかし、あの粒子とビームの色は………」

その3機は千冬の言った通り胴体と四肢は同一だが、頭部と武装
にカラーリングが違った。

1機は黒。その手にはボウガン状のライフルが握られ右肩に大砲
を担いでいる。

1機は緋色。右肩の武装コンテナに身の丈に迫るほどの大剣を装
着し、左手には固定式ハンドガンに腰には牙を連想させるパーツが
4つ付いたスカートアーマーを両腰に装備している。

1機はワインレッド。他2機とは違い特徴的な頭部に右手には緋
色の機体と同タイプの固定式ハンドガンを装備し、非固定浮遊部位
アンロックユニット
には実体シールドと一体となったミサイルランチャーを装備してい
た。

そして共通するのは背中のコーン型スラスタより血のような真
紅の粒子を放出している。これは色こそ違えどIS学園の生徒・教

師には大なり小なり見覚えのある物だった。

「何で！……なぜお前たちがいる！？ 答えろ、スローネエエエエエ
エ！！」

ピット内でモニターに映る3機の謎のIS……ガンダムスローネ
シリーズの姿を認識した刹那の声が響いた。

クラス対抗戦（後書き）

乱入して来たのはゴリ「」ではなくスローネ三兄弟。
もちろん無人ですよ？ 無人って言ったら無人なの！

激突（前書き）

結構時間がかかってしまいました。
それも今までに一番ながくなってしまいました。

激突

再び鈴と激突しようとした直前、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。鈴の衝撃砲 ではない。範囲も威力も桁違いだ。

生理的嫌悪を抱かせるような鮮血色のビームがアリーナ外から撃ち込まれ、遮断シールドを貫通しステージ中央へ着弾。

着弾点は大きなクレーターができていた上、その周辺はガラス化している。

『一夏、試合は中止よ！ すぐにピットに戻って！』

状況がわからず混乱する俺に、鈴からコアネットワークの量子通信を利用した個人間秘匿通信ブライベート・チャンネルが送られてくる。にしてもこれの『頭の右後ろ側で通話をするイメージ』というものがイマイチよくわからないので俺は一度送られて来た相手のチャンネルを登録してからでないと使用できなかつたりする。

何をいきなり言い出すのか。と思った瞬間、ISのハイパーセンサーが緊急通告を送ってきた。

遮断シールドを突破した熱源3。所属不明機と断定。ロックされています

「なっ…！」

アリーナの遮断シールドはISのシールドバリアーと同じものだ。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が3機も乱入しこちらをロックしているということだ。

つまり、所謂大ピンチ、というやつだ。

『一夏、早く!』

「お前は どうするんだよ!?!」

鈴とはチャンネル登録していないため回線の開き方がわからない俺は、普通に聞くしかない。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

「逃げるって……相手は3人もいるのに、お前を置いてそんなことができるか!」

「馬鹿! アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが!」

思いつきり遠慮なく言われた。因みに俺が個人間秘匿通信プライベート・チャンネルで返さなかったからか鈴も普通に喋っている。

「別に、あたしも最後まで正面から真面目にやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちが……」

「あぶねえっ!?!」

間一髪、俺は瞬時に雪片式型をバリアー無効化能力を使用しない省エネモードの実体剣状態に変形させると鈴の体を抱きかかえてさらう。その直後にさつきまで居た空間が赤黒い光弾の雨にさらされた。

「何よ今の……まさかビーム兵器? あんなに小型で効率のいいビーム兵器が完成していたの!?!」

腕の中で鈴が驚く。

そういえばオルコットさんも前に、粒子ビームは破壊力があつても効率が悪く大型だから現在のISの主力エネルギー系武装はレーザー兵器やプラズマ兵器が主流となっているって言ったな。エクシアというかC・B社の技術は異質なんだとか。

刹那もエクシアが効率よく小型の粒子ビームを使用できるのは搭載されている新型特殊機関のおかげだと言っていたな。ということはある機体はエクシアと似たような機関を搭載している？ 放出している粒子は気味の悪い赤い色だけだ。

「それも刹那のライフルとほとんど変わらない出力かよ……」

ハイパーセンサーでの簡易解析でその熱量を知った俺は背中に冷たいものを伝わっていく思いだった。エクシアみたいなISが3機もいるのかよ。

「つて、ちょっと馬鹿！ 離しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな……つて殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさい！ 大体どこ触って……！」

「！ 来るぞ！」

ぼかぼかとシールドバリアーごしに顔に向かってパンチを連打してくる鈴の事はさておき、煙のカーテンの向こう側にいた敵がはつきりと姿を現す。

「なんなんだ、こいつら……」

その姿は異質だった。

3機とも基本的な形状は同じフルスキン全身装甲だ。

なにかとエクシアという同じくフルスキン全身装甲タイプのISに見慣れてしまっていたが、やはりこれは異質だ。

通常、ISはシールドバリアーがあるため装甲とはあまり意味を持たない。もちろん防御特化型で装甲が多いISも存在するがそれでも肌が一切露出しないISと言うのは他に聞いた事がない。

「お前、何者だよ」

呼びかけてみるが返答はない。乱入してきた位だ、当然といえば当然か。

『織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！
すぐに先生たちが制圧に行きます！』

通信機で割り込んできたのはピットにいる山田先生だった。心なしかいつもより声に威厳がある。

「いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴」

あいつらは遮断シールドを突破するビーム兵器を持っているのだ。つまり、今ここで誰かが相手をしなければ観客席にいる人間にまで被害が及ぶ可能性があるということだ。

「だ、誰に向かって言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

俺が離すと鈴は自分の体を抱くような格好で離れる。うーん、そこまでイヤだったのか。そいつは悪かった。

『織斑くん！？　だ、だめですよ！　生徒さんにもしものことがあったら』

山田先生の言葉はそこまでしか聞けなかった。

敵のISのうち1機：赤い機体が武装コンテナから大剣を取り外して装備すると突進し、大振りに振りかぶって斬り込んで来る。俺と鈴は二手に分かれてその攻撃を避ける。

何か名前がないと不便だな。よし、今の赤いの奴を　スカート付き、黒い奴を　丸太担ぎ、もう一機の鮮やかな赤系の奴を　坊主頭　と呼ぶこととしよう。俺の中で決定。

「ふん、向うはやる気みたいね」

「みたいだな」

「それも一人だけで他は高みの見物だなんてなめられてるわね」

そう鈴の言っている通り斬り込んで来て俺たちが相手をするのはスカート付き　だけで、丸太担ぎ　と　坊主頭　は俺たちより上空で文字道理高みの見物と洒落込んでいる。

いや、でもこんなふざけた奴らを三人同時に相手にする必要がないだけでも助かる。

俺と鈴はそれぞれの獲物、俺は雪片式型を变形・展開させてバリ
アー無効化能力をいつでも発動できるようにまで持って行き、鈴は
アンロックユニット
非固定浮遊部位がのカバーがスライドして衝撃砲の砲口を覗かせる。

「一夏、あたしが　龍咆　で援護するから突っ込みなさいよ。武器、

それしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか」

鈴の衝撃砲がドンツ！ と唸ると同時に俺は飛び出した。

不可視の砲弾に狙われた スカート付き は最初の攻撃こそ直撃したものの、大してダメージを受けたようには見えず、反対に左腕の固定式ハンドガンから粒子ビームの弾幕を撃ち付けて来た。

「な、きいてない！？」

鈴が驚きの声を上げながら粒子ビームの雨を避ける。

先ほどの衝撃砲が発射されたとき、俺のハイパーセンサーがある現象を捉えていた。

未確認機より特殊フィールドの発生を確認。該当一件、GNフィールド

「鈴！ コイツGNフィールドを持ってやがる、衝撃砲がきかないのは多分その所為だ！」

「な、何よそれえ！？」

「前に刹那が言っていた特殊粒子を使った防御フィールドで、確か不可視状態でもレーザーや拳銃みたいな質量の小さい攻撃だったら射線をそらされて当たらないとか……」

「龍砲 はあくまで空間を圧縮した砲弾だから事実上質量は極めてゼロだから通用しない！？ 何よそのインチキ！！」

牽制にもならない衝撃砲の連射をやめた鈴は連結青龍刀 双天牙月 を展開する。その間に突っ込んできた スカート付き の大剣を實體剣の雪片式型で受け止めるが、

「お、重い!？」

その一撃を受け止めたが重すぎた。ISにはパワーアシストの他に パッシング イナーシャルキャンセラー にP・I・Cのおかげで重さをほとんど感じることはないはずなのに、 スカート付き が切り裂くというより叩ききるように打ち付けてきた大剣がメチャクチャ重い。そのままパワーで押し切られるように弾き飛ばされてしまう。

「一夏!」

その後を追撃しようとした スカート付き に鈴が回転斬撃で切り結ぶ。

鈴に足止めされた隙に瞬間加速で奇襲。 イグニッションブースト 瞬時に零落白夜を発動し一撃必殺の間合いだ、これならっ……! !

「何で!……なぜお前たちがいる!？」 答える、スローネエエエエ
「エ!……!」

「……ああ、そう言われてみれば所々見覚えがあるな」

「な、何なのですか……? あのISは」

苦虫を十匹ほど噛み砕いたような表情のチー姉に山田先生が恐る恐るといった表情で問いかける。

「……藤原、いいのか？」

「ああ」

俺はピットのコンピューターを調べながら答えた。既に遮断レベルは4に設定され、全ての通路の扉は電子的なものは全てロックされている。

「スローネは、元々藤原の両親が設計したエクシアの兄弟機だった。もともと建造前に2人は事故で亡くなられているから今アリーナにいる機体はその設計図を手にいれた誰かが作ったのだから」

「……それじゃあ」

「詳しいスペックは不明だがエクシアと同等と考えてもいいだろう」

「そんな…織斑くん聞いてますか！？ 凰さんも！ 聞いてますー！？」

山田先生が焦ってインカムに呼びかけるが返事は返ってこず、ノイズだけが流れる。

「本人達がやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！ 何暢気なことを言ってるんですか！？」

「おそらく、あの機体の仕業だ」

俺の眩きにピットにいた全員の視線が集中する。

「あの上空で静観しているワインレッドの方、あの頭部は電子戦仕様だ。それでこの学園にハッキング、殆どのコントロールが奪われている。それに」

「そんな！ それじゃあ避難することも救援に向かうことも出来ないじゃないですか！ 早く緊急事態として政府に助勢を」

「ほぼ不可能だ。あのワインレッドの機体から強力なジャミングフィールドを感知している。この影響を受けないのはコアネットワークの量子通信だけだ」

「そんな……」

ピット内に悲痛な空気が流れる。チー姉がコーヒーにドパドパと大量の塩を入れているが、一々突っ込んでいる暇がないため無視する。俺はコンピューターの一部のコードを引き出すと、チビ青八口の口の中にあるコネクタに差し込む。

「青八口、量子通信でお前の兄弟達に協力してもらってハッキングし返してロックを解除しろ！」

『ガッテンガッテン！』

チビ青八口は目をチカチカ光らせながら耳をパタパタ動かして答えた。

「あら、八口ちゃんはそんなこともできるのですか？」

「行くつもりか藤原」

「だ、駄目ですよお藤原くん！ 生徒さんにもしもの事があつたら……それにISの使用には許可がいきますよ、後は先生たちに任せてください」

「免許がある」

「め、めんきよ？」

「独自行動権のライセンスのことか。だが行く必要があるか？ あの粒子の色を見る限りスローネのドライヴは擬似だ。その内粒子切れになるんじゃないか？」

『チーチャンガキボウロンヨイウナンテメズラシイネ、デモアマイアマイ』

今まで箒の腕の中で片言しか喋らなかつたチビ白八口が流暢な電子音で喋りだした。

「まさか、お前っ………！」

『ソーダヨ、ワタシダヨ、ワタシガソレスタルビーイングシャノシャチヨウサンダヨ、ハロー』

「…八口の量子通信を利用して通信を繋げてきたのか」

『ダイセイカイ、ハナマルヲアゲヨ。デ、ハナシノツツキダケド、アオチャンカラダイタイノハナシハキイタカラ。ケイソクサレ

タエネルギーリヨウカラギヤクサンシテモカルクアリーナノフタツ
ヤミツツサラチニシテモオツリガクルダローネー」

「そこまで……」

『ワタシモコレカラテツダツテアゲルカラスグロックハカイジヨデ
キルヨ。シールドハセツチャンノホーデコワシテネ。クアッドラン
チャーヲツカエバイツパツデハカイデキルヨ、ジャーネー』

そこまでいうとブツン、と回線が切られた。

「じゃあ行ってくる」

俺がピットからゲートへ向かうとセシリアさんも付いてきた。

その後ピット席で、「あれ、篠ノ之さんと白八口ちゃんは何処で
すか?」と山田先生がきよきよろしていたり、大量の塩が入った
コーヒーを口にしたチー姉が吹いたのはまったくの余談だ。

アリーナに続くゲートエリアに来た俺はエクシアを展開すると訓
練リミットを解除する。出力が100%になったGNドライブが一
段と輝きを増しながら粒子を生成しはじめる。

装備一式が入ったコンテナを解除し、中から四挺のGNランチャ
ーを取り出す。肩のグラビカルアンテナを収納するとそこに一基づ
つ取り付け、更に両手に装備すればエクシアの装備のなかで最も破
壊力のある四連収束ビーム砲『クアッドランチャーモード』となる。
その隣で当然の如くセシリアさんがISを展開していた。

「セシリアさん、まさか君も行く気か?」

「当たり前ですわ、わたくしも直ぐに出撃できるのですから数は多
いにこしたことはありませんわ」

彼女はにこりと笑って答える。

「……今回はここに居てくれ」

「そんな、刹那さんはわたくしが邪魔だと、足手まといだというのですか!?!」

「そうじゃない。単純に相性の問題だ」

「相性つて、刹那さんは近接型でわたくしは射撃型。相性は良いはずです!」

「いや、俺とではなく相手とだ。奴らはおそらくGNフィールドを標準装備している。実弾がミサイルだけで他は全てレーザー兵器だけのブルー・ティアーズでは対処できない」

「……それでも、それでもあなたの背中を護りたいのです」

「なら、せめてこれを使え」

コンテナの中からリボルバーバズーカとその予備の弾、そして小型コンテナ2つを渡す。

「これは……」

「アンロック使用許諾してあるから後は手動で使えるようになってる。あとこちらのコンテナは」

コンテナの中の武装に付いて簡単な説明をしたところでハ口から

『ロックカイジヨ、ロックカイジヨ』と通信が入ると目の前のゲートが開放されていく。

粒子充填、臨界まであと1.2秒。四挺の火炮に粒子が充填していくなかでアナウンスが流れた。

『一夏あつ!! 男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする!!』

幕か、まったく無茶をする。

外ではスローネアインがドライとドッキングしGNメガランチャーを展開する。一夏はスローネツヴァイに阻まれていけそうにない。ならば、射線をアインとドライの方向へ向ける。

「圧縮粒子前面開放。クアッドランチャーフルバースト……」

エクシアの前に4つの砲口からあふれ出た粒子が一つの球体を作り出す。

GN粒子の特徴の一つ、粒子ビームを束ねることでその威力を数倍にまで高めることができる。クアッドランチャーはその理論を応用した技術だ。

「狙い撃つ!!」

トリガーを引き、一点に集中し威力が数倍に跳ね上がった粒子ビームは容易く遮断シールドを貫通した。

必殺の間合いの斬撃はするりとかわされてしまつ。これで都合4度目のチャンス逃してしまった。

「一夏つ、馬鹿！ ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

普通ならかわせるはずのない速度と角度で攻撃しているのに俺の攻撃に反応して回避行動を優先する。それにスラスターの出力も桁外れなのだろう。零距离から離脱するのに一秒とかからない。

「一夏つ、離脱！」

「お、おっつ！」

敵は回避した後は必ず反撃してくる。出鱈目に大剣を振り回して接近してきた。その合間にハンドガンから粒子ビームも撃ってくる。

鈴が衝撃砲を連射する。ダメージこそ与えられないものの僅かな隙で俺は敵の射程距離から抜け出す。

わかったことと言えば、あの スカート付き は鈴の甲龍と同じく近接主体型で、ビームの射程も短いといった位か。

「鈴、シールドエネルギーはあとどのくらい残ってる？」

「180ってところね」

「そっか、俺は90ちよいつてところだ」

大分削られているが、それでも俺よりはマシだ。

というか雪片式型の仕様はやはりきつすぎる。これは一対一を前

提としたうえ短期戦用だ。

「ちょっと、厳しいわね……現在の火力であいつのシールドと装甲を突破して一機でも機能停止させるのは確率一桁ってところじゃない？」

そう、射程外に後退している俺達を追いかけてくる スカート付きの他に二機も控えているのだ。

「で、どうすんの？」

「あいつ等が手を出してこなければ千冬姉たちが来るまでならなんとかなりそうだが、逃げたきや逃げてもいいぜ」

「なつ、馬鹿にしないでくれる！？ あたしはこれでも代表候補よ。それが尻尾を巻いて退散なんて、笑い話にもならないわ」

「そうか。じゃあ、お前の背中くらいは守ってみせる」

「え？ あ。う、うん……ありが」

なぜだか赤くなった鈴の横を粒子ビームがかすめる。しまった、もう射程内か。

突っ込んできた スカート付き を二手に分かれて回避すると再び距離を置く。

「……なあ、鈴。アイツ、なんつーか……機械じみてないか？」

「何いつてるのよ、ISは機械よ」

「そう言うんじゃないやなくてだな。……あれって。中に人が、乗っているように見えるか？」

「は？ 人が乗らなきゃISは動か」

そこまで言っただけで俺と同じ事に気づいたのか鈴の言葉が止まる。

「そういえばアレ、さっきからあたしたちが会話してる時って少し消極的にね、まるで興味があつて観察してるみたい。それにあの腰つてやけに細いわね。まるで……」

まるで、円柱状のパーツを核にして胸から上と腰から下を取り付けたような……

「でも、無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの。でもあの形状で中に人が乗れるようには思えないし……」

俺もそれは教科書で読んだ。ISは人が乗らないと絶対に動かない。

しかし、それは本当だろうか。今最先端の研究ではどうかはわからないはずだ。なんせ、何処かの国や組織が開発しても黙ってればいいだけなのだから。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？ 無人機なら勝てるっていの？」

「ああ。人が乗ってないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

雪片式型 の威力は零落白夜を除いても高すぎる。

訓練や対抗戦で全力を使うわけにはいかないからと会社の方から出力を弱めるリミッターが設定されている。そのリミッターも刹那から非常時の為にパスワードを聞いて覚えていたからすぐに解除できる。

これで相手が無人機なら最悪の事体を想定しなくてもいいのだが、その反面リミッターを外した 雪片式型 の零落白夜を使用するにはこれ以上シールドエネルギーを消費する訳にはいかない。

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、アシが無人机だと仮定して攻めましょうか」

鈴がニヤリと不敵に笑った時、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

『一夏あつー!!』

キーン…とハウリングが尾を引くその声は箒のものだった。

中継室の方を見ると、審判とナレーターがのびていた。おそらくドアを開けたところで一撃を食らったらしい。

『男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする!!』

またハウリングが起こる。ハイパーセンサーで数十倍に拡大して箒を見ると、肩で息をしている。その表情も怒っているような焦っ

ているような不思議な様相をしていた。その隣ではチビ白八口が暢気に耳をパタパタと動かしている。

まずい！ 気がつく、今まで静観というか高見の見物と決め込んでいた 丸太担ぎ が右肩の大砲を引き伸ばし、その大砲の付け根に 坊主頭 が右腕から引き伸ばしたコードを接続する。おそらく、アリーナの遮断シールドを破壊した粒子ビームは二機ないしは三機分のエネルギーを連結して発射したのだろう。

その砲口は真っ直ぐ中継室の方を向いている。『スローネ、メガランチャーテンカイヲカクニン！ ホウキニゲロ！ ホウキニゲロ！』とおそらくチビ白八口のものである電子音声スピーカーから流れてき、箒はキツと 丸太担ぎ を睨んでいた。

「箒、逃げる！」

言っつて間に合うわけがない。

丸太担ぎ に向かって突撃しようとするが スカート付きイゲニツシヨンプーストに阻まれる。衝撃砲のエネルギーを取り込んで爆発的な瞬間加速で切り込むという俺の考えた奇策もこれじゃあ使えない。

「邪魔をするなあ！」

実体剣同士が鏝競り合いする中、 丸太担ぎ の大砲に光が溢れていくのがひどくゆっくりに見えた。

「箒いいい！！！」

丸太担ぎ の大砲が発射される、と思つた瞬間、

『圧縮粒子前面開放。クアッドランチャーフルバースト……狙い撃つ！！！！』

巨大な粒子ビームがピット側から遮断シールドを貫通、コードが接続されまともに動けない 坊主頭 の膝から下を呑み込み消滅させる。その反動でバランスを崩し、引つ張られるように 丸太担ぎ が仰け反る。その一瞬後、赤黒い強力な粒子ビームが空に向けて発射。再び遮断シールドを貫通した。

「な、なに今の!？」

鈴が思わず驚愕の声を上げる。今の粒子ビーム、刹那か。

開いたピットのカタパルトから四機のフィン状の浮遊砲台、ブルー・ティアーズのビットが躍り出てレーザーを照射する。ダメージはなくてもうつとうしいのか、スカート付き は振り払うように大剣を振り回す隙に俺は距離をとる。

ビットに続いて両手両肩に大砲を四挺装備した刹那のエクシアと、今まで見たこともない大型リボルバー銃を装備し脚部にコンテナを括りつけたオルコットさんのブルー・ティアーズが飛び出す。

って刹那、その大砲なんか煙吹いてないか? と思ったら案の定爆発。

「せ、刹那!」

「刹那さん!？」

爆発の中から大砲をパージしたエクシアが飛び出し、その右手に今までに一度も見たこともない奇妙な武器を展開する。

それは盾であった。それは銃であった。そしてそれは剣であった。

「駆逐する……貴様らを、俺が……エクシアが……!」

刹那が折り畳まれていた右手の複合武器の剣を展開する。

今まで傍観していた 丸太担ぎ が大砲の砲身を折り畳むと手にしたボーガン状のビームライフルと共にエクシアに向けて連射する。どうやらあの大砲は砲身の長さにより様々な粒子ビームを撃てるらしい。

スカート付き はその特徴的だったスカートアーマーの牙を思わせるパーツを分離。それがオルコットさんのビットと似た武器のようだ。それが小口径の粒子ビームを撃ちながら散会し、エクシアの周囲を取り囲む。

「あの武装、おそらくわたくしのブルー・ティアーズの特殊武装と同系列のもですね」

「あ、あいつ…私達相手に手抜いてたつて言うの！？ それに動きが今までと全然違うじゃない！」

効果のないレーザー砲台式のビットをフィンスラスターに格納し、俺たちの近くまで来たオルコットさんに鈴が反応し大声をあげた。いや鈴、あんな武器まで使われたら俺たちもう終わってるから。

刹那はエクシアを的確に動かし全方面から撃ってきたビームをこごとく避けながら時おり撃ってくる 丸太担ぎ の大砲の粒子ビームを左手に展開したシールドで防ぐ。

ある物は右手の複合剣で、またある物は左腕内部に内装しているビームバルカンでビットを落としながら接近していく。

刹那がシールドを投げ捨てるのと両手で複合剣を眼前に構えるとドーン！！ と大きな音と共にリング状のエネルギーをその場に残して消えた。正確には一瞬で限界を超えた加速をしたことがハイパーセンサーの記録で理解した。

限界加速^{オーバーブースト}。以前一度だけ見せてくれた瞬間加速^{イクニッションブースト}を越えた刹那の必殺技と言うべき機動。丸太担ぎ を通り抜け、遮断シールドに接

触する前に旋回。遮断シールドギリギリを加速の余剰速度でターンする。

必殺の一撃を受けた 丸太担ぎ はというと、その腹にあった円柱状のパーツが大きく抉り取られている。その中から見えたのは無数の機械のパーツ。

やはりこいつら無人機だったのか。上半身を支えきれなくなり赤い粒子を血を撒き散らすように崩れ落ちていくその姿を見ながらぼんやりと思っていた。相手をするだけでもあれだけ苦勞した相手の一機を呆気なく破壊した刹那。時間にして5分もたっていないんじゃないか？

複合武器の剣を折り畳み、粒子ビームを連射する刹那に スカート付き が大剣を盾にしてビームを防ぎながら突撃していく。

「お2人も、もう一機がこちらに来ましたわ。下がちなさい！」

オルコットさんの言葉に、足が吹き飛ばされたが破壊されていないかったもう一機の敵のことを思い出す。失った脚部から赤い粒子をもらしながら 坊主頭 がこちらに接近しながら断続的にハンドガンから粒子ビームを発射してくる。

「まずいわね、あたしも一夏ももうエネルギー少ないしあんたにはレーザー兵器しかないから正直きついわよ」

「…でもやるっきゃないだろ！」

「あら、安心なさい」

そう言ってオルコットさんは左脚のコンテナから取り出した小型ランチャーを左手で狙いをつける。と大型弾を二連射で発射する。ランチャーのサイズと比較すればそれが最大弾数なのだろう、撃つた

らランチャーを投げ捨てた。

ランチャーから発射された砲弾は 坊主頭 に直撃コースだったが二つとも粒子ビームの弾幕に破壊されてしまう。

「ちよつと、簡単に迎撃さ」かかりましたわ「…え？」

以外に呆気なく破壊されてしまった事に鈴が文句を言おうとするが発せられた言葉に驚く。

見ると二つの砲弾は粒子ビームに貫かれた一瞬後、爆発した。火薬が爆発した光ではない。これは……？

「粒子攪乱弾…ご自慢のビーム兵器もこの濃厚な幕カーテンの中なら脅威に値しませんわ」

「なるほど、チャフで光学兵器を減衰させるのね…ってそれじゃああんたも意味無いじゃない！」

「心配無用ですわ、なんせコレは……」

オルコットさんが装備していた大型リボルバー銃で狙いを定め、ドンツ！ と引き金を引く。発射された砲弾は 坊主頭 が咄嗟にかかげた非固定浮遊部位アンチロックユニットの実体シールドに当たり、 坊主頭 は吹き飛ばされる。

「実弾ですわ！」

ガコン、とシリンダーが回転し次弾装填される。

リボルバーバスターカ回転式実弾砲、ということは……

「さあ、踊りなさい…などと申しませんわ、そのまま破壊してさし

あげます」

ドン！ドン！ドンッ！

連射できるという事だ。

次々に発射されていくバズーカ砲により 坊主頭 のシールドは吹き飛び、手足はひしゃげた。

6発目を撃ち終えたオルコットさんがバズーカからシリンダーを外すと、後ろ腰にマウントしていたもう一つの砲弾が込められたシリンダーを取り出し、交換しようとする。それを好機と見たのか、手足を失った 坊主頭 がフルパワーで突撃してきた。

無人機の利点だ。手を失おうが足を失おうが頭を失おうが、最低限の機能さえ残っていれば最後はバンザイアタックで敵を巻き添えにできる。こんなの有人機では絶対に無理だ。

このスピードでは装弾まで間に合わない！

「下がれ、オルコットさん！」

「もう、世話が焼けるわね！」

今までの放課後の自主訓練からオルコットさんは間違っても接近戦は苦手だし、ブルー・ティアーズに搭載されている近接武装もナイフだけだ。俺とそれを察した鈴が前に出る、が。俺たちの間から発射された棘付き鉄球が 坊主頭 に直撃し、地面に叩きつけた。

「「へ………？」「」

状況に理解できない俺たちを放って置いて、 坊主頭 に直撃した棘付き鉄球はコードによりつながれていた発射元へ回収される。それは俺たちの後ろ、すなわち…

「こづいづ時、日本では確か…たーまやー、と言つのでしたかしら？」

かわいらしく小首をかしげるオルコットさんの右手にさっきの棘付き鉄球の付いたグリップが握られていた。おそらく右脚のコンテナに収納されていたのだろう、コンテナの口が開いていた。

「それではこれで……」

オルコットさんが棘付き鉄球を大きく振りかぶり、そして振り下ろすと同時に再びコードが伸びる。そのまままだに動こうとしていた 坊主頭 の頭部に鉄球が直撃し、頭部を半壊させた。

「チエックメイトですわ！」

オルコットさんがグリップのスイッチを入れると、鉄球の小型スラスタールが火を吹き高速回転を始める。鉄球に付いていた棘が頭部を完全に粉碎し、バストアップアーマーを割り腹部の円柱状のパーツの一部を破壊したところで止まった。

「ド、ドリル女がハンマー女になったと思つたらまたドリル女になった……」

一部始終をみていた鈴が呟いている。

そりゃそうだ、あんな香り立つくらい男臭い武器を使っているのが金髪の美少女なのだから。

でもいいな、あーゆーの。俺も使つてみたい。

「刹那さんは……」

俺たちが目を向けた先には赤い流星に蹂躪される スカート付きが。

斬られ、殴られ、打たれ、突き落とされ、蹴り上げられる。宙に舞い上げられた スカート付き は体勢を立て直す暇も与えられず、赤い流星の剣で×の字に斬られ爆発した。

その爆発の跡には赤い流星……いや、赤色化したエクシアがその手に二本のビームサーベルを携え、見下ろしていた。

まるで、その感情を発散するかのように全身から赤い輝きを放ちながら。

「何よ、あれ……」

俺たちの心を代表するかのよう鈴が呟く。それに答える者が居た。

『あれはTRANS - AMだ』

「トランザム？」

千冬姉だった。通常回線が回復したのか。

『お前たちが相手にしたのがどうも電子戦仕様だったようだ。コイツの破壊が確認されてすぐに施設のコントロールは戻った』

「あの織斑先生、トランザムとは？」

『あれがエクシアの単一仕様能力だ。ワンオフアビリティ 装甲内に貯蔵した圧縮粒子を一斉に放出しカタログスペックの三倍以上の性能を引き出す、最も単純でありながら最も効果的な単一仕様能力ワンオフアビリティ』

「つまりシンプルイズベストってわけ？」

『そついう事だ』

「ではまさかエクシアの全身装甲はフルスケイン」

『そつだ。本来なら粒子を蓄えるタンクとしての役割であり、装甲の粒子コーティングによる防御力は単なるおまけだ』

千冬姉たちの話を聞いていてどうしてもわからない事がある。

「千冬姉。ワンオフアビリティって、何？」

『この前授業で習っただろ。読んで字の如く唯一仕様の特殊能力の事だ。一つのコアに付き一つ、最もISと操縦者が最高の状態になった時に自然発生する能力のことだ』

「ですが、それは第二形態から発現するのでは？」

『そつだ。エクシアは既に第二移行セカンドシフトしている。藤原がエクシアの前身となったISを使い始めたのは3年近く前だ。第二移行セカンドシフトしているもおかしくあるまい』

「そんなに前から」

『そして第二形態セカンドフォームになっても単一仕様能力が発生しない固体の方が多ワノオフアビリティい。それを補うために特殊能力を機体製造段階で付加されたのが第三世代機、白式の零落白夜でありブルー・ティアーズの浮遊砲台であり甲龍の衝撃砲という訳だ。理解したか織斑』

だいたいわかった。でも一つ疑問が。

「あれ？ 零落白夜って確か千冬姉のISのその単一仕様能力ワンオフアビリティだよな。それがなんで白式の特異能力になってるんだ？」

『正確には白式の零落白夜は暮桜の単一仕様能力をシステム面で再現したものだ』

ふーん。

俺たちが話していると、通常の白と青に戻ったエクシアが降りてきた。

何にしてもこれで終わ

敵機再起動を確認！ 警告、ロックされています！

上半身だけ転がっていた 丸太担ぎ の大砲が最大出力形態に変形し俺達を狙っていた。

俺はためらいなく突っ込む。そして発射されるビーム。真っ白な視界の中、刃が装甲を切り裂く手ごたえを感じ、そして意識が途絶えた。

激突と天災襲来（前書き）

今月から職場が転勤になってしまったので思っていたほど出筆が進みません。

それと今回、独自設定が多いのでご注意ください。

激突と天災襲来

『ロックカイジヨ、ロックカイジヨ』

ハ口から通信が入り電子音声が出来た事を告げる。

その声通り、目の前のゲートがゆっくりと開いていく。すでにハイパーセンサーからの情報からスローネ3機からは生体反応がないことから全て無人機であることが判明している。

今、俺のエクシアには両肩のグラビカルアンテナがあつた部分と両手に計四挺のGNランチャーを装備したクアドランチャーモードとなつてそれぞれ砲門に粒子を充填していた。その後ろではセシリアさんが貸し出されたりボルバスターカのチェックとFCSの調整を行っている。

ゲートの外、遮断シールドをはさんで向こう側で一夏達を襲撃するガンダムスローネシリーズ。一体だけが戦闘し、他は上空で見物しているのがせめてもの救いか。だが、何故ここでスローネが出てくる？ 確かゴリラのような無人ISだったはずなのに、何故？ まさか俺の所為なのか。だとしても、対策を取ることは幾らでもできたのに、俺は理由もないのに識っている通り進むとばかり思っていて準備を怠っていた。俺の、所為だ。

『一夏あつ！！ 男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする！！』

設置してあるスピーカーから放たれる筈の声。

外ではアインがドライとドッキングしGNメガランチャーを展開する。一夏はツヴァイに阻まれていけそうにない。

ならば、射線をアインとドライの方向へ向ける。

「圧縮粒子前面開放。クアッドランチャーフルバースト……」

エクシアの前に4つの砲口からあふれ出た粒子が一つの球体を作り出す。

GN粒子の特徴の一つ、粒子ビームを束ねることによってその威力を数倍にまで高めることができる。クアッドランチャーはその理論を応用した技術だ。

「狙い撃つ!!」

トリガーを引き、一点に集中し威力が数倍に跳ね上がった粒子ビームは容易く遮断シールドを貫通した。

「エクシア出る!!」

「ブルー・ティアーズ、参ります!!」

破壊された遮断シールドより俺たちは躍り出た。

まず打ち合わせ通りセシリアさんのビットが先行し、ツヴァイにレーザーを照射。撃破することが目的ではなく、相手の足を止めて一夏たちを離脱させる事が目的だ。それは成功し、ツヴァイから引き離すことに成功する。

まずは厄介なツヴァイを破壊しようとしてGNランチャーを向けるが、砲門以外からGN粒子が吹きだしている。オーバーパワーか。内部で臨界値に達したGN粒子の力にGNランチャーが耐え切れなかったのだ。

「これだから試作品はっ!!」

毒づいて強制排除する。次の瞬間、GNランチャーが暴発した。

「せ、刹那！」

「刹那さん!？」

一夏とセシリアさんの声を聞くよりはやくグラビカルアンテナを再展開し、GNソードとGNブレイドを呼び出しする。右手にGNソードが、両腰にGNブレイドが瞬時に展開される。

爆煙の中から飛び出すとGNソードをソードモードに切り替える
と切先をスローネへ向ける。

「駆逐する……貴様らを、俺が……エクシアが……！」

俺の宣言を聞いてか、ツヴァイはGNファンングを射出し、アインもGNビームライフルとGNランチャーで参戦する。

やはりスローネたちの狙いは俺、いやエクシアのオリジナルGNドライブか。何はともあれ俺に集中したことでセシリアさんは一夏たちと無事合流できたか。なら、こちらは俺が終わらせる！

GNファンングの数こそ多いものの、素直すぎる射撃を避け、その合間に撃ってきたアインのGNランチャーを即座に展開したGNシールドとシールドに纏ったGNフィールドによって防ぐ。それをチャンスと見たのがGNファンングの数基が粒子ビームを固定したビームサーベルモードとなりピラニアのごとくエクシアに喰らいつこうとするがその直線的な軌道にあわせ、GNソードとGNバルカンで次々に撃墜していく。

8基あったGNファンングを撃墜したところで、チャージが臨界に達した。GNシールドを投げ捨てると両手でGNソードを眼前に構える。次の瞬間、俺は一瞬で亜音速領域を突破した。限界加速。身体がきしむ音が聞こえ、視界が一瞬レッドアウトを引き起こしてしまうがエクシアの生命維持装置により瞬時に安定させられる。

アインの粒子ビームが一発だけ当たるが、GN粒子によって強化されたEカーボンの装甲に弾かれる。無視してそのまま一直線にアインを打ち抜く。

速度を減速させ、遮断シールドに接触する前に旋回。遮断シールドギリギリを加速の余剰速度でターンする。

残り二機、ツヴァイは俺の方に向かってきたが、手負いのドライは一夏たちのほうへ向かっていく。そしてドライが存在する付近に煙幕が発生した。イザという時の為にセシリアさんに渡しておいた粒子攪乱弾だ。後はリボルバーバズーカとGNハンマーの破壊力があればどうにかなるだろうし、一夏と鈴もいるのだ。彼らを信じてドライの相手を任せて俺はツヴァイと向かい合う。

GNソードをライフルモードに切り替え、小口径の粒子ビームを連射するがそれはGNバスターソードに纏ったGNフィールドを盾にされて防がれ、そのままこちらに突撃してくる。

ツヴァイはこちらの攻撃に構わずGNバスターソードで叩き切るように振り回すがそれを左手で引き抜いたGNショートブレイドで受け止める。攻撃の瞬間、おそらくGN粒子の質量軽減効果を反転させ一時的に重量を数倍に増加させ破壊力を増そうとしたのだろうがそれはエクシアの質量軽減効果で再び重量を減少させたため一瞬だけで押されたかとおもうとそのまま薙ぎ払う。この質量軽減効果の反転はGNハンマーにも流用されている技術だ。

右手のGNソードを右腕に固定状態にすると、GNロングブレイドを引き抜き二刀流に構える。

ツヴァイはGNバスターソードとGNフィールドを盾にして防ごうとするがそれは甘い。GNブレイドはGNフィールドごとGNバスターソードを、それこそ熱したナイフでバターを切るかのように軽々と切り裂いた。

そのまま返す刀でツヴァイを切りつける。ツヴァイは破壊されたファンングコンテナを切り離し、蜥蜴の尻尾きりよろしく逃走しようとする。メーターを見る、圧縮粒子貯蔵量が100を超えた。なら

ば。

「トランザム!!!」

俺の声に答えるようにエクシアは一斉に圧縮粒子を放出し始めるとその粒子の色はルビー色に輝き、その装甲の色も粒子の影響で赤く染まる。

これがエクシアの単一仕様能力『TRANS-AM』。機体に貯蔵された圧縮粒子を全面開放することによってカタログスペックの3倍以上の能力をたたき出す。

赤い流星となったエクシアが残像を残しながら一瞬でツヴァイに追いつくとGNソードで切りつける。弾き飛ばされたツヴァイを追って今度は後ろ腰から引き抜いたGNダガーを突き立てる。続いてGNブレイドを引き抜くとすれ違いざまに何度となく斬撃をくりだす。そして地面に向けて打ち落とすとそれを先回りして今度は上空へ向かって蹴り上げる。再びツヴァイを追い、両手にしたGNビームサーベルを引き抜く。トランザムの効果により通常よりも出力が上がったビームサーベルでツヴァイを十文字に切り裂く。

「これが、エクシア……これが、セブンスードだ!」

破壊されたツヴァイが引き起こした爆発を背に、一夏たちの方を見る。どうやら向うも終わったようだ。

俺はトランザムを強制停止させるとゆっくり一夏たちがいる方へ降りていく。

なにやらチー姉と話していたようだが、突如一夏が飛び出した。その方向にいるのはGNランチャーを伸ばしたアインの上半身!?

粒子ビームごと一夏はGNランチャーを切り裂き、瞬間加速で接近した俺のGNロングブレイドが頭部から腹部にかけて串刺しにするが、すでに機能は停止していた。単なる暴発だと!?

「一夏、しっかりしろ！ 一夏！ チー姉、至急救護班を！」

『わかった』

鈴とセシリアさんが駆け寄り、数分も経たない内に到着した救護班によって一夏は運ばれていくのだった。

学園の地下50メートル。そこはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止した3機のスローネはすぐさまそこへ運び込まれ、解析が開始された。

室内は薄暗く、作業している千冬も真耶もディスプレイの光で照らされた顔は生気がないのではないかと疑うほどひどく冷たいものだった。

「スローネの解析結果が出ました。やはり藤原君が予想していた通り無人機：いえ、それどころかISですらありません」

解析結果が表示されたディスプレイを見た真耶が口にした言葉はIS関係の仕事に少しでも就いたものにとっては衝撃的なものだった。

スローネにはISに絶対的に必要なものの一つ、ISコアが存在しなかった。

ISコアは単なるエネルギー発生装置ではない。姿勢制御や絶対防御などの各種システムの調整、果てには操縦者の安定を果たす重

要な役割を持っている。それは一つ一つ個性があり、さらに意思とすら言えるものも少なからずあった。

ISコアはまさしくISの心臓といふべき存在だ。なのにスローネには心臓コアがなかった。

「動力はどうだった？」

「どれも損傷が激しく、おそらく腹部の円柱状のものが織斑先生が言っていた擬似GNドライブというものだと思います。それと」

「なにかあったのか？」

「いえ、ただ本来は人間が入るであろう腕脚部分に最新型バッテリーのパワーエクステンダーが敷き詰められていました」

「ということは通常の電力で粒子を精製していたと言うことか」

そう言つて千冬はディスプレイの向うに存在するスローネに視線を戻す。それは教師ではなく戦士の顔に近かった。

「それと操作方法は独立稼動スタンド・アロンだったようです。股間部分に制御ユニットらしきものが発見されました。ですが……」

一旦言葉を切る。ディスプレイには制御ユニットらしき物体のスクリーン画像が映っていたが、それはどう見ても機械には見えない。

「スクリーンの結果、内部には何らかの溶液が充満しているようです」

「わからなければ開けてみればいいだけだ」

「それはそうですが……」

シュンツ、と自動ドアが開くとひとりの生徒が入ってきた。ここ
に開けられるということはレベル4以上の権限をもっているという
事だ。

「解析進んでます？」

入ってきた生徒を見て真耶は納得した。

二年生を表わすリボンの色に口元を仰いでいる彼女のトレードマ
ークと言つべき扇子。

IS学園の生徒会長であり、自由国籍権を持ち現在はロシア代表
操縦者である更識楯無だ。対暗部用暗部「更識家」の当主であり、
学園長からの信頼も厚く、千冬や真耶と同レベルの権限が与えられ
ている例外中の例外だ。

だが、彼女と一緒に入ってきたもう一人の女性は誰なのだろうか？
年のころは千冬と同じくらいの二十代半ばだろうか。豊満な身体
を特徴的な白いスーツで包み薄赤色のジャケットを羽織り、腰まで
届く長い黒髪が大人の色気を放っているながらも顔立ちは童女のもの
とアンバランスだ。

でもなんだか見覚えがある、と真耶は首を傾げた。どこか、それ
も極最近に彼女に似た女性をちよくちよく見ているような気がする
のだが、それは一体誰だっただろうか？

「はい、みんなのアイドル・東雲亜理子、ここに」

無言の千冬が自動ドアを掴むと力いっぱい閉めた。

「待つて待つてえ！　ちーちゃん！　ちーちゃんから呼んだのにそ
れはないよー！」

自動ドアが閉められる直前、その隙間に靴を挟んで完全に閉鎖できなくすると扉を掴んでギリギリと少しずつ広げていく。千冬が押さえているにも関わらずに、何て馬鹿力だろう。

「その名で呼ぶな」

「おっけい、ちーちゃん」

数秒の沈黙をもって何度言っても無駄と悟ったのか千冬は溜息を一つつくと自動ドアを押さえていた手を退ける。自力で自動ドアをこじ開け女性は室内に侵入してきた。

「こ、ここは関係者以外立ち入り禁止ですよ、織斑先生？」

「ああ、心配ない山田先生。コイツは私が呼んだ。こんなのも私を知る中で唯一のGN粒子の専門家だ。学園長の許可もおりているから更識が案内したんだ」

「そついうことですよ、さあどうぞ東雲社長？」

「え……えええ！！？」

二人の言葉に目の前の女性を見回す。

しのめしやちよー、その名前に真耶も一つ心当たりはあった。

東雲亜理子。最近IS関連の業界でもよく話題にあがる人物だ。

今までもISのパーツや第三世代ISの特殊装備の発案などで話題にちらほらとあがる人物であったが、今年に入って二機の新型ISの発表により注目度は爆発的に上昇し各種メディアでも名前が取り上げられる程だ。一説には人嫌いでテレビの出演やインタビューを

全て断っているだとか。そんな彼女が経営する会社は

「こ、ここ、この人がC・B・社の社長さんなんですか？」

「そーだよー、私がソレスタル・ビーイング社の社長さんだよー、ハロー」

真耶の疑問に東雲亜理子こと篠ノ之束はおどけて答えてみせる。童顔という事もあるのだろうが、その仕草が実年齢より遥かに幼く見せる。

「やや、きみけしからん体してるねー。どれどれ、社長さんに見せてみな？」

「きゃああつ！？ な、なんつ、なんなんですかあつ！」

「ええい、よいではないかよいではないかー」

束が椅子に座っていた真耶に飛びかかった。その手はさっそく豊かな膨らみを驚づかみにしてはぐにゆぐにゆと形が変わるほどもみしだけ。

「た、助けて藤原くううん！」

とっさに助けを求めたここには居ない男子生徒の名前に反応し束の手がぴたりと止まった。恐る恐る真耶が目を向けてみると。

「どーしてそこでー、せつちゃんの名前がでるのかな？ かな？」

「い、いえ、偶然……たまたまですよ……それより社長さん、目か

らハイライトが消えてるような」

「嘘だっ！……！」

くわつと目を見開いてドアップにせまる束の顔に真耶も尻込みして怯えきってしまふ。

「この胸か！ この胸なんだな！ この胸なんだね！ この胸を使ってせつちゃんを誘惑しようとしたな！！ このおっぱい魔人めー」

「ひいいいい！！ で、出来心だっ たんですう……あふんっ」

「ええいつ！ このままお嫁さんに行けない体に調教してや」

「いい加減にしないかお前は」

真耶の服に手をかけ、本格的にコトにおよびそうになった束の後頭部をスリッパでスパコンと叩き倒す。

このままだとベッドの上でシーツに包まってしくしくすすり泣く真耶と、その隣でぷはーっと煙草をふかす束の図がリアルに想像できてしまいそうだった。

「うう、ちーちゃんの愛が痛いよー」

「そろそろぶざけるのも止める。山田先生、制御ユニットの解体を始めてくれ」

「は、はい」

脱がされかけた衣服を直した真耶がコンピューターを操作すると複数の機械のアームが取り外された制御ユニットを器用に持ち上げ、一本のアームから小口径のレーザーが発射される。レーザートーチが制御ユニットの装甲を丸く切り取り蓋を開けるように取り外すとごぷつ、と液体がぶちまけられぼとつと何かが落ちた。

「ひいひい!!!」

液体以外に入っていた中身の正体に真耶が悲鳴を上げる。他の三人もそれぞれ差異はあれど押し殺したような声を上げた。

「……山田先生、きつければ退室してかまわないぞ」

「お、お言葉に甘えさせていただきます……」

ふらふらと真耶は部屋から出るとおそらくトイレへだろう、一目散に走っていった。

「こ、これはこれは……」

「まったく、胸糞が悪くなる光景だよね。おっぱい魔人じゃないけどゲロりたくもなるよ」

楯無と束も各々と呟く。

彼女達の前にあるもの、制御ユニットの中にあつたもの、それは人間の脳だった。

つまり、制御ユニットの中には溶液に漬け込まれた脳が入っていたのだ。それは文字道理スローネの頭脳であつたのだろう。

「一体誰が……」

「そんなのは決まってるよ」

千冬の呟きに束が続けた。

「解析の結果を見る限り、この機体はスローネオリジナルそのものではなく量産型のスローネ・ヴァラヌスをベースに擬似GNドライブで動かすように改修、その結果人間が入るスペースがなくなったから、その代わりに脳味噌だけをいれて他はバッテリーにしたんだろーね」

ちらりと他の制御ユニットにも目を向ける。まだ開けてはいないが、中身はおそらく同じだろう。

「そして、スローネの設計図を持っているのは私とあの日盗んだコソドロコーレーくんだけ。私はこんなもの作る必要はないし、興味はないから……」

「亡国機業……」

「だろーねー」

少なくとも一介の教師と単なる社長の会話ではない。このふたり一体何なんだろうね？ まったく、山田先生が退出していて助かったよ。と楯無は扇子で隠した口元でそんな事を考えていた。

彼女も学園の裏側に属する人間であり、ある程度情報を与えられていた。この目の前にいる東雲亜理子と名乗る女社長はあのISを発明した天才篠ノ之束であり、各国が血眼になって搜索している人物だという事も事前に学園長より聞いていた。

最も、彼女も学園長も国際IS委員会に篠ノ之束の所在を報告す

る義務も必要もないのだが。

「それに、この脳味噌のことも心当たりがあるよ」

はい、と渡された写真をみて千冬は思わず絶句してしまつ。何事か、とひよいつと横から楯無も写真の意味を理解して目を見開いた。そこには、15才前後の織斑千冬が十人ほど写っていた。

「……これは、いった、い…何の、冗談…だ？」

「ざーんねーん、冗談とか合成とかコラじゃないよ。それは先日ヨーロッパ方面でユーレーくん達を追つてた時に見つけたのさあ。あいつらも面白いこと考えるよねー？ ブリュンヒルデの量産計画、確か プロジェクトM とか書いてあつたかな？ ちーちゃんの遺伝子データをベースに強化した遺伝子強化素体をむかしロシアと中国が研究してた強化人間、超兵機関だとかの技術で脳量子波を強化してるらしいよ」

おそらくこの制御ユニットの脳はその計画の不良品の再活用なんだろうねー、と付け加える。

ぐしゃりと千冬の手が写真を握りつぶした。

「……社長さん、もし会社が倒産しちゃったら更識ウチに来ませんか？」

「多分ないと思うけど一応考えとくよー」

楯無は言わずにはいられなかった。自分達が組織で懸命に調査しても手に入れられない情報をあつさりと単独で入手したのだ。これだけの腕を持つ人物が加われれば日本の諜報関係も随分充実する。それにISの開発者でありコアを唯一作れる彼女が強力してくれるの

ならこれほど心強いものはないだろう。

「むしろそうになったら国家解体戦争でも始めるか」

「…勝てる気がしないからそれだけは止めてくださいマジで」

「それと、お前さっき言った脳量子波とははなんだ？」

「おお、さすがちーちゃん良くぞ聞いてくれましたあ！ 脳量子波とは人間の脳が微弱に発信している量子的な電波のことさあ、特徴的には量子通信の電波に酷似してるんだ。これは一般的に男性より女性の方が格段に強くてね、それをコアネットワークの量子通信が受信してISは操縦者と擬似的に繋がるのさ、脳量子波が強ければ強いほどISとの親和性は高くなるよ。これがIS適性つてやつだね。これが現在私だけが解明してるISが女性にしか操縦できない理由だね。例外として脳量子波が強いせつちゃんといっくんだけが現在ISを使えるのさ」

「なら何で一夏はその脳波が強い？」

「脳量子波って言うてよー、それについてもある程度仮説はできてるよ。ちーちゃんといっくんは昔からせつちゃんちでお世話になってたでしょ？ そこで研究されてたオリジナルGNドライヴが発しているGN粒子を何年も浴びてたからちーちゃんもいっくんも脳量子波が強化されてたって訳さ。それとせつちゃんの脳量子波の量はブツ飛んでるよ、なんせ真理奈さんのお腹の中にいた頃から浴びてた訳だしね。本人が言うには強弱を調整できるんだって」

「……あのー、もしかして私たち、今トンでもないこと聞いてません？」

「もちろん今聞いたことは全部秘密にしといてね」

まるで今晚のおかずの内容を話すかのような気軽さでポンポン出てくる重要機密に楯無は開いた口が塞がらなかつた。

もしここにコアについて研究している科学者がいればきっと自殺したい気持ちだろう。

そして重要なのは、コアは脳量子波が強い人間なら性別は関係ない。そして男性は脳量子波は基本的に低いが後天的に伸ばす方法がある。そして最も安全と思われる方法が、IS学園にいる藤原刹那の専用ISエクシアに搭載されているオリジナルGNDドライブ。

亡国機業がどこまで知っているのかは不明だが、楯無にとっては頭が痛くなる問題だった。

(こりゃ早めに刹那くんを引き込む必要が増したみたいね)

その笑顔の下で色々と悪巧みを抱えながら。

「それより問題はいつくんの方だよ」

くるっと千冬の方を振り向いて束は続けた。

「いつくんは擬似GNDドライブで精製された悪性GN粒子の高圧縮粒子ビームを浴びた。確かにそれは白式が絶対防御と零落白夜によって大半は防げたけど、それでもエネルギー不足だったんだらうね、検査の結果テロメアの一部に損傷がみられたそうだよ」

テロメアは細胞分裂に必要な細胞だ。それが損傷したと言うことは細胞分裂が正常に行えない、つまり新陳代謝が行えず普通なら生きていくことはできない。

「……一夏は、あと、どれだけ生きられる？」

「そーだね比較対照がないから何とも言えないけど、何もしなければ長くて一年、短ければ半年って所かな」

「く、……どうにかならないのか？」

「ふっふっふっ、そんなのこの私に掛かれば一発さあー」

束が大きめのビンを取り出して千冬に渡す。中には大量の錠剤が入っていた。

「これは先生謹製のナノマシン錠剤さ。このナノマシンは服用すると若干だけテロメアを修復するの、でもナノマシンは約30時間で死滅して後は分解されてウンコと一緒に排出されるから一日一錠、決まった時間に飲ませてね」

「……………すまん」

「いーっていーって、私とちーちゃんの仲じゃない。それもいっくんは私にとっても弟みたいなものだからさー」

その錠剤を千冬と楯無は信じられない思いで見つめた。

今の解説通りであれば、この錠剤は使い方によっては人類最古の夢とも言える不老長寿すら可能になりえる。この錠剤が表に出てしまったらISやGNドライブ以上の火種にもなりかねなかった。

「さーて、もう深夜だよ夜更かしは乙女のお肌の天敵だね。それとちーちゃん、エクシアの一式パッケージを持ってきてあるから後でせっちゃん

に渡しといてね」

「ああ、わかったからさっさと帰れ」

「その、まえ、にー、せつちゃんの寝顔を見ててから帰るよー」

そう言っつてモバイルパソコンを取り出すと何処かへ接続し始める。

「なんと、なんとお！ このパソコンから全ての八口に接続して見ている光景を中継できるのさあ！ さあ、青八口ちゃん。せつちゃんの寝顔をうつせー」

「…後で白八口への接続方法を教えろ」

「おつけいちーちゃん、今度専用パソを送るぜ」

「あのー織斑先生？ そこはIS学園の教師として止めさせるべきじゃありません？」

千冬の要求にサムズアップして答える束に楯無が突っ込むが当然無視される。

そしてチビ青八口に接続されたモバイルパソコンのディスプレイにベットで横になって眠っている刹那の姿が映し出される。

「やあやあせつちゃん、きよーもいいねえ……………ん？」

ふと影が落ちる。気になってその方向に向けてみると、

「な、なな、な、なんじゃこの女アアマ！！！？」

刹那のベットに潜り込もうとしていたセシリアの姿があった。チビ青八口の視線に気付いて人差し指を立ててしー、とジェスチャーしている。

それも着ているのはスケスケのネグリジェと、寝る為の服装ではなく魅せるための服装だ。

その後、束に操られたチビ青八口が『ミトメタクナーイ』と叫びながらセシリアに体当たりするのだった。

一時の終焉、未来と過去と（前書き）

随分間が空いてしまってますみません。

東北に転勤して少ししたら地震で転勤先の会社は営業できない状態になってしまい、アパートに持ち込んでいた愛用のノートPCが御釈迦になってしまいました。

地震の時に目の前に天井が落ちて来た時は本気で死ぬかとおもった。それで実家のある関東に戻ってきたら今度は九州の方に転勤になってしまい忙しい日々を送っています。

そのため更新は亀以下になってしまいましたがご了承ください。

一時の終焉、未来と過去と

「う……………?」

全身の痛みに呼び起こされ、俺は目を覚ました。

なんだか状況がわからず周囲を見回すと、どうやら病院らしい。俺が寝ていたのはベッドの上だった。

カーテンが仕切られた空間は狭いゆえに息苦しさや安堵の両方を感じる。一見矛盾しているようなそれを、俺はぼんやりとした意識で感じながら枕もとのナースコールを手探りで探し当てて押した。数分もしない内に看護師さんが駆けつけると担当医を呼びに行った。

「気が付いたようだね、織斑一夏くん。おめでとう」

入ってきた男性は白衣を着ていることからおそらく医師だろう。でもサングラスをしている医者なんてはじめて見た。外人さんなのだろうか、ネームプレートにジョイス・モレノと書かれている。

「ここはIS学園近辺の総合病院だよ。君はこの病院に運び込まれたから三日間意識が戻らなかつたんだ」

三日も!? それじゃあ学園は? 刹那は? 鈴音は? オルコツトさんは?

「…………君の友達たちは全員無事だよ。まったく、今までもIS学園で怪我した生徒達が搬送されてきた事はあったが、自分から荷電粒子砲にむかって飛び込んだなんて君は何を考えてるんだい? I

Sの絶対防御も絶対ではない。君のISのエネルギーが尽きるのが一瞬早かったら君は今頃アノ世行きになってたところだそうだ」

そうか、みんな無事だったのか。よかった。

そう考えたら急に眠くなってきた。

「今保護者の方に連絡を入れよう。薬を処方するが直ぐに退院できるだろう」

疲労の所為だろうか、俺は引きずられるように眠りへ落ちていく。特に抵抗はなかった。心地よくベッドに横たわった。

スローネ襲撃より3日たった。一夏はまだ目覚めたという連絡は受けていない。

あの後、タバ姉から一夏の容態について連絡があった。悪性GN粒子により身体は蝕まれている、と。

それを聞いた時、俺の頭はハンマーで殴られたように揺らいた。

あの時、GNランチャーが暴発さえしなければ……いや、俺がスローネアインを徹底的に破壊していればこんな事にはならないはずだったのに。

今、IS整備室の目の前のテーブルの上にいるチビ白ハロの中には中破した白式の待機形態であるガントレットが納められている。損傷レベルCにまで到達しては自己修復の範囲を超え、チビハロたちでもメンテナンスできる状態ではないため今日本でオーバーホールされる予定だ。

「刹那」

声だけでわかった。箒だ。作業を中断して振り返る。
整備室に入ってきたばかりの箒がそこにいた。

「病院から連絡があったそうだ、一夏が目を覚ましたって。今千冬さんが迎えに行っている」

「……そうか、よかった」

それは心からの言葉だった。

「なあ刹那、この前の話…新型のスカウトの件だが、まだ大丈夫か？」

「俺の方から誘っておいてこう言うのもなんだが……いいのか？」

「ああ。あんなのは、一人だけ見ている事しか出来ないのはもう、たくさんだ……私は力が欲しい、一夏と一緒にいれるだけの力が……」

血が滲み出るのではないかと思うほど握り締められた手をそつと両手で包む。

「箒、専用機を持っていようと持ってあるまいと君はキミだ。力を求めることは決して悪いことではない、でもその理由を忘れてはいけない」

「刹那？」

「お前は素直に一夏だけ見ていればいいんだ。後は俺がやる」

「……ありがとう、刹那」

綺麗な笑顔で微笑む箒。

この笑顔を、こいつらを守りたい。俺の戦う理由が増えた。

「よし！ じゃあまずは来月の学年別個人トーナメントだ。優勝すれば誰も文句は言っまい」

やる気満々に手を吊り上げる箒を見ながら、何かが引っ掛かるような気がした。はて、何だったか？

「ふーん、そんな話があったんだー。ずるいなほつきー」

刹那と箒が話していた整備室の天井裏、整備用のダクトで蠢きながら聞き耳を立てている影がひとつ。

スタイリッシュな黒い忍者装束に身を包んで伺っていたのはのほほんさんこと布仏本音である。

普段のだぼつとした制服や着ぐるみパジャマではなくピタリとした服装のためか普段からは想像できない出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいるバランスの取れたスタイルがあらわになっている。

「でもC・B社のスカウトと新型かー、んーいいこと聞いたぞー。これも噂でひろめよー、っと」

微塵の音も立てずに素早く這って迷路のように入り組んだ整備用のダクトを迷わず移動していく本音。

彼女と姉の虚は更識家の従者であると同時に更にその裏側である忍者の家系。

対暗部用暗部の裏側、普段の彼女から創造できない事だがつまりは特殊スペシャルエージェント作業員なのだ。

彼女達は更識家を支えるためだけに幼い頃よりお手伝いさんとしての作法と同じかそれ以上に諜報術・暗殺術・薬学毒学といったものを徹底的に叩き込まれた。特に本音にいたっては幼くして布仏歴代の最高傑作と言われるほどの才能を持っていた。

普段一組の癒し系といわれるようなのほほんとした空気は幼い頃から叩き込まれた諜報術の一種、相手を油断させて情報を引き出す手段の一つとして身につけられたもののだが、本人はいたって気にせずそれが素となってしまうていた。

その日の内に、本音がこの一ヶ月少々の間に築き上げたIS学園全域に張り巡らされたネットワーク、通称『のほほねつと』に二つの噂が流された。

一つは「学年別個人トーナメントで優勝したら織斑一夏か藤原刹那と付き合える」、もう一つは「学年別個人トーナメントで優勝したらC・B・社にスカウトされて専用機がもらえる」といった内容だ。

普段であれば単なる与太話として片付けられてしまつところだが、正確性の高い『のほほねつと』の情報であり直ちに学園中に広まってしまう。げに恐ろしきはたつた一ヶ月で学園全域にわたるまで独自にネットワークを広げた本音か。

ちなみにこの噂を聞いた幕が絶叫してしまうのはしばらく後の話だ。

「お引越しです」

夜の自室でセシリアさんとお茶会をしているところに突然山田先生が入ってきて早々の一言。

ちなみにカップに注がれている紅茶を入れたのはセシリアさんだ。なんでもイギリスでは女主人が紅茶を入れてもてなすのが礼儀だからで母にみっちり教えられたのだとか。その所為か紅茶の入れ方は完璧だ。

「引越し？」

「誰がですか？ 山田先生が？」

「あ、いえ、藤原君がです。本来使用するはずだった教員寮の修理が終わったのでそちらにお引越しです。今日から同居しなくてもすみましょ」

ああ、チー姉にリフォームと言う名の破壊された部屋の修理が終わったのか。

「それじゃあ、私もお手伝いしますから、すぐにやっっちゃいましょ」

「あ、あの。それは、今すぐでないとならないのですか？」

セシリアさんの口から出た意外な言葉に山田先生も目をぱちくり

と瞬かせた。

「それは、まあ、そうですね。何時までも年頃の男女が同居というのも問題がありますし……」

「い、いえ、わたくしは……」

「大丈夫だよ、セシリアさん」

俺の言葉にセシリアさんは戸惑ったような顔を向けてくる。

「別にこれで学園から居なくなるわけじゃないし、何かあれば互いの部屋に行けば会えるのだしね」

「……そう、そうですね（これはきっと何時でも刹那さんの部屋に来ていいという事ですわね!）」

「話はまとまったみたいですのでさっさと用意してしましましょう」

そして三十分も掛からず引越す用意ができた。元々服や教科書参考書、仕事で使用するノートパソコンといった最低限のものしか持ち込んでいなかったためすんなりと終わった。

そして山田先生と、俺の部屋の場所を知りたいというセシリアさんと共に教員寮にまで来た。

ドアを開けると。

「……お帰りなさいませつ……ご、ご主人様……っ」

「おかえりなさい、あなた　御飯にする？　それともお風呂？
それとも、わ・た・し？」

そこには胸元が大きく開いた実用性より視覚性を優先した所謂コスプレ用のミニスカメイド服姿で顔面真っ赤にした布仏・姉と裸工ブロン姿の痴女…もとい生徒会長が。

思いつきりドアを閉めた。

「さて、今日はもう遅いから今まで通りの部屋で寝るか」

「そ、その方がよろしいですわね……そうしましょう」

信じられないものを見てしまった所為か固まっていたセシリアさんも俺の言葉で正気に戻ったのか同意する。その隣では山田先生があんぐりと大きな口を開けている。今なら俺の握りこぶしが余裕を持って入りそうだ。

「ちょ、まってまってまってえー！ー！！　せっかく私も虚ちゃんも恥を忍んでこんなに恥ずかしい格好してるんだからそんなスルーしないでええええ！！！！」

「で、ですからお嬢様！　私はこんな格好で出迎えるのは止めましようって言ったのに！！！！」

「さ、更識さんも布仏さんも何て格好してるんですか！　ここはIS学園の教員寮であってキャバクラや風俗店じゃないんですよ！？」

そろそろ夜も深くなる時間だと言つのにぎやーぎやー騒ぐ三人（内一名教師）。

流石に五月蠅かったのかパジャマ姿で日本刀を持ったチー姉が自室から出てきた。相当不機嫌なのかカチャカチャと何度も日本刀の

鯉口を切っている。

俺たちは揃って謝ると一旦部屋の中に退避するのだった。

フランス、某IS関連会社。

小じんまりした事務室で一人の中年男性がコンピューターと向かいあっていた。歳の頃は50代だろうが、無精鬚に眼鏡をかけたいかにも技術者ぜんとした男性だ。

彼の家族以外殆ど訪れる者のいないこの部屋に珍しくノックがかかった。男が開いてるぞ、と応えると十代前半の金髪の少女が「失礼します」とやや小声で言いながら入ってきた。

彼女はこの部屋を訪れる珍しい者の一人であって、この会社の非公式ISテストパイロットであり、そのIS適性値から国家代表候補としても登録されていた。

「おう、嬢ちゃんか。言つとくがR・R・カスタムダブルアール？はこれ以上コストを下げられんぞ。まったくあの益暗社長め、何が『生産コストを増やさずに高性能にしろ』だ、寝言を言うのも大概にしろって言うんだ」

「あ、あはははは……すみません」

「いや、嬢ちゃんが悪い訳じゃねえよ。現実が見えてない益暗社長がわりいんだ。ただでさえ第三世代機開発チームの方だけに金を回してるからな。政府から色々言われているのは分かるがよ」

「あの一、やっぱり第三世代機って難しいんですか？」

「まあ、うちは第二世代機の開発も遅れてたからな。第二世代といつても基本的に汎用性と量産性の向上に拡張領域バスロッドを増設しただけだから存外早く開発も進んだが第三世代機はインターフェイスを使用した特殊兵装が必要だ。その研究もノウハウもないんだから時間も掛かる。そのくせ益暗社長はプライドだけは一丁前だからな、以前あつた技術提供の話も蹴つたから相等時間がかかるだろうな」

「だから、なのかな…?」

「ん?」

「私、社長命令でIS学園に編入することになったんだ」

「ああ、イギリスのティアーズ型の偵察と情報収集か」

「それに中国の龍ロウ型のデータもついでにとって来いと」

「あの益暗社長もなりふり構ってないな」

「それだけならよかつたんだけど……」

「…まだ何かあるのか?」

「うん、実は男として通つてC・B社の新型ISエクシアを奪取して来いつて……」

「はあ……?」

男は最初少女の言った意味が分からずポカーンとしていたが、そ

の意味を完全に理解すると頭を抱えなくなった。

「今まで散々馬鹿だ馬鹿だと思っていたがここまで大馬鹿だったとは……性別詐称だけなら兎も角、そんな事したらフランスは世界から爪弾き者に……いや、それどころか戦争になるぞ……」

「それも政府までこの計画に承認していて……」

「頭痛がしてきた……」

二人揃って大きな大きな溜息をつくのだった。

これは、歴史に記される事などない挿話である。

(…この世界に……神なんて、いない)

損傷したISと傷だらけの身体に鞭を打って少女は廃墟となった町を駆ける。

テロリストに強奪された祖国の最新の第二世代IS奪還のため、

軍のIS操縦者養成機関の中でもトップの成績を収めていた少女が派遣されたのだ。少女は戦う為だけに創り出された存在であることから少女も他の軍人もそれが当然であり、成功すると信じていた。だがその予想は裏切られ、彼女の第一世代ISは無残にもボロボロとなっていた。

第一世代と第二世代の世代の壁はそれほど厚いものではない。基本的な性能はほぼ変わらず、違いは量産性と拡張領域バースロットの量による後付け武装コライザの多彩化だ。

つまり、その腕の差で少女は負けているという事だ。

「ハッ、見つけたぜクソガキ」

隠れた建物の陰から声が聞こえた上空に顔を向ける。

不調をきたし始めたハイパーセンサーが祖国のISを身につけた赤毛の女性の姿を何とか映し出す。

「元代表候補生のパトリシア・レモンサワー様相手にここまで粘るとは予想外だったがテメエの悪運もここまでだ」

相手は名乗りはしたがそれは偽名の可能性が高いと少女は踏んだ。名前があからさまに偽名臭い。

赤毛のテロリスト：パトリシア・レモンサワーは右手にアサルトライフルを展開するとその銃口を少女に向ける。

既に少女のISのシールドエネルギーの残りは僅か。精々防げるのは一斉射だろう、ISがどんなに最強の兵器であってもエネルギーが尽きれば良いのだ。銃弾は遠慮せず僅かばかりのISアーマーに守られていない少女の柔らかな肉体を貫くのは容易に想像できる。パトリシア・レモンサワーの意思をISのインターフェイスは正確に読み取りマニピレーターがアサルトライフルの引き金を引こうと力を入れようとした瞬間、少女は咄嗟に眼を瞑った。

戦場で目を瞑ると言う行為は死に値する行為であると分かっていたが、生物としての本能と反応が少女に眼を瞑らせた。

(これで終わる…？ 試験管の中で生まれて、人として当たり前前の事も知らず、ただ兵器として……？)

死を覚悟した瞬間、ダウン！ と音が響く。自分は死んだ、と少女は他人事のように思った。

だがそれは何時まで経っても訪れない。
代わりに訪れたのは、

「なんじゃそりゃあああ！？」

素っ頓狂なパトリシア・レモンサワーの叫びだった。

怪訝に思い眼を開けてみると上空にはアサルトライフルを右手のマニピレーターごと破壊されたパトリシア・レモンサワーのISが。その顔は遙か上空を睨みつけている。

少女が上空を見上げた時、不調の所為か若干砂嵐がかかったようなハイパーセンサーごしに、淡い緑色の粒子放出しハンドガンとシールドを持った全身装甲^{フルスキン}ISの姿があった。

「あたしはあつ！」

一撃がパトリシアの左腕を破壊し、

「スペシャルでっ！」

次の一撃がフィンスラスターを、

「二千回でっ！」

再び放たれた一撃が胸部のISアーマーを、

「模擬戦なんだよおおおお！」

半壊したISで落下するパトリシアにとどめとばかりに最後の一撃が撃ち込まれ、地面に落ちると同時に爆発した。

だが少女の眼は全身装甲ISから離せられない。

トリコロールカラーの装甲、人体を忠実に模したとも言えるどこか芸術的な形。背中のコーン型スラスタから放出している粒子がまるで翼のようで、

「てん、し…さま……」

ポロポロと知らずの内に涙がこぼれてくる。このような神々しいISを少女は知らなかった。

たとえ少女が世界中のISを知っていたとしてもこのISが何であるのか分からなかっただろう。

でも、たとえ神が居なくとも少女は天使が居ることを知った。自分を救ってくれた機械仕掛けの天使の存在を。

少女は何もかも忘れ、天使が立ち去るまでずっとその姿を見ていた。不意に吹いた一陣の風が少女のアッシュブロンドの髪をなびかせた。

『いいの？ さっきの目撃者を消さなくて』

少女が天使と呼んだ全身装甲ISのパイロットに個人秘密匿通信
フルスキ
で通信が入った。その女性の語調にはまだこの全身装甲IS…0ガ
フルスキ
ンダムの存在が世界に知られてしまっただけではないという意味合い
が込められていた。

「別に。俺のやるべきミッションは完遂した。それにあそこまで半
壊したISならばレコーダーも役に立つまい。それに、あのコを殺
す意味も価値もない」

『……ふーん、わたったよ。ふふふ……』

「…何がおかしい」

『うづん、うれしいんだよ。キミがまだニンゲンだつてことが確認
できて。さ、ラボに戻つといでー。GNドライヴのマッチングとア
ストレアの初期化と最適化をするから』
フォーメット
ファイティング

「完成したのか。だが正義の女神が、俺が使うのに随分皮肉だな。
アストレア
ネメシス
復讐の女神に改名するか」

『……これを設計して名前を決めたのはおじ様とおば様だよ』

「冗談だ。そろそろステルスモードに入るため通信終了する、GN
ステルス展開」

そして全身装甲ISは光学迷彩で空の中に解け込むように消えて
フルスキ
いった。

これは公式記録で初めてISを使える男子が発見されるより3年
ほど前の記憶だ。

一時の終焉、未来と過去と（後書き）

エンディングテーマは【儂くも永久のカナシ】でお願いします。

番外編 とあるしよっじょのものがたり（前書き）

はつきり言うと本編には関係ないので見なくても平気です。
これがネタだと理解できる人のみお進みください。
でわ

番外編 とあるしよじよのものがたり

少女は天才であつた、ゆえに周囲に理解されなかつた。少女の両親からも。むしろ親戚どことか両親からもこの子はおかしい、この子は気持ち悪いと影ながら言われ続けた。

次第に少女は学校へ通う以外は自室に引きこもり、一つの事に没頭するようになった。世界が自分を認めてくれるように、世界が自分を必要としてくれるようにと。

そしてある論文を発表した。それは後にISと呼ばれる機械の中枢の初歩技術に関する論文であつた。

だが、世間の目は冷ややかであつた。たかが女子中学生の論文、とろくに目を通さず少女の目の前で捨てるものや破り捨てるものばかりだつた。

幾度となく続いたそんな扱いに心が磨耗しすり減ろうとした時、その論文は一人の初老の科学者の目に止まつた。

『独創的で穴だらけではあるが、それだけに発展性があり面白い論文だ』

彼にかけられた言葉は少女にとって福音であつた。

それから少女は初老の科学者を 先生 と呼び、彼の家に足しげく通い彼や彼の息子夫婦と科学理論について討論することが日課となつた。そして少女は 先生 の夢を知る。

それは盛大であり、世間からは一蹴されて笑いものになつてしまふような滑稽な夢想であつた。

『争いを捨て宇宙に進出した人類が異星体とも真の相互理解を求めゆく』

彼の携わる宇宙開発関連、太陽光発電や軌道エレベーター理論、量子コンピュータの開発や量子通信の発案、外宇宙航行船の設計などそれら全てが夢へ向けての産物であつた。

次第に少女は彼の夢へ賛同する一人となつた。

そして考えた。現在の宇宙開発の進行状況から計算すれば軌道工
レベルターの完成までにも 先生 や他の賛同している科学者はお
るか最年少の少女ですら生きている間に目にする事は到底不可能な
数字だ。

そこで少女が目をつけたのが自分が発案したパワードスーツだ。
現在工事で使われている全高10mほどのワークローダーと呼ばれ
る作業機械が主流であるが、それが自分のパワードスーツに置き換
われば作業効率は数段に伸び安全性も比較にならない。

宇宙開発はパワードスーツが主流となる。そう考えた一同は少女
とワークローダーの開発者でもあったグレイス夫婦を中心に開発が
進められた。

最高で亜音速で飛行する推進力と宇宙空間での作業となるため操
縦者の身を守るバリアシステム、遠く離れた相手ともタイムラグ無
しで通信できる量子通信システム。

そして完成した二種類の似て非なるパワードスーツ。

少女が発案した中枢システムを導入し、後に白騎士と命名される
こととなるIS。 先生 が開発した半永久機関を搭載した0ガン
ダム。

ここで問題が発生した。

ISは何故か女性にしか反応せず、0ガンダムにいたっては 先
生の息子にしか反応しなかった。

これにより宇宙開発用パワードスーツはISに決定した。最も半
永久機関は量産ができないという欠点があり余程大きな問題がなけ
ればISが採用されることは彼らの中で暗黙の了解であった。

女性にしか操縦できないという欠点があったがそれは誰も問題視
していなかった。今なお宇宙開発関連の仕事は殆どが男性の職場だ。
そこに多くの女性が加わる事となり、女性の地位は男性と並ぶだろ
う。まさしく 先生 が夢想した人類が一丸となることではないか。
が、世間と言うモノの反応は少女達の予想の斜め45°上をぶつ
飛んでいった。

少女がテストパイロットの一人の言葉を聞いてちよつとした悪戯をしたのだが、それが各国の軍の目を引き従来の兵器の大半は廃棄されISが主流の兵器として使われようとした。

それはいい、まだ予想内だ。むしろ従来の兵器が減ったということとは 先生 のもう一つの夢である紛争根絶にも繋がるだろう。それにもしISを使用した戦争が起こるようならそれを止めるためのシステムがあり、少女も自分が引き起こした責任を取るために戦場へ飛び込むことも覚悟もしていた。

だが即座に国際IS委員なるものが立ち上げられ各国は女性優位の法律を次々と打ち出し、わずか一年足らずで世界は女尊男卑へと急激に変化した。

一年足らず。そう、ISの発表から一年もせずこの有様だ。

『何時だつて世界はこんなはずじゃなかった…』

それが開発に携わっていた科学者達一同の偽らざる本音であった。特に口を大きくあんぐりと開けたまま固まっている若草色の髪の青年科学者、E・A・レイ氏の顔を少女は生涯忘れる事はできないだろう。

それから少女は政府の保護という名の監視の下家族と離れ離れに隔離され、同志たちは人知れず世界中に散っていった。

少女は大人へと成長した頃、両親と妹を反ば人質に取られ（と言っても少女にとって妹は兎も角自分を理解しようともしてくれなかった両親については大して思い入れがなかった）政府に言われるがままにISコアを作っていたのだが、その合間の気晴らしにハッキングした政府のコンピューターのある情報を見て少女はブチ切れた。そこに記されていたのは少女の両親と妹を処分しようという立案。処分……つまり、抹殺という事だ。少女本人は政府により保護（という名の監視）されているがその家族の方は手薄だ。

そして目に入れても痛くないと言うほどに可愛がっていた妹を人質に取られれば誘拐犯に言われるがままになる自信が少女にあった。そうなる前に処分してしまえ、という計画だった。むろんそれは

人道的な面から実行されることはなかったのだが、少女にとってはこのようなことが間違っても立案されたことが問題であった。今はいいかもしれないが第二、第三と次々に出てくるだろう。

少女は完成した467番目のISコアを乱暴に机の上に置くと書き置きを残して何処かへ去っていった。

そして政府は嫌がおうにも少女の家族を死守しなければならなくなった。何せ人質は生きていなければ意味はないのだから。

そして少女は全てを受け入れてくれた初恋の相手であり 先生
の孫と再会し、名を変え、そして世界を再び変革させようとする。

全ては来るべき日の為に……

番外編 遅刻（前書き）

グロ、及び原作キャラのログアウトあり。

駄目な人はゴッバツク。

一応『学園までは何マイル？』と『クラスメイトは全員女？』の
空白間に位置づけされる話ですが読まなくても大丈夫です。

番外編 遅刻

3月31日、日本。

がらんとした高速道路を二台のトラックが走っていた。

IS学園へ向かって新型ISを輸送しているトラックを追うもう一台のトラックのコンテナの中にフランス製の第二代ISラファール・リヴァイヴを纏った赤毛の女性とアメリカ製の第二代ISアラクネを纏った黒髪の女性にISスーツ姿の十代半ばである少女の姿があった。

彼女達は前のトラックの護衛ではない。ファントム・タスク亡国機業と名乗る裏世界の秘密結社の構成員だ。

各国が嚴重に管理しているはずのISを、それも裏世界とはいえない一介の組織が複数保有するなどあるわけではないのだが、それが亡国機業ファントム・タスクが唯の組織ではないことを示していた。

彼女達の目的は前のトラックに積まれている新型IS。

ISを使える唯一の男性、織斑一夏の為に織斑千冬が依頼した専用機の強奪だ。そのために日本政府の一部を脅迫や薬といった手段で抱き込み道路を閉鎖。強奪しやすい環境を作り上げた。

後処理も抜かりない。今頃は一家そろって水入らず、ならぬバラバラにされ水の中。鮫の餌にでもなっていることだろう。

ISスーツ姿の少女、マドカはニヤリとほくそえんだ。

何せオリジナル姉が後継者の為に製作を依頼した機体なのだ。ならば出来損ないの弟よりより完成品である自分マドカが使う方が相応しいではないか。だからこそこの任務に立候補したのだ。

最強の戦乙女の遺伝子をベースに改良された中で最も優秀であり、さらに様々な強化手術によって強力な脳量子波を獲得した新人類イノベーターであるこの織斑マドカこそ最強だ。

オリジナル織斑千冬などもう既に足元にも及ばない、自分こそ真のブリュン

ヒルデだ。

『そろそろ仕掛けるわよ。準備はいいかしら？』

運転席でトラックを操縦している彼女達の纏め役でありこの組織の事実上のリーダーであるスコール・ミューゼルからの通信が入るとラファール・リヴァイヴの操縦者、パトリシア・レモンサワーがロケットランチャーを展開する。

一気に速度が上がり、前のトラックと並んだところでコンテナの側面が開くと同時に、運転席に向けてロケットランチャーをぶっぱなす。

マドカの眼には運転していた意外と歳若い男が咄嗟に荷台へ移ろうとする姿が見えた。

腑抜けた男にしてはいい判断だがそれでも遅い。運転席はロケット弾により吹き飛ばされ炎上し、コントロールを失ったトラックは蛇行運転をしながら中央分離帯を半分以上突き破ってようやく停止した。

「よっしゃーあ！ さっすがあたしい。これでスコールのチツスはいったただきだぜ！！」

「黙りやがれ。犯し抜いてからその脳天を吹っ飛ばして殺すぞ、ああ？」

喜びのあまり小躍りするパトリシアをアラクネの操縦者であるオータムは睨みつけるとそのISの名が示すとおり蜘蛛を連想させる8本の装甲脚を展開し、先程破壊したトラックに取り付くと軽合金のコンテナを力任せに引きちぎろうと装甲脚を突き立てる。

装甲脚の数本がコンテナを突き破った次の瞬間、オータムの身体は頭部から肩部にかけて転んだようにコンテナ突っ込んだ。

「おいおい、オータムう？ 何遊んでやがるんだよ」

「ち、違う！ 遊んでるんじゃない！ 中から何か引つ張って…
…あ？」

からかうように軽口を叩くパトリシアに対しオータムは必死にコンテナから離れようともがいていると、その背中には両刃の長剣が突き出していた。

その剣はコンテナの中から生えていて、シールドバリアーも絶対防御も突き破り、ISアーマーを通り越してオータムの胸元から背中にかけて貫通しているのをその場にいた全員が理解するのに十数秒かかった。

「な、なん、なん何で……何で絶対防御が機能しないんだよおおお
おお！！！！！！ つ！！！！？ がああああああああ！！！！！！
！?????？」

それに気付いたオータムが絶叫を上げると今度は剣がオータムの左脇腹に向かつて振り切られ、彼女は大量の血飛沫と内蔵の一部を撒き散らしながら壊れた玩具のように崩れ落ちた。

どんな素人が見ても即死と判断できてしまう傷だが、オータムはISの生命維持機能のおかげで辛うじてだがまだ無理矢理生かされていた。

普通の彼女からは想像できないような、顔は恐怖に染まってグチャグチャになりそうに涙を零し、鼻水を垂らしガチガチと歯を鳴らしながら「いやだいやだいやだ……しにたくないしにたくないしにたくない……」とうわ言のように繰り返している。そして恐怖のあまりに失禁してしまったのか血の臭いを振り撒く中に彼女の股間部分からアンモニア臭が立ち上り、その付近に広がる血の色を僅かな

がらも薄まらせる。

そんな彼女を無視して振り抜かれた剣は一旦コンテナの中に引込むと、今度は機械でできた指、ISのマニピレーターが裂け目を無理矢理広げる。

ベコンツ！ と不気味な音を立てて 卵^{コンテナ}の軽合金の殻を破り中より生まれたのは右手に拳銃と大剣が一体化した奇妙な武器を持つ人型。

一般的に見ればISの類であろうが、その姿は全身を隙間なく覆う装甲。その姿はマドカにこの国に伝わる伝説の鬼を連想させた。

鬼 が右手の大剣を折り畳むとその銃口を呆然としているマドカ達のトラックへ向ける。この状況に咄嗟に動いたのはスコールだった。フルアクセルで急発進し全速で逃げようとする。

「お、おいスコール！ オータムの奴はどうするんだよ！？」

「…もう、オータムは助からないわ。それより……っ！！」

突然急ハンドルを切られ、ISを展開していたパトリシアは兎も角生身のマドカは開いたままのコンテナから投げ出されそうになり必死にしがみ付く。乱暴な運転に抗議しようとした瞬間、その理由を理解した。

一瞬前までトラックが走っていた位置を一筋の粒子ビームが薙いだのだ。

弾速がほぼ光速である粒子ビーム回避できた事がマドカには僥倖に思えた。この攻撃をかわすことができたのは運だけでなくスコールの技量と咄嗟の機転によるものだろう。

後ろを見ると 鬼 コンテナから離れていないがは今度は左手に先ほどよりも大型のライフルを展開するとこちらに狙いを定める。ISならば可能性はあるがこんなトラックで粒子ビームをそう何度もかわせるものではない。マドカは何処か諦めと怒りの混ざり合っ

た感情に襲われた。

何故自分がこんな目にあわなければならないのか？ 自分は本来自分が手に入れるはずの物を取り戻しに来ただけなのに、何でこんな理不尽な目にあわなければならない？

鬼 がトラックに向けて引き金を引こうとした時、トラックの前に一つの影が躍り出た。

「あたしのスコールにいいいいいい！！！！」

パトリシアのラファール・リヴァイヴだ。彼女は両手を大きく広げてトラックを護ろうとする。

「手をつ、出すなあああつ！！！！」

そのまま彼女は、先ほどよりも太い粒子ビームに撃ち抜かれた。一気にシールドエネルギーが減少し、PICでも対処できなかったのか反動で吹き飛ばされる。

「いやああああああああ！！！！」

死を覚悟した雄叫びを上げながらクルクルと回転しながらコンテナの奥、つまり運転席側に衝突し止まった。そしてエネルギーが限界なのだろう、破損したラファール・リヴァイヴが量子化して消える。

何て運の良い奴、とまで考えたところでパトリシアの仇名を思い出した。

『不死身のレモンサワー』、その名が示す通り如何なる戦場でも、ISが大破しようと本人は全くの無傷でけろりとしながら帰還するというのだ。あながちこの強運も仇名も間違っではないのかも知れない。

「うおおおおおおおっ！ ってあれ？ あたし、生きて……る？ すいませんスコール、やられちゃいましたー」

そんな間抜けな声を聞いてマドカは表情が少しだけ崩れた。

既に 鬼 は見えない。 鬼 は新型ISを護るためにいたのだろつからコンテナから離れて追ってくるという事はあるまい。

ホツとした後、マドカはあの 鬼 に対して何時か復讐を胸に誓うのだった。

「敵対勢力の排除を完了。 IS学園と委員会及び政府に連絡」

マドカが 鬼 と呼んだIS、エクシアを纏っている藤原刹那は展開したまま通信を繋げていた。

無免許だが ただし偽名で登録された免許は持っている ト
ラックを運転していた刹那は早い段階で異常を感知していた。 平日の昼間とは言え高速道路に車一台通らないのは幾らなんでもおかしいと気付く。 そしてずっと追っていた後ろのトラックにも。

ロケットランチャーが発射された瞬間、刹那はコンテナ部分へエクシアを展開しながら飛び移り、そこで機会を待っていたのだ。

コンテナの横に転がる死体に目を向ける。 既に事切れており顔は恐怖に歪んだまま凍りついている。 それを見ても刹那はどうという感情も浮かんで来なかった。

哀れみも嫌悪も。 ただあるのは憎悪だけ。

蜘蛛の様なISを使う亡国機業の作業員、何となく薄れている原作知識とやらの中から当てはまるワードから推測できる。

こいつらは自分達の欲望の赴くままに様々なものを奪い続けてきた。それは兵器であり、人の命だ。そして、自分の両親も。

刹那の記憶に残っている両親の最後の姿は外国での学会と合わせた旅行中に吹き飛ばされ横転した電車内で自分を庇い命を失った母と、全身から血を流しながら自分を助け出しガンダムに託した父の姿。

「これ以上お前達に俺の大切なモノを奪わせるものか。その前に全て潰してやる……」

つぶやいてふと詭弁だな、と思った。

結局自分は両親を殺された事に対して復讐を、いや単なる八つ当たりをしたいだけなのだと。

それでもいい。俺は自分の道を進むだけだ。この先にあるのが滅びであつてもただ愚直に歩き続けるしかない。そして全てが終わった時に裁きも報いも受けよう。

ぐつと空を見上げた。ああ、こんなにも空って高かったんだな。

連絡を入れた学園と委員会の人間が来るまで刹那はずつと空を見上げていた。

番外編 遅刻（後書き）

こんかい おーたむ が ろぐあつと
彼女のファンの人がいたらごめんなさい。
しまし
た

機業強襲計画とその裏で、（前書き）

気付いたら過去最多となってしまうた。

この話は原作の一巻と二巻の間の空白期に当たります。

また、一部にネタが

機業強襲計画とその裏で、

「グラビー・ヴィオレントさんとルイス・ヴィオレントさん……」

空港の入国管理局の女性局員は提示されたパスポートと目の前のカップルを見比べていた。

苗字が同じという事は夫婦なのだろうか。

長い黒髪にサングラスをかけた男性の腕に金髪のスタイルの抜群な女性が抱きつくように腕を組んでいる。年齢もまだ二十歳になったかどうかの外見であり、おそらく新婚旅行か何かだろうと女性局員は判断した。

「はい、確認出来ました。ようこそドイツへ、良い旅行を」

返却されたパスポートを受け取るとカップルはそのまま腕を組んだまま空港の外へ向かって進んでいった。

二人ともモデルを思わせる整った容姿をしているため様々な視線にさらされながらもラブラブカップルぶりを振りまきながら人ごみの中へ消えていくのを女性局員は見送りながら溜息をついた。

いいな、私もあんな素敵なお彼氏と結婚したいな。でも今の世の中そんな男ってあんまりいないのよね……

女尊男卑世界になってしまったからだろうか、女性は働きやすい世の中になったのだろうか今の男性は自分を卑下するものばかりでいい男もすでに誰かのお手付きだ。

そこまで考えてもう一度溜息をつくと思いを改め次の入国者を呼ぶのだった。

「さて、皆そろっているな。ホームルームを始める」

「千冬姉、刹那がまだ…いてっ！」

一夏が退院した翌朝、週末最後の平日のIS学園1年1組の教室に出席簿ば舞う。それは狙い違わず一夏へ吸い込まれるように激突した。

「織斑先生だ。それと藤原なら会社の関係で公欠だ」

「え？ 何で？」

わからない、といった感じの一夏に千冬は大きく溜息をついた。

「誰の所為だと思っている。お前がこの前、白式に無茶をさせた所為でC・B・社本社でオーバーホールする事が決まったからだろうが」

え？ そうなの、といった感じの表情をつかべた一夏を見て千冬は再び溜息をついた。

「そういう事だから今日の分は織斑、篠ノ之、オルコットは後で藤原にノートを見せてやれ。ではまず今日の連絡だが……」

一人戻って来たかと思えばまた一人欠けたクラスをぼんやりと見ながら、セシリア・オルコットは昨夜の事を思い返していた。

「で、刹那さん。この痴女とは知り合いなのですか？」

一人用の教員寮の俺の部屋、そこでセシリアさんは俺と目の前にいる青髪の先輩：更識先輩をジト目で睨んでいた。

なお更識先輩は現在には出向かえの時の裸エプロン姿（最も見えにくいように白いマイクロビキニで申し訳程度というか最低限身を包んでいたから正確には水着エプロンなのだろうが）ではなく山田先生により強制的に制服に着替えさせられていた。その制服事体はこの部屋で着替えたのであろう置いてあった。

ちなみに布仏・姉は変わらずミニスカメイド服姿で部屋に備え付けられたキッチンで人数分のお茶を用意している。

「いや、知らないが識ってはいる。二年生の生徒会長、更識楯無」

「おおっ、見かけによらずチェックは早いのねー、おねーさんらしいわー」

「いや。学園掲示板に張られていた学園新聞にデカデカと写真が載っていた」

ガクツ、と演技臭く肩透かしをくらったようにずっとこけた生徒会長を無視して説明を続ける。

「更識楯無。IS学園の二年生で生徒会長。そして自由国籍権を持ち元日本代表候補生であり現在はロシアに移籍。専用機は最終調整中のため現在はない」

「生徒会長、それに自由国籍権……ですか？」

「自由国籍権とはIS適性Aランク以上のIS操縦者なら誰でも委員会に申請すれば受理される権利です。これを所持する操縦者は国家に左右されず自分の意思で所属する国家を決定したり、他の国家や企業のスカウトを受けることができるんです」

「元々は他国の優れた操縦者をスカウトするためにIS委員会が考え無しに打ち出した策だ。当初はモンド・グロツソ出場者全員に勝手に発行されたが、その後発生した引き抜き合戦の不毛なゼロサムゲームが発生したため現在では全て個人による申請式になっているが……代表候補登録時に国家の委員会からの説明はなかったのか？」

「ええ、まったく」

山田先生と俺の説明にセシリアさんは初耳だと頭と振った。

おそらくイギリス政府はセシリアさん、というより複数の会社を経営し潤沢な資産を保有するオルコットグループが国外に移ることを阻止するためだろう。これだと後で知って抗議しても、『調べない方が悪い』『聞かなかった方が悪い』といって碌な対応もされないだろう。

しかし、自由国籍権か。確か第一回モンド・グロツソ後にチー姉にももちろん発行されたのだがそれから毎日のように織斑家に各国からスカウトが殺到した。

多額の契約金でスカウトしようとするものなら可愛いものだが、中には強引だったり所謂詐欺紛いにも家族を人質にするような事をほのめかす者まであったそうだ。その辺はタバ姉やうちの両親が合法非合法問わず様々な手段で排除したのだとか。

「それと、生徒会長とは毎年学園の事実上の生徒最強の者になると決まっっていて、今まではこの時期であれば三年生であったが今年は例外として初の二年生の上、専用機持ちでない史上初の生徒会長でもある」

「付け加えるのであれば選挙は立候補制である上に、まずは教師陣全体の四分の三が可決しない限り選挙には出馬できません。思想的が偏っていたり過激な生徒が会長になったら場合によっては学園存続の危機に繋がる可能性も出てきますからね。それに教師や生徒全体での投票もあり、選挙の一環で行われる模擬戦で使用されるISも公平のため学園で用意している量産機を使用しますから、一概に最強の生徒が生徒会長になれるという訳ではないのです」

「大体わかりましたわ。で、その生徒会長が刹那さんのお部屋にある格好で？」

「いやー、ちょっと頼みたい事があってねー」

そこまで言うくと布仏・姉が差し出したお茶に口を付け「あー、虚ちゃんの入れたお茶はおいしーなー」といいながら一息つく。それに毒気を抜かれたか俺たち全員も出されたお茶を各々口を付ける。

確かにいい茶葉を使っていることもあるのだから、入れ方も上手い。

「知ってると思うんだけど。今年の末に日本とIS学園で採用されている打鉄に変わる次期主力量産機、通称『刃鉄』の採用機選考トライアルがあるのよ。それで国家や学園の方からも依頼が行くんだけど、君の方からC・B・社の社長さんに参加してくれるよう頼んで欲しいのよ」

「ああ。だが出展されるのは倉持技研の打鉄の後継機のみで採用はほぼ決定。トライアルは事実上デモストレーションにしかかかっていないはずだ」

「あら、何故ですか？」

「日本はIS学園の件もあってIS関係の国営企業は倉持技研のみだ、ISを生産している会社も全て倉持技研の子会社かライセンス契約している会社だけであってそれらもマイナーチェンジは兎も角モデルチェンジや新規開発する技術力も資産もない。その結果、日本のIS開発は競争なく倉持技研の独占一人勝ちの状態だ」

そう、IS学園の運営やその他の関係もあり日本のIS開発資金は他国に比べて低い部類に入る。

それは当然といえば当然であり、建前上は日本が資金を一切合財出資して運営することとなっているIS学園だが、学園の運営資金は中堅国家の国家予算とほぼ変わらない。IS委員会や各国からの寄付という形での運営資金が回ってこなければ今頃日本は経済破綻して中国の自治区かアメリカの51番目の州にでもなっていただろう。

そんなこんなで日本にはあまり予算に余裕がない。そのため国が支援する事ができる企業は一つのみとなってしまうのだ。

独占禁止法は何処に行った、と突っ込みを入れたいが生憎ISの一からの開発には基本的に途方もない予算が必要となる。

それも完成しても鳴かず飛ばすでは意味がなく、競争相手は国から援助されている大企業という事もあり一般企業の参入は殆どないといっている。

「その倉持技研のテストパイロットが確か4組の代表だったはずだが……」

「…うん、そうなんだけどねー……」

俺の言葉に生徒会長はばつが悪そうに頭をかきながら一呼吸置いて続ける。

「その試作機、『打鉄式式』ってすごい安直なネーミングなんだけど……完成してないのよ。まだ」

「あ、ありえませんか！ EUで同時期に予定しているイグニツシヨン・プランの提出機も既に大方出揃っているというのに……！」

セシリアさんの突っ込みで生徒会長も困ったような笑顔を笑顔で浮かべながら扇子で口元を隠す。

「元々完成は入学式に間に合うようにスケジュールが出来てたんだけど、パーツが八割がた完成したところで織斑君の件が起きたのよ。その解析の方に殆ど人員が回されちゃってね。その騒ぎも収まったから今度はC・B・社から提出されてくる二人のデータの解析にほぼ全員が回されて、今ではテストパイロットと他残った数名の研究員が細々と組み立ててる最中なのよ」

「粗方読めてきたぞ、露骨に競争相手を出すことで発破をかけようということか。それに例え失敗しても既に大々的に発表されているトライアルの名目は果たせる……だが解せないな」

「ん？ 何がかしら」

「日本人とは言え、現在はロシアに移籍しているはずの貴女が何故この国の事で依頼してくるのか……」

「それがね……その、倉持技研のテストパイロットの代表候補って、私の妹なのよ」

「妹？ それに代表候補という話は聞いてないが……」

「それが本人が専用機がないと格好が付かないとか言って代表候補就任を延長しちゃったのよ。だから肩書きは代表候補生候補って事になるけど。それに私だって一応愛国心ってやつは持つてるのよ」

「そう言う事か。だったら何故ロシアに？」

「んー、高度な政治的取引ってやつ？ それにロシアの第三世代機にも興味あつたんだけど失敗したかなー？ あのC・B・社が今年になって新型を3機も発表するんだもん」

何気なく笑いながら応えているがまだ一部の人間しか知らないことをさらりと暴露していたりする。

山田先生は気づいていないようだ。がセシリアさんは何か今の言葉に違和感を感じたのか小首をかしげている。

そんな中、生徒会長はというと涼しい顔をしながら「引き受けてくれる？」と書かれた扇子で扇いでいる。

「……わかった。とりあえず俺の方からも頼んでみるがあまり期待しないでくれ。うちの社長は結構な気分屋で興味のある事は寝食を忘れるほど没頭するが、逆に興味のない事は完全に無視するタイプだ」

「うんうん、分かってるわ。とりあえず言ってくれただけでいいわよ。それで、もうお願いしたいことがあってねー」

そこで一旦区切ると彼女は、生徒会に入りなさい、と宣いやがった。

そんなやり取りの翌日、まんまと偽名でドイツへ入国した俺たちは郊外のビジネスホテルにチェックインした。

入国時に使用した『グラীব・ヴィオレント』と偽名の書かれたパスポートをベットのの上に放り投げる。このパスポートなど全てタバ姉が用意したものだ。

現在俺は変装用に付けていたウィッグとサングラスを外し、着ていた服も黒皮の上着とズボンから擬装用ISスーツに着替えていた。

この擬装用ISスーツとは、俺の正体がばれにくいよう胸部に特殊シリコン製のパットを入れた、いわば女装用のISスーツだ。箒はもちろんセシリアさんほどではなくともそれなりの胸に違和感あつて仕方ない。あ、今度鈴にお土産に持つて行こうか。

その上にジャンパーを羽織つて持ち込んだモバイルパソコンでフレシユテから送られて来た情報を見ていた。

フレシユテ。それはC・B社の地下組織であり、対亡国機業戦において俺たちに情報収集や戦闘支援を行っている非合法の別働隊の事だ。

送られて来た情報の中に今日の目標の詳細なデータの他に先日イギリスのIS研究所より独断で秘密裏に亡国機業に新型ISが譲渡されたとの報告があつた。イギリス政府に対しては強奪されたという報告を行っている。

その譲渡された新型IS、セシリアさんのブルー・ティアーズの姉妹機であるサイレント・ゼフィルスのデータも添付されていた。

姉妹機という事もあるがやはり特殊レーザー砲を搭載したビット

対応機。主武装は攻防一体のシールドビットが6基と、実弾とレーザーの撃分けができる銃剣か。

ブルー・ティアーズが試験機とすればサイレント・ゼフィルスは実戦対応機という所だろう。稼働効率上昇の為にビットの制御はコンピュータ制御が主として、脳量子波によるコントロールは最低限になっており1号機に比べてそれなりに使いやすく高性能な機体だ。

シールドビットにC・B・社で現在開発中の同名武器のようなアサルトモードがないだけマシか。

しかし、この情報が正しければEUはフランスやイタリアなどの一部を除いて亡国機業の配下に入った事を意味している。今までよりやり辛くなるな。

その思考の中、微かに聞こえていたシャワーの音が聞こえなくなった。

「ふうー。せつちゃんお待たせー、やっと色が落ちたよー」

バスルームの扉が開きタバ姉が出てきた。先ほどまで髪を金髪に染めていた染髪料を洗い落としていたのだ。

チラリと視線を向けると裸体にバスタオル一枚のタバ姉の姿が。他に誰もいないのをいい事にグラビアアイドル顔負けの丸々した大きなバストも、ほっそりしたウエストも、所謂安産型のヒップをさらけ出したまま湿った黒髪を拭きながらこちらへゆったりとした歩みで向かってくる。

何時もの事なのでパソコンに視線を戻す。昔から何度も言っているのだが無駄なのもう言わないでいる。

こついつのを烏の濡れ羽色というのだろう。生粋の日本人としてドキリとする反面、こんな無防備な姿を見せられて自分の事を男ではなく弟程度にしか見られていないのかという思いに少しがっかりした感覚を覚える。

「んー、何見てるのーお？」

「フェレシユテからの連絡だ。これでイギリスも亡国機業に付いたと見ていいだろう」

タバ姉がベットに飛び乗り、背中から抱きつくように首に両腕を回す形で肩越しにパソコンを覗き込んでくる。髪から臭い立つシャンプーのいい香りが鼻腔を擦る。

……いい加減、背中にその立派な物を押し付けなくてくれ。前世とあわせて精神年齢はタバ姉よりも上なのだが、身体は健全な青少年のため色々と反応してしまうから。

少しどきまぎしながらもそれを何とか顔に出さず対応する俺にタバ姉は何時もの調子で俺をベットに押し倒すように馬乗りになつて話しを続ける。

「ふーん。それよりもせつちゃんはいいの？ エクシアが大々的に発表されたからせつかく代変機にG R Mガルトムを用意しておいたのに、それをはるちゃんにあげちゃって」

「タバ姉がフェイスマスクを付けるのを嫌がったから仕方ないだろ。あんな頭部モジュールを見られたら俺たちの所属が一発でもらばれだ」

そう、タバ姉は『格好いいのが台無しだ』と言ってフェイスマスクを取り付けるのに反対したのだ。そういえばアストレアやエクシアにフェイスマスクを装着した時も散々嫌がってたな。

でも、全身装甲フルスキーンの上に露骨なデザインでは俺たちの関連性を疑う者も出てくるだろう。早めガルトムにG R Mの頭部も変更させないと…

予断であるが、その後G R Mをベースに再設計された量産型のガ・

シリーズの頭部モジュールを流用して俺が無理矢理擬装する事となるのだが。

「せつちゃんがそう言うなら仕方ないから頼まれた通りに作って来たよ」

そう言うつとベットのの上に無造作に転がっていたペンダント、待機状態のISを俺の手の上に置く。

「でもそんなのでいいの？ 急だったからこの前たまたま回収した機体の装甲を取り替えて言われた通りのパーツを取り付けたけど、はつきり言つて機体性能はオリジナルと殆ど変わらないよ」

「別に、作戦通りに行けば第一世代機だろうと何だろうと構わない。もし失敗しても…」

「そこは操縦者次第でどうとでもなる？」

「そついう事だ」

そこまで言つた所で時計のアラームが鳴る。

ミッション開始時間を告げる音だ。

「よし、それじゃあ行くつか」

ベットの上に衣服と一緒に置いたままになっていたウサミミカチユーシヤを装着したバ姉はベットから飛び降りてバスタオルを放り投げる髪をかき上げる仕草を取ると同時に専用ISラジエルを展開する。

全裸だった肢体は一瞬で白いISスーツと青いISアーマーに包

まれ、その姿は天使もしくは戦女神を思わせるものへと変貌した。

「ああ、さっさと行こう。俺も明日の朝までには日本に帰らなければチー姉が単位をくれそうに無い」

軽口を叩きながら、いつものエクシアでは無く先程渡された別のISを展開する。

フォーマット フィッティング
元が量産機であるため初期化と最適化も必要ない。

俺の身体は黒いISアーマーを纏う。ベース機と同じく胸元や腰部にもISアーマーが展開し、仮面のような大型センサーマスクを装備したフルフェイスヘルメットが顔を覆い隠す。これで俺の正体は一見では男と判別する事はできまい。

「それじゃあ行くよー、GNステルス展開！ お空のデートにレッツらゴー！」

俺たちはGN粒子を利用した光学迷彩 クルザー ただし戦闘機動を取る
と迷彩が追いつかないため今は移動だけの巡航状態だ を展開し
窓から飛び立った。

ドイツ軍のある基地にけたたましく警報が鳴り響いていた。

ISの誕生から久しく警報が鳴るのは訓練の時のみだったが今は状況が違い訓練ではない。本物の襲撃だ。

今までドイツ軍基地には何度か謎の侵入者が破壊工作を行ったという情報が公に伝わり、数少ないISでカバーできるよう小隊ごとに分散して各基地に駆けつけられるよう配備され厳重警戒がしかれ

ていた。

そしてこの基地にはたまたま、イナクトのみとは言え三機のISが配備されていた。

『未確認機、レンジ2より接近！ 識別信号なし、目視確認、天使です！』

『IS小隊、目標と接触します！』

基地司令部のモニターにタイヤの無い全長3メートルほどのバイクの様なマシンに跨る天使を思わせる翼を持つ青いISが映し出されている。

おそらくバイクの様なマシンはIS用長距離輸送機の類であろう、とクラリツサ・ハルフォーフは考えた。

IS用長距離輸送機は各国に配備されている、名の通りISを長距離に派遣するためのマシンだ。ISの欠点の一つである活動時間の問題から軍用に開発されたものだ。

そもそもクラリツサはドイツのIS配備特殊部隊「シュヴァルツエ・ハーゼ」の副隊長であり、専用機である第三世代機シュヴァルツエア・ツヴァイクの操縦者であったが出撃できないでいた。

そもそもシュヴァルツエア・ツヴァイクはつい数日前に予備パーツにより修復が終わったばかりであり、今日は慣熟プログラムのためたまたまこの基地に来ていただけであって、自分も出撃しようにも基地指令より「当基地所属のIS操縦者達は全員がプロです。子供少佐のお遊び部隊に出てこられては取れる連携も取れませんよ」と皮肉たっぷり言われ出撃を拒否されてしまった。

モニターの中では天使がバイク状のマシンから離脱すると右手に以前も見た大型ライフルを展開するが、死角をカバーし合い波状攻撃をかける三機のイナクトに翻弄され、その火力を活かせられず、離脱しようにも出来ずにいた。

息のあつたフォーメーションにクラリツサは思わず小さな溜息をつき、できればこのような操縦者達がうちの部隊にも欲しかった、と心の底から思った。

基地指令にも指摘された通り「シュヴァルツェ・ハーゼ」の隊長は若千十四歳の小柄な少女であり、子供隊長と言われても仕方ないこれもISの普及による弊害というものだろう。

問題は彼女が大のIS至上主義者であることだ。選手としての実力はあるが軍人としてはどうか、と考えると疑問が残る。

一言で言えば彼女は戦い方が下手なのだ。今までが全てISの性能による力技でどうとでもなってしまったのと、彼女が憧れる臨時教官が原因なのだろう。

その上、「群れるのは弱いものがする行為だ」と公然と言い放ち部隊内ですら連携を取らず単身突撃し、クラリツサたちはそのフォーローに回っている上に今まで大きな戦闘も無かったことにより彼女は無事なだけだ。以前天使にやられた時もこちらは三機もいたのに連携を取れずその隙を突かれて次々に撃墜されたのだ。

もし彼女が今のまま国家間戦争アケレスが起きれば真つ先に戦死するだろう。何故なら敵は今まで仮想敵アケレスを務めていたペイント弾を搭載した戦車や戦闘機ではなく、こちらと同じISなのだから。

その子供隊長はというと、現在日本へ向かう飛行機の中だろう。

『織斑教官を説得しドイツ軍に復隊させよ』と軍部からの特別任務が下つたとの事で彼女は喜々として修復されたばかりのシュヴァルツェア・レーゲンを持ちIS学園へ旅立つたのだ。「織斑一夏を排除し、織斑教官を説得するのだ」と言い残して。

多分無理だろう、とクラリツサは思う。彼女は大会二連覇の偉業を邪魔した織斑一夏を怨んでいるようだが、そもそも彼が誘拐されなければ織斑教官はドイツに来るはずがないのだ。教官がドイツのIS部隊教官となつたのは取引であり、教官にとっては単なる仕事であり隊長の事も気にかけてはいたが教え子の一人でしかなく、それ以上でもそれ以下でもなかったはずだ。

そしてIS学園は一応ではあるが外部からの影響を受けない治外法権のはずだ。そこで働く教師はいわば世界に貢献する共通遺産と認識されてもおかしくは無い。そんな所に一国が抜け駆けして引抜を行うなど、全世界から糾弾されかねない。

それに排除すると言っていた事も気になる。例えあの子でもそんなこと……しそうだから怖い。大会二連覇を投げ捨てても救出に行った大切な弟を傷付けられようものなら、教官は再びドイツの地を踏む事になるだろう。ISを纏い単身殴りこみという形で。

その対象、織斑一夏の立ち居地も重要だ。何せ彼は『まだ世界で二人しか確認できていない男性のIS操縦者』なのだ。その彼を殺したとでもなれば軍籍剥奪程度ですら済むまい。

せめて織斑教官に連絡しておかねばなるまい。そこまで考えた所で思考を再びモニターに戻した。

モニターでは今でも天使は三機のイナクトに阻まれ手を出せないでいる、という状況だがどうもおかしい。

天使は散発的にライフルで反撃するだけで特殊武装を何も使用していない。撃墜されたシュヴァルツエア・レーゲンのレコーダーから解析した結果、天使にはイギリスのティアーズ型に似たビット兵器とISを麻痺させるウイルスのような兵器が搭載されている。それもビット兵器は操作しながら自身も自由に行動できるためティアーズ型より完成度は上と見られている。

それをまだ使用しないのはおかしい。それに自分が戦った時に感じた天使の操縦者の実力なら既に一機を落としていてもおかしくないのに……

そこまで考えて別の疑問が浮かんだ。

何故天使は今回に限って外部から堂々と襲撃してきたのか。

今までの手口からすれば彼女は軍内部に単身侵入し、何らかの施設を破壊して離脱して行くのだ。そして何の施設が破壊されたのかは重要機密として公表されていないが、一説には秘密工場とも違法研究所だとの噂すら流れている。

何かがおかしい。再び全てのモニターを注視していたクラリツサは気付いた。天使が乗り捨てたIS用長距離輸送機が速度もコントロールを失わず、真つ直ぐこの基地を目指しているのだ。

空になった後ろ腰のGNコンデンサを排除して内部に仕掛けておいた機密保持用の爆弾で爆破、新たにGN粒子が満タンに入っているGNコンデンサを展開し接続する。

東は三機のイナクトからの攻撃をかわしながら無造作にライフルを撃った。録に標準もしていないのに際どい当て方をするあたり、彼女の腕の差だろうか。

作戦はうまくいった、とバイザーの下ではそく笑む。彼女の仕事は基地のISを引き付ける囷だ。これだけ距離が開けばもうこちらの勝ちだ。

その時、基地から四機目のISが出撃した。少しは頭の回るのが居るじゃないか、と感心する。

今、目の前で相手しているような量産機ではない第三世代の試作品だ。前にもどこかで見た事があるような気がした。

ハイパーセンサーが感知したデータから瞬時に解析される。

ISネーム『シユヴァルツェア・ツヴァイク』。ドイツのシユヴァルツェアシリーズの2号機であり、接近戦重視の1号機に対して中距離支援を目的とした改修が施されている。主とした変更点はワイヤーブレードの数を減らし、その空いた容量に一般的なIS用銃^{スペース}火器を充実させたタイプだ。

東の頭の中で電球が閃いた。今刹那が使用しているISのベース機をゲットした後に戦った部隊のものだ。

数の差を活かせられず遊び半分の自分が全機撃墜した無様なチー

ムだ。あれじゃあIS学園の2年生か3年生のほうか余程連携が取れるんじゃないかな、と思った事が記憶に残っていた。

『黒い奴はこっちで対処する。タバ姉はイナクトを！』

コアネットワークを通じて刹那から通信が入ると同時にバイク状のIS用長距離輸送機の機首部から大口径のプラズマカノンがぶつ放された。シュヴァルツエア・ツヴァイクは辛くも回避するが主武装であるレールカノンを失ったうえ、進路を空けてしまいそこをIS用長距離輸送機が縫うように突っ込んでいく。

この行動でイナクトの操縦者達も東の目的に気付いたのか反転して基地へ戻ろうとするが、そうは問屋が卸さないとばかりにラジエルのGNプロトビットが彼女達を取り囲む。

「機体の性能差が、戦力の決定差で無くとも重要なファクターであることを教えてやる！」

何処かで聞いたような、でも微妙に違う台詞を吐きながらイナクト達に向け十の砲門が火を吹く。

ビットと本体からの絶え間ない粒子ビームの嵐にさらされイナクトはなす術なく次々と撃墜されていく。

「怯えろっ、竦めっ、ISの性能を活かせぬまま、死んでゆけえ！
殺しはしないけどね」

そして、最後に放ったGNロングビームライフルの一撃が三機目のイナクトを撃墜した。

天使事体が囹であることに気付いたクラリツサは基地からの制止を無視して出撃した。

彼女の目的はIS用長距離輸送機を直接基地へぶつける事だと思っただけからだ。その証拠にまだ天使にコントロールされているのだろうIS用長距離輸送機がこちらに気付いたのか速度を上げた。

仮に燃料を満載したIS用長距離輸送機が基地に直撃すればそれだけで基地の大半は使い物にならなくなるだろう。

天使の目的が、何故基地を襲撃するのはわからないが今はまず迎撃を優先し、進路を塞ぐように空中に止まる。

右手に展開したレールカノンを手で支え精密標準を取った時、IS用長距離輸送機の機首の一部が開くと大口徑の砲門が顔を出し暴力的なまでのプラズマビームが放たれた。

咄嗟に構えを解いて回避する。機体は無事だがレールカノンの砲身の一部がプラズマビームによって破壊され使い物にならなくなってしまう。IS用長距離輸送機はクラリツサの脇を抜けてさらに基地へ向かって加速する。

「く、行かせるものか！」

クラリツサは両手にアサルトライフルを二挺展開すると瞬間加速イグニッションブーストを使いながらIS用長距離輸送機を追撃する。が、

「な、シールドバリア!? まさか、これはっ!?!」

IS用長距離輸送機に向けて放たれた銃弾は見慣れている障壁によって弾かれたのだ。

その障壁の正体はISに搭載されているシールドバリア。

確かにシールドバリアはISアリーナなどにも採用されているも

のだが、まさかこんな物にまで搭載しているとは。

確かにシールドバリアーの流用技術はIS用アーリーナなどに採用されているが、その維持するエネルギーは施設規模のジェネレーターが必要となるのだ。それより小型のものとなればISコアによる発電能力だけだ。これがISが現行最強の兵器である存在理由の一つなのだ。

クラリツサはその事から最悪の可能性を予想した。そしてそれはもの見事に的中してしまう。

IS用長距離輸送機の装甲が次々に剥離していき、その中にいたモノが姿を現した。

「フラッグだと!?!」

アメリカの第二世代機である黒いISフラッグだ。

フラッグはそのまま基地へ向かって加速する。基地からも機銃による対空砲火が放たれるがそんなものはISに対して牽制すらならない。

クラリツサはフラッグをすぐさま追おうと目の前に飛んできた剥離し飛んできた装甲を手で弾こうとした時、それは爆発した。装甲内に取り付けられていた証拠隠滅用の爆弾が起動したのだ。

「追加装甲による高機動形態にパージした装甲を相手に当てて爆破なんて、プリンス・オブ・ダークネスですか、あなたは!?!」

昔見た日本のロボットアニメの劇場版を思い出して叫んでしまう。だがその効果は靦面だった。クラリツサは爆発に巻き込まれフラッグとの距離は更に広がってしまったのだ。

フラッグは対空砲火を左手のディフェンスロッドで弾きながら迷うことなく格納庫の一つへと向かう。クラリツサは爆発から持ち直したシュヴァルツェア・ツヴァイクを駆ってその後を追う。

格納庫までたどり着いた時、ハイパーセンサーにはイナクト部隊のシグナルロストを伝えた。

これが示す意味はただ一つ。部隊の全滅、だ。ISのバリアには絶対防御機能があるがそれはあくまで保険的なものだ。撃墜されて落ちれば怪我を、場合によっては首の骨を折って死亡といった事例も少ないが報告されている。

格納庫の中には既に逃げた後なのだろう整備員の一人もいなかった。侵入したフラッグも含めて。

だが、その床の一部が破壊されそこから地下へ続く通路が開いていた。

「何だ、これは……？ 記載の無いエリアだと？ 施設整備用でもないな。建造時のミスか、それとも……」

考えても何故このような隠し通路としか考えられないものがあるのか。

おそらくさっきのフラッグはこの通路に侵入したのだろう、クラリッサはこの通路が施設整備用の極秘通路であることを祈りながら進んでいくがその期待は大きく裏切られた。

「ま、まさか自軍の防衛設備に攻撃され、それを撃破しなければならぬとは……」

隠し通路に潜入から数分後、クラリッサは疲れたような溜息を吐いた。

その周囲に存在するのは破壊し尽くされた侵入者排除の為の通路の天井や壁に存在した重機関砲のスクラップ。これを破壊したのは他でもないクラリッサ本人だ。

クラリッサのISであるシュヴァルツェア・ツヴァイクはドイツ軍の信号を発している訳だが、普通であれば停止するはずの警備が

止まらず攻撃をしてきたのだ。

アクティブ イナードナル キャンセラー

A ・ I ・ C で防ごうにもその数は多く、シールドエ
ネルギーの関係もあり無視して突っ切るといふ選択肢の無かったク
ラリツサは一つ一つをアサルトライフルで破壊しながら進んでいっ
たのだ。

壁を良く見ると跳弾の痕跡が見られた。おそらく先に潜入したフ
ラッグはディフェンスロッドで弾きながら強引に突破して行ったと
いう事だろう。

「普段であれば使い所に困る道具だが、このような狭所での強行突
破には使えそうだな。今度装備申請を出しておくか」

気分をまぎわらせる為に一人軽口を叩きながら慎重だが急いで進
む。

やはりこの施設はおかしい。地図に載っていない事もそうだが防
衛設備もそうだ。それにジャミングでもかかっているのか通路に入
ってから基地司令部との連絡も付かなくなってしまっている。

「つまり、襲撃される基地にも何らかの理由があるという訳か」

まさか、噂が本当だと言うわけでもあるまい。

しばらく進んだところにある閉鎖された扉の前で佇む黒いフラッ
グを発見した。右手には銃身が剣身なのか剣身が銃身なのか判別に
困る武器が展開されており、左手は壁のコンソールに突き出されそ
こから数本のコードがコンソールに突き刺さっている。

「動くな！ ここは何なんだ、お前はここで何をしている！」

クラリツサはアサルトライフルの標準をフラッグにあわせるがフ
ラッグの操縦者はフルフェイスヘルメットとセンサーマスクによっ

て詳しい表情は見えないが気にした態度も無く左手とコードをコンソールより手を離すと扉はゆっくりと厳かに開きはじめた。

『時間が無い、見るのは勝手だ』

ボイスチェンジャーでも使っているのか、フラッグから違和感を感じる機械的な声が聞こえてくると扉の向うへ進んでいく。

クラリツサも慌てて扉の向うへ入ると、そこは地獄だった。

「何なんだ、ここはっ！！？」

そうとしか言いようがなかった。

そこにあつたのは大量の人体標本。妙な溶液に漬け込まれた人間のパーツが所狭しと並べられていた。その数は十人分や二十人分では済まないだろう。

よるめいた背中が何かにゴン、とぶつかった。恐る恐る振り向いてみると、そこには人一人が入れるほど巨大なカプセルが機械に繋がり幾つも並べられていた。

その内3つのカプセルには溶液が充満しており中には人が横たわっていた。その三人の顔は同じであり、それはクラリツサも良く知る人物のものに酷似していた。いや、むしろ若返った本人といっても過言ではない。それは

「織…む、ら……教、官？」

カプセルの中に入っていたのは彼女も尊敬していた臨時教官であり最強と名高い戦乙女のものだった。

「何なんだっ！　ここはっ！！」

『プロジェクトM』

クラリツサの魂の問いに答えたのはフラッグの操縦者だった。

『最強の兵士を量産する計画であり、その基礎は第二次世界大戦中のナチス時代から研究されていた。現在量産されているタイプは織斑千冬のドイツ軍出向時代に採取した遺伝子データ^{アドヴァンスト}をベースに強化した遺伝子強化素体』

「そんな、そんな事って……」

祖国のあまりにも酷い真実に目の前が暗くなる。

だが、世界は彼女に立ち直る暇所か落ち込む暇すら与えてくれなかった。

「ふん、鼠が二匹ほど紛れ込んだみたいだな」

彼らの前に現れたのは青いIS。その特徴的な武装が示すのは、

「それはイギリスのティアースタイプ!? 何故ドイツに!!!」

『あなたは関係ない、逃げろっ!』

フラッグはライフルからビームを連射しティアース型、クラリツサの知る由はないが正式名称は静かな微風^{サイレント・ゼライルス}に向かって突撃する。サイレント・ゼフィルスもただ黙ってやられるのではなくシールドビットにエネルギーアンブレラを展開しその攻撃を防ぎながら大型レーザーライフルで反撃する。

「いや、援護する。私も誇りあるドイツ軍の軍人だ! これ以上好

き勝手はさせん」

三機は申し合わせたかの用に奥に向かうように戦闘を続ける。彼らに気付かれる事無く、先程居たカプセルの付近に動く影があった。

「行つたか、流石は刹那様だ。周辺に被害を最小限にして戦闘するとは」

『オイ、オレたちモサツサトヤツテズラカルゾ！』

「ああ、分かっているお前も手伝え」

『ヘイヘイ、キカイツカイノアライコトデ……』

長い黒髪を後頭部でポニーテールにした十代半位の少女と、その足元で黒くて目つきの悪いハロが転がりながら囁いていた。

フラッグのビームとシュヴァルツェア・ツヴァイクの銃弾がサイレント・ゼフィルスを襲うがそれをシールドビットで防ぐ。即席の組み合わせでありながら二機はじわじわとサイレント・ゼフィルスを追い詰めていった。

「くつ、アメリカの^{アンティーク}中古品とドイツの^{プロトタイプ}出来損ない風情が、この完成品である私をつ……」

激情に駆られ反撃に放ったレーザーが空中で曲がりシュヴァルツエア・ツヴァイクの左肩アーマーを吹き飛ばす。

「偏向射撃だと!? やはりそれは……!!」

シュヴァルツエア・レーゲンのように アクティブ A・I・C を拘束ではなく防御に使うことを前提としているシュヴァルツエア・ツヴァイクには相性が悪かった。

いくらある程度の慣性を制御することが出来るとは言えそれは実弾に関する事だ。レーザーやビームといった光学兵器は素通りさせてしまうという欠点があった。

そして相手が使ったのはイギリスのティアーズ型に搭載されているはずの特殊レーザー兵器、それもIS学園に留学しているはずの最高レベルの適性を持っていると言われているテストパイロットですらまだ成功していない偏向射撃を行ったのだ。

それは名前の通り直線ではなく偏向。特殊レーザー兵器はライフルだけではなくビット全てに採用されているのだ。つまり相手は全方位から自分の好きなようにレーザーを曲げる、文字通りオールレンジ攻撃が可能なのだ。

『下がれ!』

それと入れ替わるようにフラッグがシールドビットの一基を銃から剣に変形した複合武装でエネルギーアンブレラ越しに切り裂きサイレント・ゼフィルスに向けて両肩の非固定浮遊部位アンロックユニットに存在していたリニアキャノンを弾幕として連射する。

『俺が本体をやる。あんたはビットの方を』

「…了解した」

一瞬の思考の後、返答と同時に散会する。

確かに今のシュヴァルツェア・ツヴァイクの状況と残りの武装を考えればこれが最適だろう。

今までの戦闘で残り三基にまで減ったシールドビットに展開したアサルトカノンを連射する。エネルギーアンブレラに初撃と二撃目は阻まれたものの、三撃目で限界を迎えシールドビットが粉碎された。

一方フラッグの方はというと、サイレント・ゼフィルスと接戦を繰り返していた。

特殊レーザーをビームで相殺しながら瞬間加速を連続使用し接近、左手に展開したソニックブレイドで相手のアサルトナイフを鏝競り合いとなった隙にリニアキャノンを撃ち込む。その反動でサイレント・ゼフィルスは床へ墜落した。

「ぐっ、貴様つ。何故だ、何故私を攻撃する。お前の目的は何だ？」

『亡霊、とでも言っておこうか』

「な、なんだと!?!」

『お喋りはここまでだ。これ以上時間稼ぎをされたくないからな』

「ふん、気付いていたか…だが遅い!」

その瞬間、壁を突き破って異形のISが飛びかかった。

白くほっそりした全身装甲に胸部には円柱状のパーツが大きく占めている。手足は異様に細く、ヒール状の踵が特徴的だ。そのデザインはどこかIS学園を襲撃した3機の無人機に似た印象を与える。その白い異形のISが手にしたビームサーベルで斬りかかった。

『オリジナルスローネだと!? 上等だ』

ビームサーベルとプラズマソードが鏝競り合いを起こし、光が跳ね回る。

「生き残ったらまた会おう。愚かな人間ども」

『逃がすか!』

破壊された壁から離脱しようとするサイレント・ゼフィルスを追おうとするがそれをスローネが阻む。

『邪魔をするな、人形が!』

幾度と無く切り結ぶフラッグとスローネだが、その均衡は一瞬で崩れた。

サイレント・ゼフィルスが逃げ切ったか一定距離離れば自動的に発動するよう設定していたのだから、残り一基となったシールドビットが自爆した事により手の空いたクラリツサによる援護射撃だ。体勢の崩れたスローネを見逃さず、その股間部分の制御ユニットにフラッグは複合武器を剣として突き刺すとそのまま銃へと変形させた。

『あばよ、兄弟…』

粒子ビームの一撃により制御ユニットは消滅し、スローネは糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

「く、逃げられたか……何だと!？」

壁に空けられた穴から中を確認したクラリツサは素っ頓狂な声を上げた。

その先に存在したのがまた別の空間が広がっていた事に関してではない。そこには大量の超高性能爆薬が大量に設置されていたのだ。

「悪の組織名物ピンチになったら基地爆破だ！？ まさかこの目で実際に見れるとは！」

『離脱する。急げ』

全速で秘密基地より離脱する二機のIS。

そのためクラリツサは気付かなかった。来る途中に見たあるモノが無くなっていった事に。

二人が地上に脱出し格納庫より飛び出したところで爆弾が起爆、その上に存在した基地も影響を受けるのだった。

人気の無い荒野を一台の軍用トラックが全力で走る。

そして、それを追うかのような数台の戦闘ヘリ。

『テッキセツキン、ヤベーゼアネキ』

「ちっ、追いつかれたか。予想より早かったな、東様の下に妹達をシスターズ届けなければならぬというのに」

その運転席で操縦していたのは刹那たちが戦っていた地下に居た

少女と黒いハ口だ。ハ口は助手席のボンネットにしつらえられた専用ポットに固定されている。

「私が迎撃に出る。運転を変われ」

『チヨ、ムチャスナー、ガルムノシヨ―ハキンシダゼー！』

「ふん、目撃者が居なければいい。出るぞ」

黒いハ口の制止を振り切って少女はシートベルトを外してドアを開けて飛び出す。ハ口はというと運転手の居なくなつた運転席を見て一瞬考えると耳の部分からマジックハンドを伸ばしてブツブツ言いながらも運転を引き継ぐのだった。

そして飛び降りた少女はというと、その身体を粒子を纏い、一瞬でISを展開する。

トリコロールカラーの全身装甲^{フルスキン}。手足はすらりと細く、反面肩はプロテクターを付けたかのように丸い。そして特徴的なのは背中にリュックサックを思わせるユニットとその頭部だ。

知る物が見ればそれはIS学園に所属しているC・B社の新型ISエクシアに酷く酷似していると思うだろう。

『！ あ、ISだ、高度を…いや逃げ……』

その戦闘ヘリのパイロットは最後まで言う事はなかった。その縦席は謎のISの右手に展開された二門のビームライフルにより撃ち抜かれてしまったのだから。

せめてもの救いはそのパイロットは自分が死んだ事を認識することも痛みを感じる事も無かつたことだろうか。

「ガルム…」

フルスキン
全身装甲ISの中で少女は言い聞かせるように敵かに呟いた。

「フェレシユテのマイスター、ありむろ はるか亜裏室春香……」

その右手の二門のビームライフル…GNダブルビームライフルが上下に展開、変形しGNメガランチャーに形を変える。

「圧縮粒子前面開放、目標を噛み砕く！」

その最大出力となった粒子ビームが巨大な一条の剣となり残りの戦闘へりを飲み込んだ。

ガルムのマイスター、亜裏室春香をここに居ない織斑一夏が彼女を見たら驚愕の顔できつとこつ言っただろう。

『髪をポニーテールにした学生時代の千冬姉』と。

機業強襲計画とその裏で、（後書き）

因みに束の偽名やオリジナルネーミングは全て不思議の国のアリス、及び鏡の国のアリス関連からです。

今回のルイスという偽名はガンダム00ではなく不思議の国のアリスの作者の名前から取りました。

刹那専用フラッグ改

エクシアの発表後、急遽用意された刹那用の対亡国機業用強襲機。元となったフレームは束がドイツで撃墜し回収したISイナクトであり、フラッグ風に擬装した装甲と粒子ビーム用のGNコンデンサを追加しただけのものであり基本的な性能はノーマルフラッグ以上、カスタムフラッグ未満だがパイロットの能力もあり第三世代機にも対抗できるほどの戦闘能力を誇る。

武装面においては標準的なフラッグの武装であるソニックブレイドやロケットランチャーの他に、非固定浮遊部位アンチロックユニットに1対の小型リアキャノンの増設と、専用にGNソードの後継種の試作品に当たるプロトGNソード[?]を装備している。

また強襲用装備にIS用長距離輸送キャリアのパーツを流用した装備もある。

また、ISスーツには刹那用に胸部にパットを装着した物であり、ボイスチェンジャー内蔵型ヘルメットと仮面のような大型センサーマスクにより正体がばれないようになってる。

イメージは劇場版ガンダム00の序盤で刹那が使用したフラッグ改S装備。

ガ
ル
ム
G
R
M

C・B・社が極秘裏に建造した量産化を想定した擬似GNドライブ搭載機。外見はガンダム00Fに登場したガルムガンダムと酷似している。

設計者は篠ノ之束、残されていたプルトーネのデータをベースに開発された。

擬似GNドライブ事体はサイズの問題から本体に搭載されておらず、脱着式のバックパック（原作でのコアファイターの部分）という形で装備され、ドライブ破損時の早期排除や交換もしくはドライブ無しでの運用も性能の低下こそあるものの可能となっている。

元々は表舞台に発表されたエクシアの代わりに対亡国機業戦用に用意されたものであったが、あまりにも外見がエクシアと酷似しているため使用されず、C・B・社の裏側ともいえる別働隊『フェレシユテ』に回された。

後に『フェレシユテ』用にロールアウトするガ・シリーズの原型となる。

転校性は貴公子？（前書き）

年末年始は全て仕事ですw

転校性は貴公子？

格納庫から飛び出そうとした時、爆風がクラリツサを襲った。

地下で発見したところだけではなく各所に設置されていたのだから、度重なる爆発に酷使され機体もエネルギーも限界ギリギリにまでなっていたシュヴァルツエア・ツヴァイクはバランスを保てず吹き飛ばされた。

イナーシャルキャンセラー

慣性制御装置があるとは言えそれは所詮ISの重量を軽減したり機体本体を浮かせる程度のものだ。全ての慣性を無効化できるほど優れたものではない。故に銃弾を浴びればその反動でバランスを崩し、今のように爆風に吹き飛ばされたりしてしまう。

フラッグ改はクラリツサを右手で捕まえ抱き寄せると空いた左手から発射したワイヤーガンを地面に撃ち込みバランスを保つ。その瞬間、マジックミラー式のセンサーマスクの向う側の瞳が見えたような気がした。

『大丈夫だな？ 俺の言う事がわかるな？』

「何が…何が起こっているんだ！？ 私…私たちの知らない所で……一体…！？」

身を案じてきたフラッグ改のパイロットにまくし立てた。しばらくするとフラッグ改のパイロットは基地を指差す。

『あんたの取るべき道は二つある。一つは何も聞かず元の場所へ帰り全てを忘れ、貝のように口をつむぐ事…』

無理だな、とクラリツサは心の中で即答した。

地下での実態と謎のティアーズ型に酷似したIS。状況から判断するにこれらは全て軍上層部が絡んでいる事が嫌でもわかってしまふ。おそらく既に自分が地下で秘密を知ってしまったことは伝わっているだろう。例え隊に戻って口をつぐんだ所で何らかの処置をされるのは目に見えている。

『そして。もう一つは…我らと共に真実に立ち向かう事』

クラリツサの困惑する中、フラッグ改の横に青い天使が降り立つ。

「せつちゃん、ジャミングフィールドももうそんなに持たないよー」

『そう言う事だ。本来ならもう少し考える時間をあげたい所だがもうそんな余裕も無い。今ここで決めてくれ』

「……私は……」

この日、襲撃を受けたドイツ軍基地は被害甚大であったが負傷者こそ出たものの死者が出なかった事が不幸中の幸いだった。唯一人、テロリストを追い整備用地下路に侵入したクラリツサ・ハルフオーフ大尉がMIA…作戦行動中行方不明と認定された事を除いて…

六月上旬、日曜日。

高速機動実習を行える第六アリーナが音速衝撃波ソニックウェーブによって中央タワーと観客席に張り巡らされた安全用のシールドバリアーを揺るがす。

ドイツ襲撃の翌日、日本へ蜻蛉帰りの俺は以前タバ姉が持ってきた一式装備パッケージのテストを行っていた。

アバランチ・パッケージ。

『雪崩』を意味する一式装備パッケージを装着したエクシアのシルエットは全身にGNコンデンサとしての役割も兼ねGNバーニアを多数内蔵した装甲を纏った事によりマツシブなものへと変化していた。

武装面での変更点は発射口が追加装甲により塞がりGNバルカンが使用できなくなった他、通常は後脇と後腰にマウントしてあったGNビームサーベルとGNビームダガーが4本とも後肩の新たに増設されたウエポンラックに移動した位で他の武装は通常通りに使用することが出来る。

そして何よりもコイツの特徴は…

「通常飛行テスト終了、次の直線コースでフルブーストモードのテストを行う」

『分かりました』

中央タワーの一部にある管制室にいる山田先生の返事が返ってきた。

コーナーを回り直線コースへ差し掛かったところでフルブーストモードを起動させる。装甲の一部が可変・展開し、腕部と脚部を口ツク。そして装甲の中から大きささまざまなGNバーニアが姿を現す。これがアバランチ・エクシアの最大の特徴、フルブーストモード。展開装甲技術により瞬間的に通常モードとフルブーストモードの切

り替えが可能となっている。

緑の幕…目視できる程濃厚なGNフィールドがエクシアを中心に球体状に展開されると、ドン、という音と共に瞬間加速とは比較にならないほどの衝撃が身を襲う。僅かに呻きを上げながらその衝撃で意識を失わないよう耐える。

フルブーストモードは文字通り全てのバーニアを使用した加速。追加されたGNコンデンサの豊富なGN粒子を惜しげもなく使用し、GNフィールドによる空気抵抗の減少とGNバーニアの全力稼働によりその速度は一瞬で超音速領域にまで達する。それに耐えるための追加装甲と全身間接のロック機能が追加されたのだ。

最も後先の事を考えずGN粒子を消費するためGNコンデンサに最大充填しておいても僅か15分でコンデンサは底が付いてしまうほどのエネルギーの食い虫だ。

コンデンサが空になった後のアバランチ・パッケージはデッドウェイトとなり無用の長物でしかないので強制排除する事で通常のエクシアに戻ることが出来るよう設計されている。

（しかし、このようなアリーナもあつたとは…いやモンド・グロツソに高速飛行部門があつたから別段変ではないが…）

超音速に慣れ、流れる景色を眺めながらふとそう思った。

嘗て自分が読んだ『原作』は4巻か5巻だったか、その中には少なくともこの様なアリーナはなかった…気がする。

気がする曖昧なもの、それと言うのももう十五年以上前の話だ。そんな前の事を事細かに覚えていられるはずも無いだろう。確か自分が死ぬ少し前にアニメ化が決定した事だけは覚えていた。

（確かもうすぐ、シャルロットとラウラの転校のはずだったがどうなるかはわからない。前倒しや知らない人物がいるのだから…）

そう、更識楯無の早すぎる登場と彼女の妹だという4組代表の件だ。

4組の代表によっては何時まで経っても登場せず、そのままフェードアウトしてしまったはずだが。まさか専用機が最後まで完成しなかったのか？

何はともあれその時にならないとどうなるかはわからないということか…

直線コースの終わりが見えてきたためそこまで考えを切り替えると俺はフルブーストモードを解除する。

展開装甲は通常状態に戻りGNフィールドは消失したがその速度までは消えず、しばらくの間慣性飛行を続けた。

「凄いですね、C・B社の新型パッケージは」

「だが粒子制御能力を持つエクシア専用だから他に互換性はないがな」

中央タワーの管制室で随時送られてくるデータを目にしながら呟いた山田真耶にすぐ後ろでモニターに映し出されているアバランチ・エクシアの映像を見ながら織斑千冬が返した。

「でも第三世代機の一パッケージ式装備ってどれも各機体専用装備じゃないですか？」

「だが姉妹機や製造メーカーが同じであれば多少の調整すれば使用することが出来るが、あれはそうじゃない」

「…そう言えばエクシアと白式って全然違いますよね？ 基本同じメーカーだったら似通った部分が出てくるのに……」

そう呟いてエクシアと白式を頭の中で比較してみるが、その共通点は見当たらない。

白式も先日修復に加えてオーバーホールを終えて一部仕様変更されマイスターの織斑一夏の元に戻っていた。大きな変更点は各部にアタッチメント用のハードポイントが追加され、名称も正式には『白式Ver.1.2』と変更されていた。

「あの二機は基礎設計者が違うからな。山田先生はモビルスーツというものを知っているか？」

「いえ、何なのですか？ それは」

「ISより以前に開発されていたバッテリーや燃料電池で稼動する宇宙用の装甲作業服の一種だ。ISの登場により廃れた技術となつて十機ほどしか生産されず、今では一部の宇宙博物館に展示されている。もともとISの数とコストの面から宇宙開発用に現在再び注目され始めているものだ」

「はあ、それがどういう関係なのですか？」

「モビルスーツの開発者の名前は藤原伊織。刹那の祖父であり、東に協力して初期のIS、所謂第零世代機の製作に携わった一人だ。エクシアにはそのモビルスーツの技術が流用されている」

「ええ！？ 第零世代機って白騎士の事ですよ？ あれは篠ノ之博士一人が作ったものでは……」

「…政治的な問題もあり対外的には、な。少し考えればわかることだ。いかに天才であっても設備も資金も材料もなければ作る事はできません。実際第零世代機製作の際に機械工学や宇宙物理学だけではな
く生体分野の専門家のエキスパート達が集まった位だ」

「そうだったんですか…でもこの展開装甲技術っていうのも凄いで
すね。もしかしたら第四世代相当の技術なのでは…?」

「……アイツが言うには、『世代? 何それ美味しいの?』だそう
だ。アイツにとっては世代というのはあまり関係ないのだろう」

「アイツ、って東雲社長さんの事ですよ。そう言えばエクシアに
も白式にも共通して第一世代機の初期型にしか採用されなかった装
備がありますし…」

「ああ、アイツにとってはISは……失礼、私だ……ああ、そうだ
が…何? それは……わかった……ああ」

千冬が言いかけた時、携帯電話の着信音が鳴り響くと胸ポケット
から取り出して応答した。

電話が終わると千冬は少し疲れたように溜息を一つ吐く。

「山田先生、すまないが少し用事が出来た。地下の粗大塵の処分が
決定した、私はそっちの対応に入るから後は頼む」

「え? 粗大塵って…まさか!？」

「そうだ。動力を除いて廃棄することが決定したそうだ。アレは動
力や一部の武装以外は粗悪なEカーボンなど目新しいものは無いか

らな。限られた空間しかないのに何時までも置いておくわけにもい
くまい」

「わ、わかりました」

モニターに向き直る真耶に背を向けると退出した千冬は扉を閉め
ると一息ついた。

「束め……何が『スローネのパーツちょーだい』だ。それも学園長
の許可を貰っているというのだから始末に悪い。だがアイツは何を
するつもりだ？」

結局、今考えてもわかるまいと結論付けると千冬は地下格納庫へ
向かうのだった。どうせ今度聞き出せばいいと思い直しながら。

俺は久々にIS学園の外 というか、五反田食堂の二階の住居
スペースにいた。

「で？」

「で？ って、何がだよ？」

うぬ。対戦中にいきなりな会話だな。って、うわ。いきなりコン
ボ使いやがった！ ええい、こしゃくな！ っておい、俺の方の画
面をチラチラ盗み見るな！

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてるんだろ？」

してねえつつの。何回説明すれば納得するんだ、こいつは。

ちなみにこの五反田弾は俺の中学からの友達なんだが、入学式当日に知り合って以降やたらと馬があって三年間鈴と揃って同じクラスだった。その事もあって中学時代はよく三人でつるんでいたんだが……

「嘘をつくな嘘を。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえかなにそのへブン。招待券ねえの？」

「ねえよバカ。つつか、アレだ。刹那や鈴がいてくれて助かったよ。話し相手本当に少なかったからなあ」

「ああ、鈴か。それに刹那って前に言ってた幼馴染の奴か……よっしゃ、また俺の勝ち！」

「おわ！ きたねえ！ 最後リミット解除して削り殺すのナシだろ……」

ちなみに今俺達が対戦しているゲームは『インフィニットラトス I S 』エ CE ストライカーズ Strikers』。今年の頭に発売したばかりでありながら超名作といわれた『インフィニットラトス I S / V S』ヴァースト スカイ』を追い抜いて発売月だけで百三十万本セールを記録している。

ちなみにデータは第一回から第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』までのデータが使用され、プレイヤーが使用できるキャラは総勢50種類を超えている。

伝統的な2D格闘ゲームのスタイルを取っている『IS/V S』と比べ、『IS/A S』は全方位360度を戦場とした3Dシューティングゲームであり、ゲームモードも今俺達がしていた対戦モ

ードの他に格闘・射撃・高速機動といった各部門に分かれて競い合うモンド・グロッソモードをウリとしている。

だが、最もユーザーが注目していたのは千冬姉のデータが使用されていた事だろう。なんだが……

「やっぱイタリアのテンペスタは強いわ。つうかエグいわ」

「たまには別のキャラ使えよ。千冬姉の暮桜とか」

「いや、あれ隠しキャラだから性能高いけど癖があって使いづらいからなあ。確かに強いといえば強いけど随時エネルギーが減っていくし、この手のゲームで射撃戦が出来ないってもうイジメだぞイジメ」

そうなのだ。隠しキャラとして出てくる千冬姉の暮桜だが、忠実に再現されていて逆に使いづらいのだ。その上性能は高いのだが操作性に癖があってやり込んだ玄人向けのキャラとなっているのだ。

三月に行われた大会の予選出場者の六割が使用していたのだが、なんと本戦出場者の中に暮桜を使う人はいなかった。多くの敗因は距離を保ったまま射撃戦をしただけでやられてしまうという逸話が残っていた。

ちなみにソフトを開発したのはC・B・社なのだが、当然のように各国から……それも日本からも苦情が来たらしい。『我が国の代表はこんなに弱くない!』って。

これに対してC・B・社は『これはモンド・グロッソ時に各国から提出されたカタログスペックと大会時の代表のデータを元にパラメーターを設定している』と平然と言い返してそのデータを全て開示したそうだ。一部の人間からは反発されたが概ね真実だったとして多くの人に受け入れられ、これがまた売り上げを伸ばす要因となった。

ちなみに今年の末に続編の『IS〜AS2』（仮題）[□]が発売予定となっている。聞いた話だと今まで発表された機種に加えエクシアや白式、他にも許可が下りればだが学園の第三世代機のデータも使用される予定なのだから。何か恥ずかしいな。

「お、エクシアのプラモか」

「ああ、それようやく買えたんだ。何処も売り切れ続出で入荷しても一時間以内には売り切れちなうよ。ネットオークションなんかじゃ一万超えなんてざらだつて話だぜ」

棚に飾られてたエクシアのプラモデルを見つける。この手のプラモデルはあるにはあるが種類は少なく、形状からある程度のスペックバレを懸念して発売されているのも第一世代機のみ。それも台座に固定されているオブジェクト状態のものだけでエクシアのように全身稼動ではない。

弾の『いいだろう』的なニュイアンスを含んだ言葉は突然の訪問者に破られた。

「お兄！ ちょっとニッパとヤスリ貸し」

対戦モードが終了してタイトル画面に戻りオリジナルテーマソングが流れ始めた時、どかんとドアを蹴り開けて入って来たのは弾の妹、五反田蘭。歳は一個下で今は有名私立女子高に通っている中学三年生。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「いつ、一夏……さん？」

何処かに買い物に行っていたのか、服装はヘアバンドに一目で分かる余所行きのカジュアルな格好で手には駅前のシヨッピングモールの紙袋が握られてた。

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……？ 全寮制の学園に通っているって聞いてましたけど……」

「ああ、うん。今日はちょっと外出。家の様子見に来たついでに寄ってみた」

「そ、そうですね……」

しかし、蘭って昔からそうだけど、なんで俺相手だと妙にたどたどしいというか、敬語なんだろうな。不思議だ。

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ」

ギンツ！ 蘭の視線一閃。弾がダメージを食らったマリオのように縮んでいく。相変わらず分かり易い戦力図だ。

「……なんで、言わなかったのよ……」

「い、いや、だってお前、朝早くから出かけてただろ？ 八八八……」

ギロリ、死に体にナイフを突き立てるが如くの視線を弾に送りつけ、蘭はつかつかと入ってくると机の上に置いてあった模型用工具一式が入っていた箱を手に取りそそくさと部屋を出て行く。

「じゃあお兄これ借りてくから。それとお昼出来たって。あ、あのよかつたら一夏さんもどうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、うん。いただくよ。ありがとう」

「い、いえ……じゃあお爺ちゃんに伝えて来ますので……」

ぱたん。ドアが閉じて静寂が訪れる。

「しかし、あれだな。蘭ともかれこれ三年の付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれないのかねえ」

「は？」

話は変わるが女の子を『さん』『づけは兎も角、『ちゃん』だけで呼ぶ男ってすくなくないか？

俺は絶対無理だ。友達の妹ですら抵抗がある。なので呼び捨て。本人も不承不承納得してくれたのを思い出す。

「いや、ほら。だってよそよそしいだろ。今もさっさと部屋から出て行ったし」

「……………」

はあ、と溜息を漏らす弾。そしてその後、ふうと気を吐く。

「……………なんだよ？」

「いやー、なんというか、お前はわざとやっているのかと思う時があるぜ」

「？」

「まあ、わからなければいいんだ。俺もこんなに歳の近い弟はいらん」

何でいきなり弟が出て来るんだ？ わけわからん。

「まあ、いいや。とりあえず飯食ってから街にでも出るか」

「いや、早めに帰らないといけないから昼飯だけゴチになる。サンキユ」

「なあに気にするな。どうせ売れ残った定食だろう」

なるほど、つまりあのメチャクチャ甘いカボチャ煮定食という訳か。別に嫌いじゃないからいいけども。

食わせてもらえるっていうのはそれだけでありがたい事だ。農家の人へと料理を作った人への感謝を忘れるな。

「じゃ。ま、行くうぜ」

弾の部屋を出て一階へ。一度裏口から出て正面の食堂入り口にと戻る。

多少面倒だが、「この造りのおかげで私生活に商売が入ってこないんだよ」と前に弾が言っていた。そういうものなのだろう。

その日、五反田蘭は上機嫌だった。

その理由は手にしていたシヨップینگモールインフィニットラストス アクシヨン フィギュアの紙袋。その中に入っていたのは今日発売された I S A F の第二弾、8分の1スケールの織斑一夏&白式。つまりインプラである。

その最大の特徴は、通常はISアーマーのみのオブジェクト状態がインプラの主流なのだが、このシリーズはオブジェクト状態だけでなく他に同スケールの装着用のフル稼働フィギュアがセットになっているのだ。

その存在を知ったのは先月兄の部屋で見たインプラのパッケージに乗っていた予告だ。

彼女はインターネットや乙女の情報網などを駆使し入念なりサーチを続けた結果、発売日とその入荷予定の数まで調べ上げた。

この近辺で発売日に入荷できた店舗は駅前のシヨップینگモールだけであり、第一弾のエクシアが入荷して即売り切れという人気ぶりから彼女は早朝から3時間並んで念願の賞品を購入したのだ。

定価2980円と中学生の蘭にとっては大きな買い物だが、そこは他に欲しいものを我慢し、母にお小遣いの前借をしてまでも手に入れたかった。

結局はインターネットでの前評判通り50個という入荷数を大きく上回る客が殺到したため開店前に店員がメガホン片手に整理券を配るという事体にまでなり、開店と同時に物は売り切れとなった。

因みに当初は白式のインプラの列しか用意されていなかったが同時に再入荷されたエクシアのインプラを求めた客も多く急遽店員によってもう一つの列が形成された。

ちなみに並んでいた他の客には学生よりも社会人の方が多かったのには蘭も小首を傾げた。

そしてうきうき気分で帰ってきた所で気付いた。ニッパーとかプラモ作るための道具を自分は何も持っていない、と。

まあ元々そうだったものには興味がなかった蘭は当然持っているな

かった。買えたらついでに玩具売り場で必要最低限の工具も買っ
て行こうと考えていたのだが、物が買えた事に浮かれてついつい忘れ
てしまったのだ。

「お兄！ ちょっとニッパとヤスリ貸し」

なので兄に道具を借りようと部屋を訪ねたのだった。兄である弾
は小学生の頃から時々プラモデル全般を作っていたこともあり、工
具一式揃えていた筈だ。

母に「御飯できてるから弾達を呼んできて」と言われたついでに
借りようとドアを蹴り開けて兄の部屋に入ったらそこには来客が。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

流暢でアップテンポの曲が流れる部屋の中には兄の他に、あこが
れていたあの人が。

「いつ、一夏……さん？ い、いやっ、あのっ、き、来てたんです
か……？ 全寮制の学園に通っているって聞いてましたけど……」

一瞬固まってしまい、どきまぎしながら何とか言葉を繋げる。

「ああ、うん。今日はちょっと外出。家の様子見に来たついでに寄
つてみた」

「そ、そうですか……」

正直、その後なんて話したのかしっぴかり覚えてない。

部屋を出た蘭の手には紙袋と工作キット。そして、多分だが、昼
食に誘うこともできた、と思う。

急いで部屋へ戻り、ダンスの中からお気に入りのワンピースを取り出すと着ていた服を脱ぎ捨てて急いで着替えるとすぐさま飛び出して一階の食堂に向かう。

「お兄に言っただよ、それと一夏さんも食べてくって」

「おつよっ」

厨房で下ごしらえをしていた祖父は「じゃ、もう一品作っておくか」と言っただ水切りした豆腐に片栗粉で衣を付け揚げ始める。

油のはねる音を聞きながら昼食の野菜炒めや煮物の置かれたテーブルの席に着き物思いに耽る。

一目惚れしてしまった兄の中学校時代のクラスメイト、彼は世界で未だ二人しか確認されていない男性のIS操縦者であり、IS学園に在学しながら既に就職し半社会人らしい。

ポケットから一枚の紙を取り出して開く。そこに書かれていたのが先日受けたIS簡易適性試験の結果。その判定はA。

(これなら、来年IS学園を受験しても大丈夫、だと思っ……後は3年間上位の成績を保てば行く行くは国家代表候補資格を取って、一夏さんの居るC・B・社に就職できるかも……)

ソレスタル・ビーイング社についてもリサーチをしているがそちらについては殆ど出てこない。

名前からして海外の企業と思いきや、実は日本人が3年ほど前に創業した新興企業。日本にあるはずなのだが本社は見当たらず、見つけることが出来たのは支社と工場だけ。それもそれらは家電や自動車といった一般的な工業製品関連であり、IS関連については非公開という謎っぷり。

去年の求人項目を探してみてもIS部門においては募集をかけて

いない。このような状態で就職するにはスカウトされるしか方法が見当たらない。

「いやー、久しぶりに来たけどゲンちゃんまだまだ元気だし御飯美味しかったよー、亜理子さん大満足」

「おう、でも嬢ちゃん一年ぐれえ来なかったな。全然見ないから心配してたんだぜ」

「んー、亜理子さんもう社会人だからねー。これでも世界中を飛び回る社長さんで色々忙しいんだよぶいぶい」

「ふーん、そりゃ大変だ。また友達と一緒に食いに来な」

昼時を過ぎて常連客なのだろうか、最後の一人の女性客が料金を支払いながら祖父と談話しているのが目に入った。

白いスラックスに背中にCBとロゴの入った特徴的な薄赤色のジャケット。そんな服装の上からでもわかるスタイルの持ち主。一目で美人だとわかる。

(…一夏さんってどんな女性が好みなんだろう。……例えば…年上の女性とか?)

目の前の女性と自分を比較してみると、勝ち目が見つからないのに少しへこんだ。ぶんぶんと頭を振る。

(いいもんいいもん！ 年下の私は妹属性で勝負するもん!!)

等と考えていた間に女性は既に退店しており、少しの間を置いて、

「うげ」

「ん？」

露骨に嫌そうな声を出したのは居住区から降りてきた兄だった。

「なに？ 何か問題でもあるの？ あるならお兄ひとり外で食べてもいいよ」

「聞いたが一夏。今の優しさに溢れた言葉。泣けてきちまうぜ」

弾と共に食堂へ入った先にいた先客は蘭だった。それも丁寧に着替えたのか、服装はフリルの付いた半袖のワンピースとなっている。食事の後に何処かに出かける予定なのだろうか？

俺の隣で弾が号泣するジェスチャーを取るが、生憎弾の涙を拭うハンカチを俺は持ち合わせてはいない。

「別に三人で食べればいいだろ」

「そうよバカ兄。さっさと座れ」

「へいへい……」

こうして昼食の用意されてたテーブルに俺、弾、蘭という並びで座る。

「蘭さあ」

「は、はひっ？」

「どっか出かける予定？　もしかしてデート？」

「違いますっ！」

ダンツ！　とテーブルを叩いて即時否定。イカン、何か地雷踏んだかもしれない。

「い、ごめん」

「あ、いえ……と、とにかく、違います」

「違うっつーか、むしろ兄としては違って欲しくもないんだがな。」

何せお前がそんなに気合の入ったおしゃれをするのは数ヶ月に一回……」

バシッ！　瞬時のアイアンクロー。それも口封じというやつだろ
うか、性格に弾の呼吸を止めている。千冬姉や刹那に負けず劣らず
の技術だ。そんなの何処で習ったの？　有名私立女子校のカリキュ
ラムは今日日護身術に留まらず暗殺術にまで及んでいるのだろうか
？　それって何か嫌過ぎる。これも女尊男卑の影響だろうか……
凍える女王とばかりに冷たく見下ろす蘭に、哀れ弾は許しを請う
罪人の顔で何度も頷いた。

それにしてもしかし、仲いいなこの二人。仲良くケンカしな、っ
て感じで。

「食わねえんなら下げるぞガキども」

「く、食います食います」

ドン、とテーブルの上に餡のかかった揚げ出し豆腐が山のように盛られた器を置いて現れたのは八十過ぎてなお健在、五反田食堂の大将にして一家の頂点、弾と蘭の祖父である五反田巖その人だった。長袖の調理服を肩までまくり上げ、剥き出しになっている腕は筋肉隆々。中華鍋を一度に二つ振るその豪腕は熱気に焼けて年中浅黒い。サロンなんかに行くよりも百倍健康的な焼け方をしている。

ちなみに何度も食らった事がある拳骨は千冬姉に勝るとも劣らない威力である。うん、大人しく昼飯を頂こう。

俺たちの「いただきます」の挨拶に巖さんは「おう、食え」と満げに頷くと厨房へ仕込みの準備に戻る。その音をBGMに俺たちは食事の合間合間に雑談を始める。食べ物を噛みながら喋るとお玉や中華鍋やまな板が飛んでくるのでそのあたりのマナーは徹底している。

「でよう、鈴と、えーと、誰だっけ？ 二人の幼馴染？ と再会したって？」

「ああ、刹那と篤な」

刹那の名前を聞いたところで弾が顔をしかめた。どうしたんだろ。なんか「何故だ…初めて聞く名前なのに何故か殺意が沸いて来る……」とか呟いている。

「セツナ…？ ホウキ……？ 誰ですか？」

「ん？ 俺の幼馴染。最初が刹那でその次が篤。で、鈴は三人目」

「ああ、あの……」

何でだろうか、蘭は鈴の話になると僅かに表情が硬くなる。鈴の両親が経営していた食堂と五反田食堂はライバル店同士だったから思うところがあるのだろうか？

「そうそう、その筈と同じ部屋になったんだよ」

「お、同じ部屋あ!？」

何故か取り乱した蘭が突拍子も無く立ち上がる。後ろではワントーン遅れて椅子が床に転がった。

「ど、どうしたんだ？落ち着け」

「そつだぞ落ち着け」

ギンツ！ 再び視線一閃。弾は小さくなる。マリオ。

ちなみに敵さんは蘭には甘いのだ。俺や弾が同じ事をしたときには必殺必中のお玉が飛んでくる。

「い、一夏、さん？ 同じ部屋って言う事は、つまり、寝食を共に……？」

「んー、まあ、食事は何時も食堂でだけどそうなるかな。刹那は一人部屋だけど、俺は何でか部屋の調整が中々付かないとかで……」

「に、二ヶ月以上も同せ……同居していたんですか!？」

「ん、そうなるな。俺としては刹那と同室の方がいいんだけど……」

「な、そ、そ、そ、そんなに刹那って人のことが好きなんですか！？」

「……………？ 何を勘違いしているのかわからないけど刹那は男だし、箒は刹那の事が好きなんだぞ」

「はい？」

あれ？ 知らないっけ？ 刹那の事も四月ごろ「もう一人の男性 IS 操縦者」として色々とテレビで報道されてたけど。

そついえば刹那って女性の名前でもありだよな。どうでもいいけど。

ところで弾君。何故ちみは脂汗をダラダラ流しているのかね？

「……………お兄、後で話し合いましょう」

「お、俺、この後、一夏と出かける、から……………ハハハ……………」

「いや、俺飯食って少ししたら帰らないといけないから」

蘭が『嘘つくな』と一睨み、弾がまた小さくなった。マリオ。…
…もうこのネタ飽きてきた。

「……………決めました」

神妙な顔をして呟く蘭。何をだろう。

「私、来年 IS 学園を受験します」

「お、お前、何言って」

急に立ち上がった反動で椅子が転がると同時に弾の顔面にお玉がストライク。その後ろでは申し訳程度に椅子が揺れている。蔵さん、相変わらずいいコントロールしてやがるぜ。

「え？ 受験するって……なんで？ 蘭の通ってる学校ってエスカレーター式で大学まで出れて、しかも超ネームバリューのあるところだろ？」

その名前は忘れてしまったけど、確か聖なんとかかんたらとかいう、世間一般で言うお嬢様学校とかいうやつだ。よくドラマとか漫画とかでマリア様の銅像の前で「ごきげんよう」とかやっているよな。……実際にどうだか知らないけど。

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

「IS学園は推薦ないぞ……」

よろよろと立ち上がる弾。ライフ体力は低いリスボンが復活が早い。弾の隠れた特技だ。あんまり意味の無い性能だけれども。

「お兄と違って、私は筆記で余裕です」

「いや、でも……な、なあ、一夏！ あそこって実技あるよな!？」

「ん？ ああ、あるな。IS起動試験っていうのがあって、適性が全く無い奴はそこで落とされるらしい」

ちなみにその起動試験はそのまま簡単な稼動状況を見て、それを

元に入學時点でのランキングを作成するらしい。俺が山田先生と戦ったのもそれだ。

「……………」

無言でポケットから折り置まれた紙を取り出し差し出してくる蘭。受け取ってそれを開く弾。

「げえっ!?!」

どうした? ターミネーターでも出てきたのか? ヘビィな銃音はまだか。

「IS簡易適性試験……………判定A……………」

「問題は既に解決済みです」

自慢げに胸を反らす蘭。対して固まる弾。

「それって希望者が受けれるってやつだけ? 確か政府がIS操縦者を募集する一環でやってるっていつ」

「はい。タダです」

タダはいい。タダであるほどいい。そう言って頷いているのは蔵さんだ。本当、蘭には甘いなこの人……………」

「で、ですので……………い、一夏さんにはぜひ先輩としてご指示と就職活動のお力添えを……………」

「ああ。いいぜ。受かったらな」

ああ、そういう事か。この御時世だから少しでもいい会社に就職したいんだろう。そういった意味では俺の所属しているC・B・社なんで現在急上昇中だから丁度いいのではないだろうか。もし本当に蘭がIS学園に進学してきたら少しは口ぞえしてあげてもいいかと思う。

椅子を戻してちょこんと腰掛け真剣に聞いてくる蘭に安請け負いましたら、蘭が食いついてきた。

「や、約束しましたよ！？ 絶対、絶対ですからね！」

「お、おう」

その勢いに若干押されて、俺はごくごく二回頷く。

「お、おい蘭！ お前何勝手に学校変える事を決めてんだよ！ なあ母さん！」

「あら、いいじゃない別に。一夏くん、蘭のことよろしくね」

「あ、はい」

五反田食堂の自称看板娘、弾と蘭の実母である五反田蓮さん。実年齢は秘密。最低でも三十代後半のはずだがそうは見えない。弾と並んだら下手すれば歳の離れた姉弟で通ってしまうのではないかという美人だ。ちなみに本人曰く「二十八から歳をとってないの」だそう。

「はい、じゃねえ！ ああもう、親父はいねえし！ いいのか、じ

「ちゃん！」

何故か一人興奮している弾は蔵さんに話を振るが、

「蘭が自分で決めたんだ。どうこう言う筋合いじゃねえわな」

「いやだつて」

「なんだ弾、お前文句があるのか？」

「……ないです」

五反田家の力関係がよくわかる構図だ。相手が身内でも言いたい事はびしつと言おうぜ。俺だったら………すみません、やっぱり言う事は出来ないと思います。何せ唯一の身内が最強の姉だ。

「では、そういう事で。ごちそうさまでした。お兄、食べ終わったら私の部屋まで来るように。もし逃げようものなら………どうなるかわかってますよね……？」

「安心しろ蘭、俺が見張っておいてやる」

いつの間にか昼食を平らげていた蘭は蔵さんの言葉に満足すると自分が使っていた食器を手に席を立つと片付ける。

「一夏」

蘭が厨房の洗い場に消えて行くのを確認すると弾がずっと顔を寄せ小声で話しかけてくる。

「お前、すぐに彼女作れ。すぐに！」

「はあ!？」

「はあ、じゃねえ！　すぐ作れ！　今年中　　いや、今月中に！」

「別に、今はそういうのに興味ねえよ」

「相変わらずお前は……枯れた老人かっつーの。そんなだから鈴が」

「？　鈴がどうした？」

「いや、何でもない。っていうかだ、誰でもいいから付き合え。な？　な!？」

興奮したと思ったら呆れたり、何がしたいんだこいつは。っていうか何だこの流は。

「大体、お前いつ女に興味が湧くんだよ。アレか？　モテリスト気取りか？　ふざけんなよ、この野郎！」

「何できれてるんだよ」

「きれてねえよ！」

どこをどう見てその言を信じろというのか。お前、絶対酔っ払っても「酔ってねえ！」とか言っつて絡んでくるタイプだろ。

「第一、そつ言っつお前はどつなんだよ!？」

「ああ！？ 話をすり替えるんじゃない……」

「高校生になつたら絶対彼女作るとか言ってたけどどうなんだよ？」

あれ？ 弾の目が段々虚ろになり、肩もプルプル震えている。もしかして地雷踏んだ？

「……お前に……お前みたいな奴に俺の何が分かるっていうんだ！」

両手で俺の肩を思いつきりホールドすると前後に揺さぶるように力強くシェイク。ってこんな状態じゃ応えられないから！ チョークチョークとばかりに弾の腕をぺちぺち叩くが揺れは収まるどころかさらに激しくなっていく。

「俺には……俺には、原作六巻で眼鏡が似合う知的な秘書風の年上の彼女ができるはずだったのにいいいい！！ それが横からひよつと出の何処の馬の骨ともわからない男なんか寝取られた……嫁を寝取られた俺の気持ち、ギャルゲーでハーレムルートを手がけた作者なんか書くラノベ主人公のお前なんか、わかってたまるかああああ！！！！！！」

弾、お前がなに言ってるのかさっぱりわからないぞ。第一何だよ原作って。

でも弾の好みって年上なのか。よし、IS学園で該当する先輩に会えたら紹介してやる。だから離せ。そろそろヤバイかもしれない。って弾の目が正気じゃねえ。血涙なんて初めてみた。

「うるせえぞ弾！」

敵さんの一喝と共に飛んできたまな板が弾の側頭部に直撃する。

それも家庭用ではなく業務用の巨大なまな板だ。おかげで俺の脳味噌はシェイクから解放された。

「一夏、弾は俺が部屋に放り込んでおくからお前はさっさと飯を片付けちまいな」

「あ、すみません」

蔵さんが弾の足をつかむとそのままずるずる引きずるように店内に連れて行った。蓮さんは残ったまな板と僅かに付着した血痕の処理をしている。

うん。まあ、何時もの五反田食堂の光景だから気にするだけ無駄だ。ほっとけば弾も戻るだろう、きつと。

おっと、せつかくの御飯が冷めるといかん。唐辛子を入れて煮込んだ鰯の煮付けに箸をのばした。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え？ 何の話？」

「だから、今度の学年別トーナメントの話よ」

「いい話？ 悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

休み明けの月曜日の朝。思春期の女子達で埋め尽くされた教室はかましい。

だが、今日は一段と教室の後ろのほうでスクラムを組んでいる一団がいた。それ以外の生徒は各々の席で教科書を開いて今日の授業の予習をしていたり、雑誌を片手に数人でだべっている生徒など幾つかのグループに自然と分かれている。

「そういえば藤原君や織斑君のISスーツってどこのやつなの？見たこと無い型だけねど」

「あー、確か特注品だとか…」

「俺も一夏も自社製でのオーダーメイドタイプだ」

俺たちの付近の席で数冊のISスーツのカタログを手に談話していた4〜5人のグループに答える。当たり前だが元々男性用のISスーツはないのでタバ姉のお手製だ。そのためか無駄に高性能なのだ。

女性用は一般的なスクール水着に近いが、俺たちのはサーフィンやスキューバダイビングで使用されるようなウェットスーツに近い作りとなっている。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検地することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行ないます。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止められることができます。あ、

衝撃は消えませんでしたのであしからず」

すらすらと説明しながら現れたのは山田先生だった。仕事の出来る女、を演出したかったみたいだが、

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから……ってや、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習はしてきてあるんです。えへん……って山ぴー？」

入学から二ヶ月。山田先生には8つほど愛称が付いていた。慕われているのか、それとも教師としてみられていないのか。前者であることを祈ろう。

そうこうしている間に教師を愛称で呼ばないように注意したところでまたマヤマヤだのヤマヤだの愛称が増えた。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

それまでざわめいていた教室が一瞬で静まり返り、席を離れていた生徒達は全員自分の席へ三秒もかからずに戻る。

これも教育の賜物か。入ってきたチー姉は昨日までのものとは違い夏用の薄手のスーツに変わっている。色こそ同じものの、よく見ている人が見れば一目でわかるだろう。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。忘れた者は学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わないだろう」

さらりととんでもない事を言う暴力教師。

学校指定水着：つまりはスクール水着は今では絶滅危惧種である紺色のものだ。幾ら似ているからとは言えそれは無いだろう。

それも今年は俺や一夏といった異性もいるのだからもう少し年頃の乙女達に気をつかってやれ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えたチー姉が山田先生にバトンタッチする。丁度眼鏡を拭いていた山田先生は慌てて掛け直す姿がわたわたしている子犬のようだ。

「ええとですね、今日は何と転校生を紹介します！」

いきなりの転校生の紹介に教室中がざわめく。もうそんな時か。

そう思っただけでぼんやりと見ていると教室のドアが開き入って来たのは長い金髪を首の後ろで束ねた小柄な美少年が一人だけ入ってくる。つて一人！？

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

にこやかな顔でそう告げて一例する『貴公子』に俺の表面は兎も

角内面では酷く動揺した。

地球から見ても月の裏側、そこにソレは存在した。

全長数キロに渡る巨大な人工物。光学迷彩により入念に隠されたその正体は船であった。

ある天才科学者達が夢を実現する為に作り上げた巨大な外宇宙航行船。

その外、星々が煌く宇宙を一つの人型が背中に背負ったロケットから淡いオレンジ色の粒子を放出し飛行していた。

曲線的でありながら鋭角的な装甲。スラリとした手足に装甲の中から見える人の目を思わせる二つのセンサー。ホワイトとグリーンのツートンカラーに塗られた人型は移動と停止を繰り返しながら宇宙空間でのデータ収集と実戦検証を行っていた。

開発者がガデッサと名付けたその人型は延々とテストを繰り返していた。

そしてその船の中。そこに彼女は居た。

「なにこれー、何でこんなふざけたEカーボンなんて使ってるの？分子配合がバラバラじゃない。これじゃあ安定した防御力は期待できそうにないよ。これじゃ使えるのはフレームだけで殆どが新規設計だよ」

薄暗いラボの中で解析していたパソコンから目を離した女性……

篠ノ之束は目の前のガラクタ、IS学園で廃棄処分されたはずのスローネ・ツヴァイの装甲をみてばやいた。

「まあいいや、どうせ強化して全体も原型がわかりにくいように改造するつもりだったからね。ガンダムに見えなければせつちゃんだって文句いわないだろーね。はい、じゃハロちゃんたち。設計図通りに作ってねー」

束の言葉に従うかのようにパソコンから送信されたデータを元に、作業ユニットに乗ったハロ達が作業を開始した。ある者は在庫のEカーボンを加工し、またある者はスローネの装甲を引っぺがしはじめる。

その光景をだまって見ていた束の懐にしまつてあつた携帯電話が鳴った。束にしては珍しく普通の着信音だ。

「うーん、だれだろ？ ハロハロー」

『お、束ちゃん久しぶりだな。俺だよ、俺』

「んー、どちらの俺様ですかー？」

『おい！ イアンだよ！ イアン・ヴァステイー！』

「おーおー、誰かと思えばロリコンイアンかー、久しぶりー」

『誰がロリコンだ誰が！』

「だつてさー、リンダさんとの歳の差とミレイナちゃん出産した時の年齢よく考えてよね？ 犯罪だよ犯罪。もしかして次のターゲットは束さん？ 束さんピンチ？」

『……もういい、今日は頼みたい事があるんだ』

「ほうほう？ この束さんをお願いってなにかなー？」

『一寸フランスで色々あつてだな、会社を辞めることになった』

「ふーん、社長の娘に手を出したとか？」

『ちげーよ！ いい加減そのネタから離れる！ ってリンド何だその手に持っている凶器は！？ 誤解だ、俺はシャルロットの嬢ちゃんとは何とも……ああ、もうとりあえず直ぐ日本に行くから詳しい事情はその時に、ってミレイナ、シエリリン信じてくれ！ 俺をそんな目で見ないで！……ガチャ、ツーツー……』

「……いやー、退屈しないね、あの一家は」

中々楽しい退屈しのぎにはなつたな、と携帯電話を手放す。電話は人工重力に従い机の上に落ちた。

ハ口たちは黙々と作業を進める。スローネの残骸を再利用した機体、『原初^{アルケイ}』の名を持つ機体の誕生を。

その別室では、

『未熟未熟未熟ウウウツッ！！』

『あまいな！ 私はここだっ！』

「……やはり正体を隠すには仮面か覆面だな。特にコレは、いいものだ」

モニターに映るとあるロボット格闘アニメに登場するドイツ国旗柄の覆面を被ったゲルマン忍者の姿を見て呟くクラリツサの姿があった。

スカウトしても完全には信頼していなかったのだから、監視をまかされていた八口はその呟きを聞かなかったことにした。

転校性は貴公子？（後書き）

クラリツサのISを募集します。

基本的にツヴァイクをベースに以下の候補からそれをモデルにした形にしようと思います。

締め切りは1月7日までで。

? ガンダムシユピゲール

? ガンダムデスサイズ系

? ケルデイルムサーガ

? その他

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3096p/>

ISDS インフィニット・ストラトス~DualStory~

2012年1月2日07時46分発行